



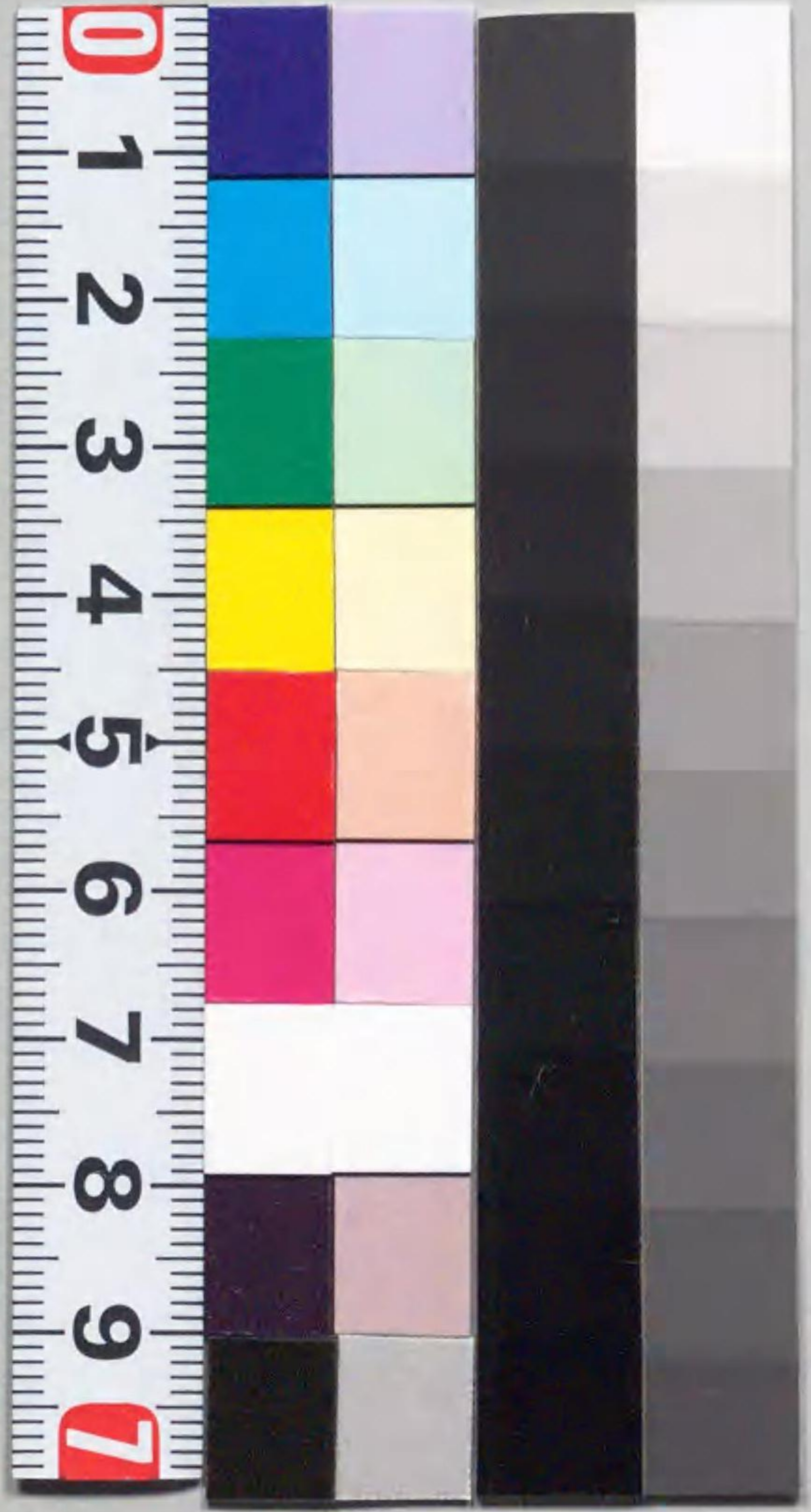
210.08  
Ko5483



00712685

X  
複写

2  
Ko











文學士 矢野太郎編

國史叢書

玉露叢 二

國史研究會藏版





文學士 矢野太郎編

國史叢書

玉露叢 二

國史研究會藏版



210.08  
K05483



712685

評議員

史料編纂官補	文學博士	文學博士	文學博士	文學士	史料編纂官	文學博士	文學博士
八代國治	黒川眞道	黒板勝美	辻善之助	田中義成	和田英松	渡邊世祐	萩野由之
	文學博士	文學博士	文學博士	文學士	文學博士	文學士	文學博士
	關根正直	三宅米吉	三上參次	菊池謙二郎	佐々政一	笹川種郎	松本愛重

(イロハ順)



## 例言

- 一、本編には玉露叢卷第廿一より最終迄を採收す。
- 一、一般讀誦の便を計れること及び其他の凡例は、既刊の諸書に同じ。
- 一、原本には只「何年」又は「何年より何年に至る」とのみありて、細目を擧げず。今搜索の便を計りて大略の目次を卷頭に附せる事、既刊の本書に同じ。





目次

卷第廿一卷

寛文十年

紀伊中納言光貞の簾中初て將軍に謁見す 水戸少將綱方薨去 狩野探幽泉涌寺の繪畫をものして銀子を給ふ 米澤田火 宇治田火 青山因幡守獻上 諸士に關東國廻りを命ず 末次平藏阿闍陀造りの船を造る 女中近江の子祿を給ふ 本朝通鑑獻上 永井伊賀守通鑑奉行たるによりて祿を給ふ 弘文院増祿 紅葉山御堂修補によりて物を給ふ 阿部忠秋賞祿 松平日向守城下風害水災 板倉重矩參内 十利に公狀を給ふ 柳生又右衛門賜祿

一頁

卷第廿二

寛文十一年

徳川頼宣逝去 京都の火災 光姫君逝去 板倉重矩加増 熊本の火災 耶蘇宗門改め 淺野内匠致仕 徳川頼信の遺物獻上 京都火災に付き金銀を下さる 奥州の火災 日光御法事に就いて大赦 阿部豊後守致仕 琉球王の書翰 中山王より捧物轉法輪左大臣薨去 正親町三條宰相逝去 平家琵琶の

二〇

目次

催 甲府宰相及び虎松殿の捧物 水戸采女正殿任官の御禮

卷第廿三

寛文十二年

井伊兵部死去 本多休山死去 高田御方逝去 長崎奉行任命 紀伊長福殿元服 松平新太郎隠居 西本願寺大僧正拜任 日光門跡へ御祈禱料寄進 伊勢山田の田火 池田光政の母卒す 寶樹院廿一回忌 保科正之卒去 林信篤等法眼に任ぜらる

三元

卷第廿四

寛文十三年より延寶元年迄

松平讃岐守登營 阿闍陀人御目見 隠元禪師遷化 内裏炎上 京都の火災 諸國の洪水 高野山火災 女御姫宮を生む 中山王より薩州へ御禮の捧物 土井大炊頭死去 觀世葛野兩人に紫の調免許 金地院後住及び隠居の御禮 増上寺曆天遷化 法皇新殿御移徙 將軍隅田川へ御狩

五五

卷第廿五

延寶二年

京都諸宗の人員 隅田川御狩 禁中作事奉行任命 高田御方三回忌 久我前右大臣薨去 本理院逝去 諸士縁組仰付けらる 諸士官位昇進

七二



卷第廿六

延寶三年.....一九〇

萬部經御修行 八丈島の物産 八條殿薨去 崇源院殿五十回忌 慈眼大師三十二回忌 公方隅田川へ鷹狩 禁裏女院御前へ献上の品 寺領寄附 松平萬徳丸等元服並に任官 京都の火災 松平主税死去 柳生又右衛門繼目の御禮 官位昇進の面々

卷第廿七

延寶四年.....二〇七

仙石因幡守御普請奉行となる 阿蘭陀かびたん御目見 本多作左衛門繼目の御禮 伏見殿御息女薨去 京都大阪の大風雨 津和野大地震 松平豊前守駿府城代となる 本理院殿三回忌 公方家御臺所薨去 増上寺出火 圓満院門跡薨去 隅田川鷹狩 寶樹院御遠忌 神田出火

卷第廿八

延寶五年.....二二四

女院御遠例 山本友仙上京 館林殿籙中安産の御祝儀 轉法輪右大臣薨去 高巖院贈位 各地の變災 官位昇進の人々

卷第廿九

延寶八年六月至同十一月.....三二〇

鹿兒島火災 將軍二の丸渡御 光圀卿諸書を獻ず 將軍家綱薨去 綱吉猶子となり二の丸に渡御 日光御門跡薨御 綱吉東叡山に參詣

卷第三十三

自延寶八年六月至同十一月.....三二〇

東福門院三回忌 本理院御法事の布施 嚴有院殿太政大臣を贈らる 上杉伊勢守御暇 將軍上野及び増上寺へ參詣 後水尾院崩御 綱吉將軍宣下 法皇崩御 諸寺住持任免 御加増の諸士 池尻宮内大輔御目見 將軍宣下につき特赦

卷第三十四

寺院雜觀.....二四七

寛永寺の寺號 天台宗僧衣服色の制 諸寺の別當 高野山開基 峰入り 江戸四ヶ寺 諸宗寺院の石高 鎌倉五山 關東檀林十八ヶ寺 武州四ヶ寺

卷第三十五

神社所領と寺社の縁起.....二七三

諸社所領 三所大權現 芝明神の縁起 穴八幡の縁起 山城愛宕山の縁起 清瀧明神の縁起 目白不動の縁起 氷川明神の縁起 湯島明神の縁起 高名和太子堂の縁起 水月觀音の縁起 金龍山淺

延寶六年.....二四二

二條關白殿若君元服 雲州出火 仁和寺門跡逝去 松平采女隱居 諸士縁組仰付けらる 甲府宰相綱重逝去 清泰院殿廿三回忌 松平新太郎室逝去 甲府中將家督相続

卷第三十

延寶七年.....二五八

熊本火災 大和筋檢地 播州筋檢地 館林綱吉卿若君誕生 照高院門院薨去 久世廣之卒去 河州檢地 館林徳松殿御宮參 江戸西本願寺再興 甲府中將婚體 官位昇進の面々

卷第三十一

延寶八年庚申の元朝より一年の吉凶を考へる.....二七四

延寶八年.....二七五

延寶八年の凶聞 松平綱矩閉門 嚴有院御法事につき安堵の面々 公私船の覺 改易仰付けらる 諸士 御代替起請文の事

卷第三十二

延寶八年.....二九五

草寺の縁起 武州山手山王權現の縁起 總州永代島八幡の縁起 高名和五智如來の縁起

卷第三十六

御軍役の次第.....二八七

諸國處々御城米の事.....二九〇

所々橋料の事.....二八三

京都三十三間堂に於ける箭數の事.....二九四

卷第三十七

延寶二年分の參勤御暇の控上.....二九九

遠國寺社年始の御禮 女院御所より年始の御禮 大阪目附御目見 勅使院使參府 紀伊殿參府 尾張殿御暇 吉良上野介御目見 水戸光圀卿參勤

卷第三十八

延寶二年分の參勤御暇の控下.....三三三

松平下總守參勤 眞田伊豆守致仕 細川豊前守參府 大久保山城守駿府城代に任命 土井兵庫頭參勤 勝仙院祈禱 松平新太郎參府

卷第三十九

延寶三年分の參勤御暇の控上.....三三五

勤 勝仙院祈禱 松平新太郎參府

卷第三十九

延寶三年分の參勤御暇の控上.....三三五

勤 勝仙院祈禱 松平新太郎參府

卷第三十九

延寶三年分の參勤御暇の控上.....三三五

勤 勝仙院祈禱 松平新太郎參府

卷第三十九

延寶三年分の參勤御暇の控上.....三三五

勤 勝仙院祈禱 松平新太郎參府

卷第三十九

延寶三年分の參勤御暇の控上.....三三五

勤 勝仙院祈禱 松平新太郎參府

卷第三十九

延寶三年分の參勤御暇の控上.....三三五

勤 勝仙院祈禱 松平新太郎參府



年始の御使京都へ参上 新正の賀詞を述べ 日光門主年始の御禮 長崎町奉行御目見 花山院大納言傳奏仰付けらる 公家衆御暇を給ふ 聖護院門跡著府 梶井門跡著府 竹内門跡著府 勅使院使 參著 御臺所より三門跡へ進物 松平源英參府 脇坂中務少輔御暇 織田主計頭を伊勢に遣す 智恩院門跡參府

卷第四十

延寶三年分の參勤御暇の控下 三六五

千種中納言傳奏役に任せらる 智恩院方丈參府

卷第四十一

年中御當家式時之服 三六二

年中式時次第上 三六四

一月元旦の儀式 三日の儀式 御詣初の次第 七種の御祝儀 御具足の御祝 端午の御内書を渡さる 御嘉定の儀 七夕の御祝儀 八朔の儀 重陽の儀 御玄猪の次第

卷第四十二

年中式時次第下 三六七

元旦の儀式 二日の儀式 三日の儀式 兵法講書初 御詣初 六日の祝儀 七種の祝儀 御具足の儀

祝儀 日光久能御鏡頂戴の儀 上巳の儀式 端午の儀式 御嘉祥に就いての儀 七夕の祝儀 重陽の祝儀 御玄猪の儀 玄猪の賜物

目次終



露叢 卷第廿一

寛文十年

紀伊中納言光貞の  
言中初  
簾中初  
將軍に謁  
見す  
長福殿初  
て御對顔  
につき下  
物あり

一、寛文十年正月十日に、紀伊中納言光貞卿簾中長福殿光貞卿息男を同道にて、大奥へ入らせらる。長福殿初て將軍家へ御對顔なり。此時御脇指來國・珊瑚珠十一・水玉二・水筒一、將軍家より長福殿へ遣さる。同じく御臺所より御料紙箱、但しかげごに御硯箱あり。草紙三卷、但し京名所盡し御翫人形大はりこ小鳥色々進らせらる。  
一、十一日に昨日長福殿初て御對顔に付いて、上使稻葉美濃守を以つて、左の通り遣さる。

一、時服十・二種一荷 紀井大納言殿へ  
一、時服廿・三種二荷紀伊中納言殿へ  
公方家より右の通り

寛文十年



一、時服三、安藤帶刀 一、時服三、水野對馬守 一、同二、小出權大夫 一、同二、  
長福殿守り 三上甚太夫 右は上使の次てを以て下さる。

一、御臺所御使近江を以て、

一、白銀三十枚・三種二荷、大納言殿へ 一、白銀三十枚・縮緬廿卷、中納言殿へ

一、白銀三十枚・三種二荷、中納言簾中へ 一、黄金五枚・三種二荷、長福殿へ 右  
之通り遣さる。

一、公方家より、一、銀百枚・縮緬廿卷・慶半鮑一箱 紀伊中納言殿簾中へ

同公方家より下さる。 一、時服二、佐野五郎三郎へ 一、白銀・時服等、總女中へ

御臺所より下さる。 一、白銀十枚、佐野五郎三郎へ 一、時服二、三上甚太夫へ

一、白銀・卷物等、總女中へ

一、十五日に先頃大奥に於て、初て長福殿御對顔に付いて左の通り献上。

一、黄金十枚・御小袖十 右は將軍家へ長福殿より献上。

一、御小袖五・三種二荷 右は將軍家へ紀伊中納言殿簾中より進上。

水戸少將  
綱方薨去

一、白銀三十枚・綿百把 右は御臺所へ長福殿より進上。

一、白銀二十枚・綿百把 右は御臺所へ中納言殿簾中より進上。

一、廿二日、水戸少將綱方逝去、是疱瘡に依りてなり。依つて水戸宰相殿へ稻葉美濃  
守を以つて、御香奠白銀三百枚進らせらる。

一、廿三日、高松殿へ作事料として、金子二千兩遣さる。此旨板倉内膳正へ次飛脚を  
以て相達す。

一、廿七日に御城女中近江死去。

一、二月二日に女中近江死去に付いて、今日白銀五百枚竝に米五百俵大久保出羽守  
を以つて、能勢治左衛門に下さる。是れ千部御經御執行仰付けらるゝに因つて也。

一、三日に松平大隅守光久、國元に於て作る龍眼肉を初て差上ぐる。

一、十日の夜戌の刻より、山城國竹田村北向の不動堂の前の相生の松焼出で、同十  
二日の寅の下刻に火鎮まる。是れ大木の由。同日に高木主水死去。同日に注進、溝  
口土佐守政勝在所にて去る頃死去。

松平大隅  
守光久初  
めて龍眼  
肉を獻ず



松平頼純  
加祿

- 一、十三日に岡田豊前守勘定願の通り役目御赦免。
- 一、十四日、永井伊賀守一萬石の御加増、都合三萬石にて京都所司代に仰付けらる。
- 一、十九日に水野石見守願にて、水野周防守弟十兵衛を養子とす。
- 一、昨十八日に松平左京大夫頼純へ、豫州に於て新規三萬石を給ふ。是れ紀伊亞相頼宣卿二男なり。
- 一、廿一日に鳥井兵部少輔弟鳥井彦次郎事宮内と改め、柳生飛驒守二男柳生又右衛門伊豫守に改め、船越百介等三人を中奥御小性に仰付けらる。同日に水野石見守死去。
- 一、廿二日に堀田備中守を土井能登守同役に仰付けらる。依つて永井伊賀守勤來りし御腰物方御鷹方の支配を致すべきとなり。
- 一、廿三日に水戸少將綱方遺物として御刀左弘行代金廿五枚同じく御臺所へ伊勢物語二條爲明筆
- 一、廿六日に建部丹波守事舊冬病死、依つて役の儀、弟主水を養子の願ひに依つて、遺領一萬石相違なく給ふ。

狩野探幽  
泉涌寺の  
繪畫をも  
のして銀  
子を給ふ

北條安房  
守役目御  
免

阿蘭陀か  
びたんか  
づげもの  
を給ふ

- 一、廿八日に溝口源左衛門奈良町奉行仰付けらるゝに依つて、五百石御加増、都合二千五百石。其上從五位下に敘し、豊前守に任ず。
- 一、晦日に狩野探幽今度泉涌寺の繪、畫するに依つて、銀子五十貫目を給ふ。
- 一、三月朔日に仰出されて曰く、「向後大名留守居の面々、諸御禮日に御城へ罷出て候事、其主人登城以後は用事なきに於て、早速退出すべし」となり。
- 一、四日に紀伊大納言頼宣卿家來久田玄心・友岡了桂へ小袖二つづつを給ふ。是は先頃大納言殿より差上げらるゝ渾天儀を、右兩人毎日罷出て仕掛るに付いてなり。
- 一、六日に永井伊賀守銀千貫目拜借なり。是れ京都へ引越すに付いてなり。
- 一、八日に大久保加賀守養子に同姓出羽守を仰付けらる。
- 一、九日に北條安房守病氣に依つて役目御免。
- 一、十日に建部主水繼目の御禮として、御太刀、黄金五枚、時服三差上ぐる。同じく丹波守遺物として小脇指、尻掛代金七枚を差上ぐる。同日に阿蘭陀人かびたん加美丹へ御暇に付いて、小袖三十を給ふ。同じく通事一人へ小袖二つづつを給ふ。



米澤出火

- 一、十二日に伊澤主水正に大久保加賀守跡役御小性組番頭を仰付けらる。
- 一、十八日に今城侍從唐橋秀方へ、方領百石づつを給ふ旨、兩傳奏へ傳へらる。
- 一、十八日・廿二日兩日、上杉喜平次城下米澤出火、侍屋敷・町家ともに以上二百九十軒餘焼失す。

宇治出火

- 一、廿五日に宇治に於て出火す。類火竹田道雲・同勘六・祝正久・河村宗順・堀真湖・山田祐竹・松原祐竹・山中瀬兵衛等なり。其外、家數百廿四軒焼失す。此刻石川主殿頭より家來を遣し防消す。

- 一、廿七日に溝口土佐守遺領、嫡子金助に相違なく一萬石を給ふ。

- 一、四月二日に水野監物忠喜城下岡崎町家より出火、町竝五町餘侍屋敷二十軒焼失す。

青山因幡守獻上

- 一、三日に青山因幡守より、鳳凰の御香爐・三條吉則の御槍を公方家へ献上。同じく御臺所へ古今和歌集伏見院 邦高筆を進上。

諸士に關

- 一、同日に關東國廻りを仰付けらるゝ面々。

東國廻りを命ず

- 一、安房・上總・下總・下野、是れ白河街道より東の方。右の國々は久保甚右衛門・松平次郎太夫・神尾彌右衛門。

武藏・相模・上野・常陸・下野の内、是れ白河街道より北の方。右の國々は松平與兵衛・蒔田八郎左衛門・倉橋長右衛門なり。

- 一、十日に高木主水正跡役高一萬石相違なく、嫡子高木勘解由に給ふ。

- 一、十八日、今度阿蘭陀造りの船、長崎に於て末次平藏に仰付けらるゝ處に、長崎より薩摩湯へ五日に著船。それより江戸品川浦へ十日に著岸す。是れ去年長崎にて米五百俵づつ遠廻りせし船なり。長さ十五間・横三間三尺一寸・深さ八尺一寸なり。艫六挺立なりと云々。彌、重ねて渡海の儀、快くば又々船數仰付けらるべき由にて、右の船御船手頭間宮造酒之丞・天野孫左衛門に御預なり。

- 一、十九日に大久保加賀守季任卒去。同日に小笠原彦太夫父安藝跡役の御船手頭を仰付けらる。同日に大目附黒川丹波守病氣に付いて願ひの通り役御免。

- 一、五月朔日に高木勘解由繼目の御禮として、御太刀目錄・黄金五枚・袷五を献上す。

末次平藏阿蘭陀造りの船を造る



同日に高木主水正遺物として御脇指左國弘代金十枚嫡男勘解由より差上ぐる。

一、十日に松平肥前守死去。美作守定房嫡男也

一、一昨八日に井上筑後守息内記死去。

一、一昨八日に山岡十兵衛死去。

一、十四日に牧野佐渡守より御臺所へ丁子爐釜田鳥海絲を献上す。

一、十五日に松田次郎太夫死去。

一、十六日に大岡忠次郎を大目附、徳山五兵衛を御勘定頭、能勢治左衛門、阿部四郎

五郎を御普請奉行に仰付けらる。

一、十七日に立花飛驒守入道好雪老母死去。

一、十八日に新御番頭大岡忠次郎跡役を萬年佐左衛門に仰付けらる。

一、廿五日に能勢山城守に二百俵御加増を給ふ。是れ女中近江の養子たるに依つて

なり。亦近江に下されし處の百人扶持をば、能勢治左衛門室へ五十人扶持、松平帶

刀室へ五十人扶持を給ふ。此兩室は近江娘たるに依つてなり。

諸士役目を仰付けらる

女中近江の子祿を給ふ

本朝通鑑獻上

永井伊賀守通鑑奉行たるに祿を給ふ

弘文院増祿

一、廿六日に土井能登守利房に御加増、五千石を給ふ。

一、廿九日に北條安房守死去。

一、六月一日に甲府宰相殿へ、駿府町奉行岡野長十郎、御目附戸田作右衛門兩人へ新規に三千俵を給ひ御附なり。長十郎本知九百五十石は養子平右衛門に譲り、作右衛門本知米六百俵をば嫡子善太夫に給はり公方家に勤む。且又長十郎は美作守に任じ、作右衛門は播磨守に任ず。後又伊勢守と改む。

一、十二日に弘文院に先年仰付らるゝ本朝通鑑出來に付いて差上ぐる。

一、十九日に永井伊賀守通鑑奉行を相勤むるに依つて、御腰物延壽岡資代金廿枚を拜領す。同日に弘文院御加増二百石を給ふ、都合千百二十石なり。外に九十人扶持を取來る。

同日に白銀百枚時服三、林春常。白銀百枚時服三、人見友元。銀百枚、坂井伯元。時服三羽織、林春東。白銀五十枚、上佐兵衛是は樂人なり通鑑に手傳ふ。白銀百枚弘文院弟子十二人へ。右の通り通鑑出來に付いて給ふ。

一、廿五日に大久保加賀守遺物として御刀備前友成代金三十五枚、葉茶壺右の通り。同じく御臺



大久保加賀守遺物を獻ず

所へ和漢朗詠集上下行成筆落敷 右の通り同姓出羽守より差上ぐる。

一、七月二日、去る頃仰せ出されし東國廻りの面々、今度風雨に付いて御延引、來年三月頃に遣さるべきよし。

一、九日に駿府町奉行岡野長十郎跡役を富永孫左衛門、御歩行頭孫左衛門跡役を曾我權之丞、右の通り仰付けらる。

一、廿二日に佐野圓阿彌事福阿彌と改む。

一、廿八日に板倉内膳正と同列にて永井伊賀守參内をなす處に、天盃を給ふ。京都所司代前後始めてなり。

一、八月五日に内藤式部少輔死去。

一、十日に本多内記家來茨木檢校に平家二句鈴木土佐房を仰付けらる。右畢つて白銀十枚・時服二、檢校に下さる。

一、十三日、智恩院御門跡京都への御暇に付いて、酒井雅樂頭忠清を以つて白銀三百枚・綿二百把を遣さる。同時に院家覺了院、是又御暇に付いて白銀二十枚竝に時

板倉内膳正永井伊賀守參内を賜ふして天盃を賜ふ内藤式部少輔死去

紅葉山御堂修補に於てより物を給ふ

服五を給ふ。同時に坊官岩波少進・園民部卿御家老角田伊織家來梅津頼母に白銀十枚づつを給ふ。

一、廿一日に紅葉山御堂修補出來に付いて、東叡山へ阿部豊後守を以つて白銀を給ふ。

日光御門跡へ白銀五百枚・二種一荷を遣さる。

白銀五十枚づつ、凌雲院・檀那院・知樂院

同三十枚づつ、圓覺院・勸理院。同廿枚宛、靈仙院・東漸院・最勝院・寒松院・護國院へ、

同十枚づつ、東圓院等覺院・林廣院・常德院・明王院・普門院・松林院・一乘院・覺成院・

双嚴院・元光院・泉龍院・修禪院・青龍院・福聚院・常賢院・顯性院・寶勝院・照心院・大日

院・妙善院・壽永院・寶戒寺・法泉坊・蓮乘院

銀五枚づつ、智樂院代僧六人へ、一、黄金三枚・時服二・羽織、淺井八右衛門

同斷、溝口傳左衛門、一、銀二十枚・時服二、鈴木修理

同斷、木原内匠、銀十枚づつ、紅葉山火の番長坂半兵衛・梶田六兵衛・龜岡半左衛



門・吉田竹右衛門・石崎九郎左衛門・渡邊源左衛門・柴田金左衛門・高木兵左衛門以上八人へ、

銀子十枚づつ、御宮御堂坊主道入・宗悦・宗興へ、一、同五枚づつ、高也・久齋・宗情へ

一、同十枚御被官大工吉本加右衛門へ、同十枚づつ山井安藝守・園播磨守・東儀淡路守・上佐兵衛・多内記・東儀大膳・山井左衛門・伶人以上七人へ

一、鳥目五百貫文は知樂院支配の御祈禱の出家、竝に御盛物坊主・下男とも御掃除方等に給ふ。

右は去る十九日紅葉山正遷宮に付いて下さる處なり。

阿部忠秋  
賞祿

一、同時阿部豊後守忠秋是又紅葉山の修補に付いて、諸事指圖致すに依りて御刀

信國代金  
廿五枚を給ふ。

黒川丹波  
酒井因幡  
守領知  
幡守領知  
を傳ふ

一、廿二日に黒川丹波守願に依りて隠居、領知千八百石嫡子與兵衛に下さる。同日に酒井因幡守願に依りて隠居、領知千五百石嫡子小平次に給ふ。同日に水野監物城下

岡崎侍屋敷より出火、町家竝にやはぎ橋焼失す。

松平日向  
守城下  
害水災

一、廿六日に松平美作守二男靱負を總領式に仰付けらる。

一、去る廿三日に松平日向守信之城下播州明石、疾風大雨依りて破損所々。

一、矢倉四ヶ所大破・門七ヶ所大破・塀百九十門餘倒る。

一、潰家五百軒、給人より足輕以下迄。

一、町家七十八軒潰る。一、死人男女十一人。

一、獵船百九十二艘破損 右の外小破の處々夥し。

一、九月四日に松平隼人正因幡守事去る廿八日に召出されし御禮として、今日御太刀・馬

代にて御目見。

一、十一日に本多美作守忠相、願の通り役儀御免。

一、大久保右京亮御留守居本多美作守跡役を仰付けらる。

一、十三日に渡邊大隅守二男渡邊右京奥御小性、渡邊半七郎奥小性に仰付けらる。

一、十四日に大久保右京亮跡役大御番頭三枝攝津守、御書院番頭攝津守跡役松平監

物、御小性組松平監物跡役酒井壹岐守是は只今迄奥小性なり。

本多美作  
守御役御  
免

傳奏役任  
免



一、十七日に飛鳥井大納言・正親町大納言兩卿、願の通り傳奏役、去る十三日に御免の由、今日江府へ申來る。

一、廿日に日野大納言・中院大納言兩卿、去る十五日に永井伊賀守宅にて傳奏職を申渡さる。

大坂大風雨

一、廿二日に松平新太郎光政母儀へ御合力米千俵を給ふ。同日と去る廿九日と右兩度大坂表風雨なり。取分け今廿三日の辰の下刻より午の刻迄甚雨疾風にて、大坂御城中の小屋竝に明家悉く破損大いなり。木津川口・四宮島川口へ高潮上り、御船藏八軒倒る。御船も破損に及ぶ。且又高林又兵衛・森川六左衛門與力四人・水主九人、次に與力の召仕の男女・水主の妻子、都べて百廿三人溺死す。尤も與力・水主の家其外海邊に居住の民等、一字も残らず押並べて漂流の旨なり。

右の烈風・強雨・高潮上るに依りて損失する故に、高林又兵衛・森川六左衛門に金子二百兩づつ、與力へ廿兩づつ、同心に七兩づつ拜借なり。

尼ヶ崎へも城の二の丸・三の丸へ潮水差込の由。

圍碁仰付けらる

一、十月朔日に北條久太郎願の通り隱居。領知一萬石養子左京實は北條右近大夫嫡子に給ふ。

一、七日に算新兵衛關東筋盜賊改めの役を仰付けらる。

一、十七日に圍碁を仰付けらる。依りて井伊掃部頭見物の爲め登城して、黒書院に於て卯の後刻より始まる。算哲先を置き道策九目勝。門人先を置き智哲七目勝。

一、又門入先にて智哲と打ち、門入二目勝。一、宗桂、角を落して宗興とさす、宗桂始め勝ち、宗興後勝。

一、十九日に北條久太郎隱居の御禮として、御刀備前景光代金七枚を差上ぐる。

一、廿三日に弘文院事、本朝通鑑調へる内九十人扶持を給ふ。今御書物御用仕舞とすへども、右の扶持方其儘御預の由なり。

一、廿四日に夜に入つて、御座間に於て岩船檢校・齋藤勾當兩人へ平家二句月見奈須與市を仰付けらる。

一、廿五日に牧野升イ稻葉美濃守外科白銀十枚を給ふ、是れ女中岡野腫物療治に付いてなり。

同日に御側小性岡部志摩守病者に付いて御役赦免。

弘文院扶持繼續



青木遠江守禁中方役人御免

一、廿八日に禁中方役人青木遠江守役御免。同日に内藤式部遺領五千石養子上野介に給ふ。

板倉重矩 參内

一、十一月四日板倉内膳正重矩江府參上の節

宸筆色紙屏風一雙・勅筆の折本 右は禁裏より

御香合 右は女院御所より

内膳正重矩江戸下著に付いて、右の品々を進らせらる。

一、十七日に松平豊前守大坂に於て死去。

一、十八日に小濱孫三郎關東にて知行替に付いて、御加増千石を給ふ。

一、廿四日に十刹の面々三十一人へ公狀を給ふ。御直判は和尚へ、御朱印は西堂、御

黒印は首座へ。此通り金地院へ渡さる。同日の晩勢州山田出火、家數五千軒餘焼

失す。

一、十二月一日に伊澤隼人入道三徳死去。

一、三日に内藤帶刀願の通り隱居。本高七萬石嫡子内藤左京亮、外に新田一萬石二男

内藤帶刀 隱居

十刹に公 狀を給ふ

遠山主殿是亦願に依りてなり。同日に岡田豊前守願の通り隱居。本高七千石の内六千石嫡子與三郎後將監と改む千二百石二百石は新田岡田左太郎に給ふ。是亦願に依りてなり。同日に水戸殿城下町家より出火、家數二百七十軒餘焼失す。

一、七日に參州矢矧橋御普請を來年仰付けらるべき由、其節は水野監物方より下奉行に家來を出すべきよし。

一、十八日に松平千松元服の御禮として、眞御太刀与貞代御小袖二十領、白銀三百枚を獻上す。此時從四位下に敘し、侍從に任じ、阿波守を兼ねる。且又御一字を給ひ

綱通と號す。時に御盃を頂戴ありて御脇指左安吉代金廿五枚を給ふ。同日に内藤左京亮家督の御禮として、御太刀目錄・黄金二十枚、御小袖を獻上す。同じく帶刀隱居の御禮として、御太刀・御小袖・御馬・黄金馬代、且又御刀來國光代金三十枚・御葉茶壺を獻上す。同日に内

藤左京亮嫡子五郎七郎下野守初て御目見、御太刀目錄を獻上す。同日に遠山主殿頭新發の地拜領の御禮として、御太刀目錄・黄金五枚・御小袖三を進上す。同日に岡田豊

前守隱居の御禮として、御刀左國弘代金十枚を獻上す。

松平千松 元服

内藤帶刀 及び左京 亮の進物

遠山主殿 頭増地の 御禮



松前八左衛門加増

妻木彦右衛門勘定頭御免

柳生又右衛門賜祿

久世土屋酒井侍從に任ず

一、十九日に紀伊大納言殿御病痾に依りて、御醫師澁江長怡を遣さる。則ち御暇に付いて黄金廿枚・小袖二を給ふ。

一、廿二日に松前八左衛門に五百石御加増、是去る頃蝦夷蜂起に付いて骨折の由。

一、廿三日大久保玄蕃頭願の通り隠居す。本領五千石は嫡子大久保四郎左衛門に給ふ。同日に妻木彦右衛門御勘定頭の役を御免。同日に大久保玄蕃頭隠居の御禮として御刀包利代金七枚五兩を獻上。同じく大久保四郎左衛門家督の御禮として、御太刀目録を獻上す。

一、廿五日に大岡忠四郎千俵の御加増を給ふ。

一、廿六日に大森信濃守千俵・酒井壹岐守千俵・稻垣市正四百俵・太田伯耆守三百俵、右の通り加増を給ふ。

一、廿八日に小笠原兵助・鳥居宮内少輔百俵づつ新規に給ふ。是れ中奥御小性なり。同日に柳生又右衛門に四百俵、新規に給ふ。

一、廿九日に紀伊黄門陪臣渡邊一學諸大夫に仰付けらる。同日久世大和守・土屋但

馬守・酒井河内守、右の三輩侍從に任ぜらる。

玉露叢 卷第廿一 終



玉露叢 卷第廿二

寛文十一年

徳川頼宣  
逝去

京都の火  
災

- 一、寛文十一年正月九日に、永井日向守尙清攝州高槻に於て死去。
- 一、十日に紀伊大納言頼宣卿紀州和歌山に於て逝去。
- 一、十二日未の刻に、松平駿河守領知丹波笹山にて出火。折節烈風に付いて侍屋敷九十一軒・町屋二百三十五軒焼失。
- 一、十五日午の上刻、京都六條中將宅より出火、強風にて公家竝に御所方役人、次に町家焼失。漸く申の上刻に鎮まる。禁裏院中は別條なし。
- 一、廿三日、女中近江一周忌に付きて、香奠として白銀百枚給ふ由、能勢治左衛門に老中より傳ふ。

戸田忠昌  
本多忠利  
寺社奉行  
に任ず

前田半右  
衛門岡庄  
左衛門の  
加増

光姫君逝  
去  
板倉重矩  
加増

- 一、廿五日に戸田伊賀守・本多長門守兩人、寺社奉行職を仰付けらる。
- 一、廿六日、役替を仰付けらる。所謂、御書院番頭武田越前守跡役水野越中守・御小性組番頭越中守跡役青山藤右衛門・新御番頭藤右衛門跡役神尾市左衛門・御歩行頭市左衛門跡役安藤治右衛門・御先手頭伏見勘七郎跡役本多左太夫。
- 一、廿八日、紀州へ上使として松平山城守を遣さる。御香奠白銀千枚を進ぜらる。
- 山城守御暇に付きて、御目見以後、黄金廿枚・時服五・羽織を給ふ。
- 一、二月五日に、前田半左衛門二千石の御加増、都合二千二百石にて禁中御役人青木遠江守跡役を仰付けらる。岡部庄左衛門に五百石の御加増、都合千五百石にて本院御所御役人中川飛驒守跡役を仰付けらる。前田半左衛門は安藝守に任じ、岡部庄左衛門は土佐守に任ず。
- 一、七日に阿部豊後守忠秋へ上使として、遠山半左衛門を以て籠鼻御壺を給ふ。
- 一、八日に紀伊中納言殿御息女光姫君京都に於て逝去、是れ一條大納言殿簾中なり。
- 一、十日に板倉内膳重矩事、一萬石の御加増を給ひ、都合五萬石に仰付けらる。上



意に曰く、當地城地なし、追つて明城の主に仰付けらるべき旨」と云々。同日に保福寺へ二百石寺領を寄附し給ふ。

熊本の火災

一、十三日に土御門新九郎福壽丸事より、使者を以て例年の如く、巳の日の祓を差上ぐる。

一、十四日に注進して曰く、「細川越中守綱利城下肥後熊本、去月下旬に出火して、侍屋敷・足輕町竝に町屋、都て家數五百軒に及び焼失す。同日に今井檢校總檢校名代として下著。これ京都に於て總檢校へ屋敷を給ふに依りて、尤も御禮として一束一本を差上ぐる。

耶蘇宗門

一、十六日、去々年仰出されし國廻りの六人を召し、當五月下旬に彌遣さるべき由。

一、十八日に青木遠江守へ、耶蘇宗門改めの役竝に御作事奉行を兼ねて仰付けらる。

一、廿日に隅田川木母寺へ廿石の寺領御加増あり。

一、廿三日に醍醐町屋出火、家數六十二軒焼出す。

一、廿六日に天徳寺に於て、高田御方の御葬禮あり。

一、三月朔日に將軍家大廣間へ出御、阿蘭陀加美丹御禮あり。捧上の物二十九色なり、品々は略す。

高田御方の葬禮  
阿蘭陀人入貢

淺野内匠致仕

一、五日に淺野内匠頭長直願の通り隱居、本高五萬三千五百石の内、五萬石嫡子采女正三千五百石養子淺野内記、外に新田三千石養子孫淺野長三郎、是又願に依りて分ち仰付けらる。

一、七日に保科肥後守城下奥州會津出火、侍屋敷竝に民屋數多焼失す。城中は別條なし。

一、十六日に注進、駿府番所に於て上村志摩守病氣大切の由、依つて澁江長怡を遣さる。

一、十九日に勢州山田、去年出火に付いて、金子一萬兩拜借。十箇年に上納仕るべき由、桑島丹後守へ仰渡さる。

一、同日に、紀伊大納言殿御遺物御掛物塞翁畫は柴階一山公方家へ、御硯箱萬の細道御臺所へ、右の通り黃門より、使者松平九郎左衛門を以て差上げらる。

一、廿二日に淺野内匠頭長直、隱居の御禮として御刀大和包永代金廿枚を獻上す。同日に永井

徳川頼宣の遺物獻上



日向守遺物として、御刀備前兼光代金十五枚、御畫一卷花鳥、舜舉筆、右の通り同姓市正尙時より差上ぐる。

一、廿三日に大御番衆を殿中に招き、總組中大津に於て御切米取り來り候へ共、常願ひ奉るに依りて、向後は二條御城米を下さるべき旨なり。同日、大坂御番の一番の面々、當年より七月代りに仕ふるべき旨なり。同日去る正月京都火事に付いて、門跡方、公家衆其外類火の面々へ金銀を下さるゝ旨、京都に於て相達すべき旨、永井伊賀守方へ仰遣さるゝ。所謂、

銀二百枚三寶院、同二百枚梶井、金五百兩轉法輪三條、金二百兩油小路大納言、金二百兩四辻大納言、同百五十兩今城宰相、同百五十兩梅園中將、同斷橋木中將、同斷下冷泉少將、同斷岩倉宰相、銀三十枚轉法輪中納言、同斷今城少將、同三十枚四辻少將、同百枚准后、同三十枚法華寺、同五十枚大西局、同三十枚理性院、金三十兩岩倉友古、同斷山形右衛門、金二十兩辻伯耆、同二十兩辻因幡、銀十枚辻將監、同十枚辻左兵衛、金二百二十兩三宅玄蕃、同百十兩屋敷半分河原彈正、同八十兩河原

京都火災に付き金銀を下さる

宗清、同斷三宅權之助、同七十五兩福田藤左衛門、同廿五兩屋敷半分布施庄左衛門、同十七兩同宮崎市右衛門、同斷長坂新右衛門、同四十五兩吉見外記、同斷松室掃部、同四百八十兩伊賀衆十二人但一人に付、四十兩づつ、同四十五兩石川半介、金四十五兩本間字右衛門、同四百十八兩御臺所八十一人但一人に付、十八兩づつ、金四十五兩三宅新介、同三十三兩御賄九人但一人に付、十七兩づつ、同四十兩鳥山孫兵衛、同二百兩本同心十人但一人に付、二十兩づつ、六十兩坊主三人但一人に付、二十兩づつ、同百九十五兩御小人十三人但一人十、五兩づつ、同七十五兩下男十人但一人に付、七兩づつ、此組、同三百三十六兩築田隱岐守與力七人一人に付、十、八兩づつ、同二百十兩同心三十人但一人に付、七兩づつ、同五十兩矢部主膳、同二十兩矢部左衛門、同五十兩原監物、金五十兩杉江勘解由、同四十兩伊賀衆二人、同三十兩松平豊後守組與力一人、同三十兩岡部庄左衛門組與力一人、同三十五兩松下豊前守組同心五人但一人に付、七兩づつ、同三十五兩岡部庄左衛門組同心五人但一人に付、七兩づつ、同六十兩鈴木淡路守組與力二人、同十兩同人組半分與力一人、同十五兩小笠原丹後守組與力一人、同百十九兩鈴木淡路守組同心十七人但一人に付、七兩づつ、同三十五兩小笠原丹後守組同心五人但一人に付、七兩づつ、同三



兩鈴木淡路守組與力同心一人

右之通り金銀を給ふ。

大坂加番の交替期

一、廿三日に大坂加番代りの事、今より以後は七月相替り申すべき旨、例年は八月初に相替り候へ共、其節は洪水の時分故、難儀に及ぶに付いてなり。

一、廿六日に岡部左近・石谷五右衛門・川口源左衛門・大岡五郎右衛門・日根野權十郎、以上五人御目附役を仰付けらる。

一、四月二日、今度御法事に付きて女御々方より、石川壹岐守を遣さる處に、去月二十三日に勢州桑名渡海の時、難風に遇ひて壹岐守共に上下六人溺死す。

一、四日に尾張殿より、財産として將軍家へ絲縫二枚・屏風一雙、御臺所へ御花入金<sup>唐</sup>、御花臺二を獻ぜらる。同日に大手・内櫻田・外櫻田・馬場・先・和田倉、右の御門番面々、西の丸へ向後御成たりとも、當番の面々番所へ出るに及ばず、御鷹野の節は御番所へ出らるべきとなり。

奥州の火災

一、六日に日光山に於て、萬部の御經始まる。同日に丹羽左京大夫城下奥州二本松、

侍屋敷三十七軒町家少々焼失す。

一、七日に、上杉喜平治城下奥州米澤出火、侍屋敷七十軒餘・町屋二百八十軒餘焼失す。

一、八日役目仰付けらる面々、小十人番頭田中孫十郎・御槍奉行榊原左衛門・御持弓頭渡邊半三郎・御弓頭寛勘右衛門・御鐵炮頭河野源右衛門・御小性組與頭稻垣藤九郎・御步行頭藤堂主馬・同斷能勢惣十郎・同斷佐野内藏助・同斷駒木根長右衛門。

一、廿六日に品川式部大輔卒去。

一、廿七日、今度日光に於て御法事に付いて、江府に於て輕罪の者御免なり。尤も京・大坂・奈良・伏見・佐渡・長崎へも次飛脚を以て仰遣さる。

一、五月六日に、長崎奉行松平甚三郎跡役を牛込忠左衛門に仰付けらる。

一、十九日に齋藤美作守卒去。

一、廿六日に關東國廻りの御暇、黄金・時服・羽織等拜領す。品は略す。

一、廿八日に伊達兵部大輔領知三萬石、松平陸奥守高の内に付いて、今度返し下さ

日光御法事に就いて大赦



る由。

一、廿九日に高木權右衛門事、願の通り隠居す。本領二千三百石は養子新兵衛に給ふ。同日に伏見勘七郎願の通り隠居、本領千石嫡子勘十郎に給ふ。同日に森河攝津守領知千石の内、同姓平子主水へ遣し度き由、願に依りて仰付けらる。主水は下總守猶子なり。

圓滿院殿  
逝去

一、六月二日に圓滿院殿逝去。

阿部豊後  
守致仕

一、三日に常陸下總の内、手賀印幡の新田高四萬四千石の内、三萬四千石は守屋權太夫・一萬石は曾根五郎左衛門に御代官を仰付けらる。同日に阿部播磨守家督の御禮として、御太刀・白銀・時服十を獻上す。同姓豊後守隱居の御禮として、御脇差貞宗代金七十枚・青貝の御香合を公方家へ、伏見院歌書竝に青貝の御食籠を御臺所へ獻す。

一、十七日に長崎奉行牛込忠左衛門事、金子千兩拜借す。

一、十八日に白檀一本・阿蘭陀箱一つにこゝる一本・文字目鑑大小二つ・鼈甲の徳利一對・枝珊瑚珠二つ、右品々日光御寶藏へ納め給ふ。

一、廿四日に攝州多田院・甲州惠松寺へ寺領を御寄附し給ふ。

一、七月十九日に、戸田采女正願の通り隠居、領知十萬石残らず嫡子左門に給ふ。

一、廿一日、保科市正死去。

一、廿六日に松平大隅守へ上使高木伊勢守を以て、米二千俵を給ふ。是は今度琉球人を江府へ召連るゝに付いてなり。

一、廿八日に琉球人、松平大隅守屋敷より登城して、御禮を申上ぐる。

琉球國王書翰の文に云く

琉球王の  
書翰

謹令呈上一翰候。抑、去歲吾薩州之大守光久、奉鈞命而令予嗣琉球王之爵位、因

茲爲奉述賀詞、使小臣金武王子きんむわんじ附于光久、獻上不腆之土宜候。伏冀以諸大老

之指南、可達台聽儀可仰候。誠惶不宣。

寛文十一年五月廿五日

中山王尙貞判

板倉内膳正殿

土屋但馬守殿

久世大和守殿

寛文十一年

三



稻葉美濃守殿

將軍家巳の後刻大廣間へ出御、御上段に著御、御長袴を召す。

一、中山王よりの土宜

御太刀・馬代・銀子五十枚・大卓黒塗青二面・中央丸卓二本柱堆朱青貝但し二面・籠飯青貝

折二對・練芭蕉布三十端・綾芭蕉布三十端・大平布百匹・久米綿百把・泡盛酒五壺。

一、金武王子自分の獻上、左の如し。

官香十箱・香餅香五箱・練芭蕉布十端・綾芭蕉布十端・泡盛酒五壺。

一、今度琉球人來朝に付いて附來る人の名、將軍こえく越來親房・垣本親雲上・稻福親雲上・

津波古親雲上・前田親雲上・河上親雲上・宇良親雲上・金城親雲上・新川親雲上・伊計親

雲上・平安山親雲上、是より以下小性六人、保榮茂里子・大城里子・思次郎・直三郎・太郎

兼・松兼、以上。

一、返簡の文に云く、

使价金武來貢、芳簡披閱、面話惟同。抑、去年從薩州大守光久、就申達琉球國傳封

中山王よりの捧物

金武王子より捧上の品

之儀、爲安堵之賀儀被獻進士宜件々、使者捧之登營如數披露之、奉備台覽之處、使者被召出而奉拜、御前御氣色殊宜。幸甚々々、可被安遠懷、猶又諭使者畢、不宣。

寬文十一年八月九日

- 從四品侍從兼內膳正源朝臣重矩
- 從四品侍從兼但馬守源朝臣數直
- 從四品侍從兼大和守源朝臣廣之
- 從四品侍從兼美濃守越知宿禰正則

回報中山王 館前

使者金武遙來芳墨入手、欣然不淺。抑、琉球國可被傳續之旨、去年從薩摩國主光久、就申達之、爲安堵之慶賀、而進獻土產如目錄、使者持參登城、即遂披露奉備上覽之處、被召使者於御前奉拜謁畢、御喜色快然可謂幸也。莫勞遠想、猶使者可演說者也。

寬文十一年八月九日

從四品少將兼雅樂頭源朝臣忠清



回答中山王 館前

金武王子  
登營

一、八月九日、則ち琉球人へ御暇を給はるに付いて、松平大隅守・同修理大夫同道して、金武王子登營す。大廣間下段に中山王への遣さる物を積置く。此時御次の間へ金武王子中座す。老中上意の趣を傳達す。次に三の間にて金武王子への下され物、老中傳達す、金武謹んで頂戴すと云々。

一、十日、今度河越仙波御宮修復出來正遷宮に付いて、白銀五十枚上野凌雲院、時服三・白銀十枚仙波の中院、白銀百五十枚仙波總僧中へ給ふ。

浮寧院遺  
物獻上

一、十三日に、白銀百枚、時服五、黄檗山萬福寺木庵時服三、小田原紹泰寺鐵牛兩僧へ御暇に付きて給ふ。同日に、東本願寺隱居、次に浮寧院去る頃遷化に付いて、遺物葉茶壺横將軍家へ獻上。拾遺和歌集實名筆御臺所へ獻上す。使者は松尾左近なり。同日に戸田采女正隱居の御禮として、御脇差行光七十代金五枚御掛物無筆自畫を公方家へ獻上。御臺所へは時代不同の歌合二卷詞書後圓融院繪は土佐筆を進上す。同姓左門家智の御禮として御太刀目録黄金三十枚、時服二十領を差上ぐる。

一、十五日に、松平陸奥守綱基陪臣石川民部宗弘、當春綱基陪臣原田甲斐儀に付きて仰渡さるゝ趣、有難く存じ奉る由にて、仙臺より總代に參上。御太刀・馬代・時服三獻上し奉りて、御禮を申上ぐる。同御太刀・馬代・時服三、伊達兵庫安藝子御太刀・馬代・時服二、柴田中務外記右兩臣は亡父跡式相違なく仰付けらるゝに因りて、御禮申上ぐる。

一、廿五日に轉法輪左府公薨去す。

轉法輪左  
府公薨去  
正親町三  
條宰相逝  
去

琉球人難  
船

一、廿八日に正親町三條宰相逝去す。同日に、江府大雨強風に付いて、淺草川昨夜より以ての外増水なり。依りて兩國橋を見分として、昨晚久世大和守・兩町奉行・御勘定頭衆相越さる。今朝に至りて彌、大水の由、且又六郷の橋も五十間餘押流す由。一、九月三日注進して曰く、「琉球人去月廿六日の晩熱田に一宿、翌廿七日の朝渡海の處に、四五里程乗出して難風に遭ひ、琉球人乗る三艘の内一艘は桑名へ著津す。二艘は尾州知多郡の内、多屋村・大野村此兩所へ吹付けらる。其外下々乗り申す船四十九艘の内五艘は、知多郡の内北條村・森村へ著岸す。一艘は勢州の若松へ漂著



中根宗閑  
死去

す。然れ共琉球人を始めて松平大隅守家僕に至るまで、異事なし」と云々。

一、四日に中根壹岐入道宗閑死去す。同日に注進、水戸殿領内洪水に依りて、水損の地八萬石程ある由。同日に松平備後守政元、在所に於て死去す。

一、廿三日、小笠原遠江守願に依りて、領知の内新田一萬石を弟隼人へ分ち給ふ。同日に内藤豊前守願に因りて、領知の内新田を五千石弟三左衛門に分ち給ふ。同日に稻垣信濃守願に依りて、領知の内新田千五百石、伯父稻垣藤九郎に分ち給ふ。

一、廿五日、松平越後守光長へ上使井上相模守を遣さる。是れ去る頃、九條廉貞院逝去に付きてなり。

平家琵琶  
の健

一、十月十六日に荒木十左衛門死去。同日に兩宮對馬守死去。

一、廿日に圍碁・象戲を仰付けらる。暫く高覽ありて入御。碁・象戲勝負知れず、依つて翌廿一日に稻葉美濃守宅にて打つ。爰に於て勝劣極る。

一、晦日に松平備後守遺領三萬石を、異事なく息池田豊前守に給ふ。同日に小笠原遠江守家來香坂檢校松平阿波守家來山下檢校を營中へ召して、平家を仰付けらる。

池田豊前  
守繼目の  
御禮

紅葉橋合戦二句香坂檢校、月見二度の掛二句山下檢校、右畢りて兩檢校時服二つ宛拜領す。

松平輝綱  
死去

甲府宰相  
及び虎松  
殿等の繪

一、十一月五日に、池田豊前守繼目の御禮として、御太刀目録黄金十枚・時服六を進上す。同じく松平備後守遺物として、御刀來國後代金を豊前守より上る。

一、十六日に小笠原丹齋へ、去る頃仰付けらる御式正の御弓箭出來に付きて差上ぐる。御弓二拾張の内、青漆の弓・黄漆の弓・赤漆の弓・白漆の弓・黒漆の弓・三所籐の弓・村重籐の弓・示禽の弓・卦束の弓・紫の弓、右何れも二張づつなり。御鎗箭は愛敬の鎗箭・三角目の鎗箭・染羽の鎗箭・楊柳の鎗箭・荒目の鎗箭なり。何れも一手づつ。

一、十二月十日に、細井左治右衛門役所破損料として、金子百兩を給ふなり。

一、十二日に松平甲斐守輝綱死去。

一、十五日に甲府殿御嫡虎松殿大奥に於て始めて御對顔、依りて虎松殿より公方家へ縹紗廿卷・白銀廿枚、甲府宰相殿より公方家へ二種一荷、同宰相殿より御臺所へ一種一荷、甲府殿母堂順性院殿より公方家へ御肴一種、御臺所へ御肴一種を献上せ



佐竹義嘉  
卒去

らる。虎松殿より女中をれくへ白銀を贈らる。公方家より甲府殿へ御小袖二十  
二種一荷、虎松殿へ當麻の御脇指、御臺所より虎松殿へ御香具一通を進ぜらる。  
一、十九日に、去る五日に羽州秋田に於て、佐竹修理大夫義隆卒去に付、今日上使と  
して本多長門守を以て、佐竹右京大夫方へ香奠銀三百枚を給ふ。同日に太田備中  
守願の通り隠居、本高三萬五千石の内三萬二千石嫡子攝津守、五千石の内二千石は  
新發の地なり。二男式部に給ふ。是亦願に依りてなり。同日に本多對馬守願の通  
り隠居、嫡本多對馬守に本高八千石相違なく給ふ。同日に、阿部備中守子作十郎事、  
成長仕るに付きて、故備中守本知九萬八千石を作十郎に讓與仕りたき由、阿部伊豫  
守度々の願に依りて仰付けらる。

本多内記  
跡職の事

一、廿三日に本多内記跡職の事、本高十五萬石の内九萬石本多中務少輔和州郡山城主に仰  
付けらる。但し只今まで中務少輔取來る三萬石共に都合十二萬石なり。十五萬石  
の内六萬石は、内記嫡子本多出雲守に仰付けらる。九萬石は中務少輔父甲斐守正朝  
遺領を内記預りしに依りて、今又元の如くに仰付けらる。

水戸采女  
正殿任官  
の御禮

太田攝津  
守家督の  
御禮

一、廿五日に水戸宰相殿御男采女正殿、正四位下少將に任ぜらるべき由を、板倉内膳  
正を上使として仰遣さる。同日に徳川采女正殿元服の御禮として、御太刀目録・黄  
金二十枚・綿百把を献上し給ふ。公方家より綱の御字を給ひて綱條と號す。御盃の  
上にて御刀友成を給ふ。同日、宰相殿より御禮として、御太刀目録・時服五つ獻ぜらる。  
同日に阿部作十郎本知を給ふ。御禮として、御太刀目録・時服十・黄金三十枚を献上  
す。同日に太田攝津守家督の御禮として、御太刀目録・時服六・黄金十枚を献上す。  
同太田式部分地の御禮として、御太刀目録・金三枚を進上す。同備中守隠居の御禮  
として、御太刀目録・御刀來國光代金廿五枚を獻進す。備中守より御臺所へ軸物雪舟五十首和  
歌飛鳥井榮雅筆を献上す。同日に本多對馬守家督の御禮として、御太刀目録・金五  
枚を獻ず。同本多美作守隠居の御禮として、御太刀目録・御掛物福祿壽雪舟筆を獻ず。  
同日に水野小左衛門願の通り隠居。同日に本阿彌光寮病氣に付きて、願の通り隠居  
す。子市郎右衛門に百石に十人扶持を給ふ。同日に松浦肥前守内々願の通り江府常  
詰を仰付けらる。



諸大夫に  
任ぜられ  
し人々

玉露叢 卷第廿二

一、廿八日に諸大夫に仰付けられし面々、阿部作十郎を對馬守、九鬼千之介を和泉守、小笠原隼人を備後守、戸田新十郎を采女正、松平松千代を主計頭、石川惣十郎を日向守、加藤五郎八を遠江守、内藤佐兵衛を和泉守、松平半左衛門を豊前守、荒川右近を出羽守、新庄宮内を長門守、青山藤右衛門を信濃守、松平長五郎を備後守、田中主殿を則ち主殿頭、土屋主膳を備前守に任ぜらる。同日に金森飛驒守死去す。

玉露叢 卷第廿二終

玉露叢 卷第廿三

寛文十二年

井伊兵部  
死去  
宗對馬守  
賜祿

- 一、正月六日に井伊兵部少輔、在所掛川に於て死去。
- 一、十四日に宗對馬守へ上使として、久世大和守を以て白銀三百枚竝に小袖三十を給ふ。之れ去る冬朝鮮國出火の節、對馬守彼地の藏屋敷類火に依りて、例年より早く御暇を給ふに依りてなり。
- 一、廿四日に女中近江來る。廿七日三回忌に付き、法事料として白銀百枚を能勢治左衛門に給ふ。
- 一、廿六日に三州松應寺後住に結城の弘經寺龍。弘經寺後住には増上寺一鷹を仰付けらる。



侍小者中間出替り期規定

一、廿八日に諸大名衆へ仰渡さるは、侍小者中間出替りの事、御旗本の通り三月五日たるべきとなり。同日に内藤豊前守城下奥州棚倉町屋より出火、烈風にて類火夥し。大手榭形の矢倉・二の丸の藏屋敷・二の曲輪くまわの門・門三箇所・侍屋敷百十七軒・足輕家五十軒・町屋二百廿八軒・寺九箇寺と云々。

本多休山死去

一、二月一日に、本多休山死去。  
一、四日に讚州直島高原數馬上り地、御代官彦坂九兵衛に御預。

天樹院七回忌

一、六日に天樹院御方七回御忌。傳通院に於て御法事相濟むに依りて、御布施を給ふ。

傳通院へ銀二百枚 弘經寺へ三十枚 光明寺へ廿枚

大光寺へ廿枚 靈巖寺へ十枚 新知恩寺へ十枚

誓願寺へ五枚 本誓寺・靈巖寺・天德寺・西福寺・雲光院・無量院・大養寺・正行寺、是亦五枚づつ。

月行司十二人同五枚づつ 總僧中へ鳥目三千貫文

本多内記遺物進上

且又御臺所より傳通院へ銀百枚に時服六を給ふ。

一、八日に本多内記遺物として、公方家へ御刀伯州安國代金七十枚・御葉茶壺・穗海を献上す。御臺所へ和漢朗詠集後伏見院宸翰なりを進上す。

一、九日に佐竹修理大夫跡職を相違なく、嫡右京大夫に仰付けらる。同日に松平甲斐守跡職の儀、本高七萬五千石の内、嫡子松平齋之介に七萬石、二男萬千代に五千石を分ち給ふ。

一條禪閣薨去

一、十二日に一條禪閣薨去。

一、十三日に能勢治左衛門千石の御加増、都合四千石にて京都町奉行兩宮對馬守跡役を仰付けらる。

一、十八日に松平内記願の通り隱居。

一、廿一日繼目の御禮の面々、所謂眞の御太刀利恒・三百把黄金五十枚、佐竹右京大夫より献上す。黄金廿枚・御小袖十、松平齋之介より献上す。黄金三枚・松平萬千代分知の御禮として差上ぐる。同日に佐竹修理大夫遺物として、公方家へ御刀長光代金廿三枚・御茶

繼目御禮の面々



高田御方  
逝去

入宗無御臺所へ御屏風一雙雪村筆代を献上す。同日に松平甲斐守遺物として、公方家へ御刀左安吉代御掛物寒山拾得銀五十枚御臺所へ軸物後光殿院宸筆十枚を献上す。同日に、御小性組番頭松平内記跡役を内藤上野介に仰付けらる。同日晩方、高田御方逝去。天徳寺に於て御葬禮御執行。

一、廿四日に松平越後守へ上使として、稻葉美濃守を以て御香奠白銀千枚を遣さる。同じく御臺所より白銀百枚を遣さる。

一、廿七日に高田御方一七日に付きて、天徳寺へ御名代として土屋但馬守參詣。

一、三月一日に片桐石見守嫡子長十郎病氣に付きて、願の通り二男三郎兵衛を總領職に仰付けらる。

一、三日に阿蘭陀人御目見、進上物十七品を捧ぐ。品々爰に略す。

一、五日に金森飛驒守跡式を嫡子萬助に仰付けらる。本領仔細なし。同日に井伊兵部少輔跡式を嫡子伯耆守に仰付けらる。本領仔細なし。

一、九日に金森萬助繼目の御禮として、御小袖六・綿百把黄金二十枚、尤も萬助幼少

阿蘭陀人  
御目見  
金森飛驒  
守跡式を  
嫡子萬助  
に仰付け  
る

金森萬助  
繼目の御  
禮物献上

長崎奉行  
任免

たるに依りて名代を以て差上ぐる。同じく金森飛驒守遺物として、御刀新藤五國光代御掛物仙竺差上ぐる。同日に井伊伯耆守繼目の御禮として、御小袖六・黄金十枚を献上す。同じく井伊兵部少輔遺物として、御刀備前長光代御葉茶壺を差上ぐる。

一、十六日に長崎奉行河野權右衛門事、願の通り役御免。

一、廿二日に野々山肥前守參府の節、相州佐川に於て頓死す。

一、晦日、岡野孫九郎五百石の御加増、都合千五百石にて長崎奉行河野權右衛門跡役を仰付けらる。同日に大久保甚右衛門に御普請奉行能勢治左衛門役を仰付けらる。

一、四月九日に、石川美作守事御側衆列に仰付けらる。同日に土岐伊豫守千俵の御加増にて、御小性組頭石川美作守跡役に仰付けらる。

一、十五日に高田御方御遺物として、御屏風一雙能誦繪狩所へ當麻曼陀羅六字名號古今集爲遠を進らせらる。同じく御臺

一、十八日に松平安藝守願の通り隱居。家督の事は相違なく嫡男彈正大弼へ仰付け

高田御方  
遺物進上



高田御方の家臣任用能勢治左衛門日向守となる

脇坂中務少輔龍野に封ぜらる

紀伊長福殿元服

らる。

一、十九日に高田御方家臣津田宇右衛門子内記を願の通り召出さる。

一、廿七日に能勢治左衛門を日向守に任せらる。

一、廿九日に保田若狭守願の通り隠居。

一、五月十四日に、脇坂中務少輔を召し、將軍家の命に曰く、「年來忠勤にして其上堀田加賀守二男たるの間、御心易く思召さるに依りて、播州龍野は大阪近所に付きて、本高五萬三千石を以て所替を仰付けらる。尤も龍野は往古の城地たるの間、連連を以て城取立つべき旨なり。退去以後御次の間に於て、銀子三百貫目を拜借す。

一、十八日に紀伊長福殿元服。常陸介に任じ綱の一字を給ひ、綱教と號す。依りて祝儀として常陸介殿より御太刀倫光代金百五十貫黄金三十枚・時服三十を獻ぜらる。同じく紀伊中納言殿より御太刀・金馬代・黄金十枚・綿百把を獻ぜらる。公方家より常陸介殿へ御一獻の上にて御小脇指來國俊を進ぜらる。同じく御臺所へ紀伊中納言殿より縮緬二十卷、徳川常陸介殿より白銀百枚を獻じ給ふ。同日に松平彈正大弼家督の御禮と

松平安藝守隱居に付き禮御進上

松平新太郎隱居

して御太刀行光代金十枚黄金五十枚・時服五十を獻上す。同日に松平安藝守隱居の御禮として、御太刀・金馬代・綿百把を進上す。且又御小脇指代金五千貫御茶入玉堂を公方家へ、古今集を御臺所へ差上げらる。同じく安藝守隱居。彈正大弼家督の祝儀として、安藝守室より縮緬二十卷・二荷二種、彈正大弼室より曝二十四・二荷二種を獻上す。同じく御臺所へ松平彈正大弼より右の祝儀として、白銀五十枚竝に縮緬三十卷を進上す。

一、六月五日に、淺尾長澤死去。同じく桑島孫六死去。

一、十一日に松平新太郎願の通り隠居。本高三十一萬五千石餘の内三十萬石は嫡子松平伊豫守、二萬石是は古新田也は二男池田信濃守、一萬五千石本内は池田主税に分ち給ふ。是亦願に依りてなり。

一、廿五日に禁裏へ御伽羅沈香・麝香、本院御所へ御伽羅・麝香を宿次を以つて進らせらる。

一、閏六月一日に、堀美作守信州飯田へ本高にて所替を仰付けらる。依りて引料と



して銀百貫目を給ふ。

一、三日に板倉内膳正元高にて、下野の烏山の城主に仰付けらる。

一、五日に高松殿稱號を有栖川と改め給ふ。

一、九日に松平伊豫守家督の御禮として、御太刀行平代金百貫黄金五十枚時服五十を献上す。同じく御臺所へ白銀五十枚曝五十匹を進上す。同じく池田信濃守分知の御禮と

して、御太刀目録黄金十枚時服五を献上す。御臺所へは白銀十枚を進上す。同日に

松平新太郎隠居の御禮として御太刀目録狸々耕十間、且又御刀若狭正宗御茶入薬師院を献上す。同じく御臺所へ古今集行平筆を進上す。

一、十五日に織田豊前守在所に於て、去る頃死去の由。同日に阿部伊豫守領知上總の内大瀧の古城を取立て、向後城主に仰付けらるゝ由。

一、廿八日に御旗奉行笈助兵衛跡役を大久保四郎左衛門、御槍奉行大久保四郎左衛門跡役を内藤甚之丞に仰付けらる。

一、晦日に大橋長左衛門死去。

一、七月二日、奥平大膳亮死去。

一、十五日に鎌倉玉繩貞宗寺、寶樹院殿母堂の菩提所たるに依りて、寺領十石を御寄附なり。

一、廿二日に島田出雲守嫡十兵衛・山田十太夫弟十右衛門兩人を中奥御小性に仰付けらる。同日午の後刻、公方家二の丸へ渡御。未の刻彼所の矢倉に於て水流高覽。

一、八月六日に、織田豊前守跡式一萬石相違なく息主殿に給ふ。

一、十五日に西本願寺大僧正となるの御禮として、金馬代にて使者富島頼母を差上げらる。

一、十七日に紀伊中納言殿より水野對馬を以て創業記者異冊を差上げらる。

一、九月七日、岩城但馬守定隆在所に於て、去る頃死去の由。同日に、溝口出雲守願の通り隠居。本領五萬石嫡子信濃守に相違なく給ふ。同日に、甲斐庄喜右衛門を御勘定頭に仰付けらる。依りて千三百石御増加を給ひ都合三千石になる。同日に、來る十二月寶樹院殿廿一回の御忌に付きて、十一月廿七日より十二月二日まで御法

松平伊豫守家督の御禮物進上

松平新太郎隠居に御禮物進上

公方家二の丸に出る御水流を覽る

西本願寺大僧正拜任の御禮

溝口出雲守隠居

寶樹院廿一回御忌の御禮物進上



事御執行あるに付きて、所々の御番の儀を増山兵部少輔那須遠江守兩人に仰付けらる。

- 一、十一日に戸田攝津守死去。
- 一、十二日に石谷土入死去。

織田豊前守遺物獻上

一、十三日に織田豊前守の遺物として、御茶碗三鳥刷毛目を獻上す。織田主殿繼目の御禮として、御太刀・馬代・黄金五枚・御小袖三つを獻上す。

琉球國王繼目の御禮使价首尾よきに付き禮物進上

一、十五日に豊後肥田郡の兵林寺々領拜領の御禮として、一束一本を差上ぐる。同日に琉球國王より繼目の御禮として、去年使价金武王子を遣し、首尾能きに付きて、今度御禮として松平大隅守所まで書翰竝に捧上の品々、所謂官香十包・香餅五香合・細布十疋・綾芭蕉布反・泡盛三壺を進上す。

一、廿二日に法皇御所へ御伽羅一本卷物十卷を進らせらる。

一、廿三日に青泰院殿十七回忌に付きて、傳通院へ上使として久世大和守を以て、御香奠白銀二百枚を遣さる。同日に日光御門跡へ當月の御祈禱料として、白銀百枚を

日光御門跡へ御祈禱料寄進

上使大澤兵部大輔を以て遣さる。

一、廿八日に溝口信濃守家督の御禮として、御太刀目錄黄金二十枚・御小袖十を獻上す。同じく御臺所へ銀五十枚を差上げらる。同日に溝口出雲守隱居の御禮として、御刀來國光代金三十枚獻上す。同日に板倉内膳正嫡子伯耆守病者たるに依りて、板倉石見守事先年板倉筑後守養子たりと雖も、今内膳正總領職に仰付けらる。筑後守は石見守嫡子千次郎を養子に仕るべき由。

板倉石見守進品

一、十月朔日に板倉石見守内膳正、總領職に仰付けらる。御禮として御太刀・金馬代時服四を獻上す。同じく御臺所へ紗綾二十卷を進上す。

一、五日に奥平大膳亮跡式九萬石を相違なく、養子奥平小次郎に給ふ實父は五島淡路守なり。

一、十八日に小笠原遠江守城下豊前小倉出火。侍屋敷竝に町屋共に家數六十軒餘焼失す。

一、十九日に御鐵炮頭眞田内藏助事、願の通り隱居。

一、廿二日に伊勢山田町屋より出火して、家數五百軒焼失す。

伊勢山田の出火



營中に於て圍碁象戲あり  
池田光政の母卒す

榊原左衛門尉死去

- 一、廿四日に營中に於て、碁象戲を仰付けらる。勝負は爰に略す。
- 一、廿六日に松平新太郎光政母堂福生院卒去。
- 一、廿八日に奥平小次郎繼目の御禮として、御太刀目錄・黄金三十枚・御小袖十を獻上す。尤も幼少なるに依つて名代を以て差上ぐる。同じく大膳亮遺物として、御刀備前國宗代金廿五枚・御葉茶壺宋呂を獻上す。同じく御臺所へ和漢朗詠集轉法輪三條實守筆を進上す。是亦猶子小次郎より差上ぐる。
- 一、十一月七日に甲府殿陪臣黒田信濃守死去。
- 一、十一日に御鐵炮頭眞田内藏助跡役を森川小左衛門、同じく三宅彌次兵衛跡役を松平長三郎に仰付けらる。
- 一、十二日に北條右近大夫死去。
- 一、十三日に榊原左衛門尉死去。
- 一、十四日に戸田淡路守願の通り隠居、跡式を嫡子石見守に給ふ。
- 一、十九日に富永孫左衛門死去。

- 一、二十日に松平駿河守死去。
- 一、廿四日に松平覺友死去是松平山城守伯父。同日に松平能登入道不泊死去是松平美作守舍弟なり。
- 一、廿五日に米津出羽守大阪への御暇を給ふに付きて、西蓮の御腰物代金十枚・黄金十枚・時服五を拜領す。
- 一、廿七日に井伊掃部頭を召して、「甥の吉十郎を願の通り養子に仕るべき由」を仰出らる。

寶樹院殿廿一回忌

- 一、十二月二日に寶樹院殿廿一回忌に付きて、上野に於て千部御經御執行。今日御忌日に付きて將軍家御參詣。御供は土井能登守・板倉筑後守・松平因幡守・石河美作守なり。御刀は内藤上野介、御沓は神尾播磨守なり。右御燒香終りて還御。
- 一、同御法事の布施として銀五百枚は總出家中へ、青銅三千貫文は千部讀誦の總出家中へ、銀十枚は上野目代中里平右衛門へ、同三十枚は樂人へ、鳥目二百貫文は盲目へ、同三十貫文は盲女に給ふ。

諸士役替

- 一、三日に御役替の面々、御留守居北條右近大夫跡役戸田備後守・大御番頭備後守跡



役を松平縫殿頭御書院番頭松平縫殿跡役を永井右衛門に仰付けらる。

一、五日に阿部播磨守二男七三郎・三男長吉を召出さる。

一、八日に井伊吉十郎掃部頭養子の御禮として、御太刀目録綿二百把を献上す。同じく御臺所へ縮緬二十卷・箱肴献上す。同日に阿部七三郎召出さる、御禮として、御太刀・金馬代・時服三。同じく御禮として阿部長吉より、御太刀・銀馬代・時服二を献上す。

一、九日に鍋島和泉守・青木甲斐守・妻木彦右衛門、願の通り隠居仰付けらる。

一、十日、豆州三島の曆師川合龍節事、新曆を差上ぐる。

一、十一日に右馬頭殿城下館林出火。家數三百軒餘焼失す。

一、十五日に青木甲斐入道瑞山隠居の御禮として、御太刀・銀馬代。同じく青木民部家督の御禮として、御太刀・馬代・金五枚・小袖三を献上。戸田淡路守隠居の御禮として御太刀・銀馬代。同じく戸田右近大夫家督の御禮として御太刀・馬代・黄金三枚を献上す。同日に青木瑞山より御葉茶壺奥山 戸田淡路守よりは御刀備前景光代金五枚 兩人隠居に付

館林の出火

院御所より公方家及び御臺所に下賜す保科正之卒去

諸大夫に命ぜらるる諸士

林春常等法眼に任せらる

きて是亦献上す。同日に御院御所より公方家へ御掛物・筆架、御臺所へ御手鑑・御匂袋十、御使長坂新右衛門を以つて、右二品づつ進らせらる。

一、十八日に保科肥後守正之卒去す。依りて保科筑前守へ御弔慰として、稻葉美濃守を遣さる。

一、十九日に保科筑前守へ上使久世大和守を以て、御香奠五百枚を遣さる。

一、廿日に御臺所より、保科筑前守へ御香奠百枚を遣さる。

一、廿五日に井伊吉十郎玄蕃頭に任じ、且亦侍従に任ぜらる。大澤七之助右京大夫に任じ、且亦侍従に任ぜらる。織田右京從四位下に敍し出雲守に任ず。同日に諸大夫に仰付けらる、面々、所謂仙石主税を越前守、鍋島右京を備前守、青木民部を甲斐守、松平齋之助を伊豆守、三浦左兵衛を壹岐守、堀左京を左京亮、酒井右京を右京亮、太田左近を備後守、永井右衛門を佐渡守、松平右近を石見守、小出左京を若狭守、小笠原采女を佐渡守に任ぜらる。

一、廿八日に澁江長怡・林春常・人見友元三人を法眼に仰付けらる。同日に布衣に仰



布衣に任  
ぜられた  
る諸士

付けらるゝ面々、水野藤右衛門・石尾七兵衛・山崎四郎左衛門・宮城監物・高木忠右衛門・日下部權太夫・松平長三郎・設樂市左衛門・溝口孫左衛門・進喜太郎・久保吉右衛門等なり。

一、廿九日に御側小性米津周防守御加増を五百俵給ふ。都合千俵なり。

玉露叢 卷第廿二終

玉露叢 卷第廿四

寛文十三年より延寶元年迄

松平綱晟  
卒す

一、寛文十三年正月二日に、松平彈正大弼綱晟卒す。

一、八日、松平彈正大弼男岩松方へ、上使板倉内膳正を遣さる。同日に酒井日向守を以て、御香奠白銀三百枚を遣さる。

一、十五日に松平大膳大夫綱廣娘、松平攝津守義利へ縁組を仰付けらる。

一、十六日に酒井雅樂頭忠清娘、松平右京大夫頼常へ縁組を仰付けらる。

一、十九日に松平駿河守遺領五萬石、相違なく總領又七郎に下さる。

一、廿三日に渡邊大隅守大目附竝に吉利支丹奉行を仰付けらる。渡邊大隅守跡役を宮崎若狭守に、千俵の御加増にて仰付けらる。且又御槍奉行榊原跡役兼松又四郎、御

役替仰付  
けらるゝ  
人々



持弓頭兼松又四郎跡役秋山十右衛門、定火消秋山十右衛門跡役八木十三郎に仰付けらる。

一、二月四日に、松平右近大夫出羽舍弟死去。

一、七日に松平又七郎繼目の御禮として、御太刀目録・黄金廿枚・小袖十献上。同御臺所へ白銀廿枚を進上。且又女中へ銀五枚・三枚・二枚と遣す。同又七郎より駿河守遺物として、御刀左弘行代金廿枚・伊勢物語爲氏筆を献上す。同日に松平山城守嫡子松平傳三郎、御太刀目録・小袖二つを獻じて御禮。

一、同日に北條右近大夫遺物として、御刀則成代金六枚・三十六人の歌仙伏見院貞親王筆を嫡男北條長吉より差上ぐる。

一、十二日、役替の面々、京都町奉行宮崎若狹守跡役前田安藝守、御留守居番伊藤安兵衛跡役筒井内藏、駿府町奉行富永孫左衛門跡役大久保甚兵衛、小十人組番頭筒井内藏跡役三島清左衛門、大久保甚兵衛跡役島田權三郎に仰付けらる。

一、十九日に、松平讚岐守・同右京大夫登營、御座の間に於て願の通り、讚岐守隠居。

役替の人

松平讚岐守登營

松平又七郎繼目の御禮

家督は相違なく右京大夫に給ふ。

一、同日に松平薩摩守卒去。

一、廿一日に高田御方一回の御忌に付きて、松平下野守へ上使稻葉美濃守を以て、御香奠白銀二百枚を遣さる。

一、廿五日に松平彈正大弼跡職を嫡男松平岩松へ仰付けらる。

一、廿六日に松平讚岐守右京事大夫・眞御太刀左代金七枚・金五兩・銀子三百枚・御小袖二十を献上。同讚岐守源英隠居の御禮として、御太刀・金馬代・御小袖十を進上なり。

一、廿八日に松平源英入道隠居の儀に付いて、御脇指貞宗代金百枚・御茶入松風を献上。同御臺所へ鶴一・後撰和歌集爲世筆・綿百把を進上。讚岐守より家督の御禮として、御臺所へ銀三十枚を献上なり。女中方へも銀十枚・五枚・三枚と遣す。同日に、阿蘭陀人進物品々を捧上して御目見。

一、三月四日に、内藤豊前守嫡子富太郎死去。

一、七日に板倉伊豫守嫡子帶刀、頃日死去。

松平讚岐守献上品

阿蘭陀人御目見



松平岩松  
繼目の禮

役替の面々

隱元禪師  
遷化

- 一、九日に松平岩松家督の御禮として、眞御太刀近景代金七枚、黄金五十枚、綿百把を献上。
- 同松平彈正大弼遺物として、御刀正宗代金二百枚、惠西巖墨蹟を献上。御臺所へは御屏風兆殿主筆、一雙を進上なり。同御臺所へ松平岩松より、銀五十枚、たひか十卷を献上。
- 一、十三日に阿蘭陀人御暇に付いて時服三十、通事へ時服二つ給ふ。
- 一、十九日に役替を仰付らるゝ面々、禁中役人前田安藝守跡役石谷五右衛門千石の御加増、新院御所役人鈴木淡路守跡役山口庄兵衛五百石御加増に仰付けらる。同御步行頭高田庄右衛門跡役を親見七右衛門三百俵御加増に仰付けらる。
- 一、二十日に水野越中守死去。
- 一、廿六日、中根日向守願の通り役御免。
- 一、廿九日に中根日向守跡役を板倉伊豫守に仰付けらる。御書院番頭水野越中守跡役を安藤壹岐守に仰付けらる。
- 一、四月一日に、松平丹後守死去。同日に保田若狹入道無休死去。
- 一、四月三日、隱元禪師遷化、行年八十二歳。隱元遺偈に云、

三月晦日朝病中示衆

隱元禪師  
の偈

病中猶自制顛風、曠劫幻縁一掃空、珍重諸仁須勉力、莫教昧劫主人翁。

同晦日晚咄云

一、喝々碎大虚空、萬象森羅一掃空、若能識得處空概、炬徹三千大夢中。

拍手呵々大笑言、快活々々。

四月三日未時示寂索筆書偈云

西來柳標振雄風、幻出壁山不宰功、今日身神俱放下、頓超法界一真空。

一、十四日、近藤彦九郎に横田次郎兵衛跡役百人組を仰付けらる。且又御持筒近藤彦九郎跡役水野半左衛門、常火消水野十兵衛に仰付けらる。同日に酒井下總守總領采女死去。

一、廿三日に、京都町奉行前田安藝守に新規に現米六百石下さる。

一、同日隱元禪師より遺物として、木庵より使僧慶峯を以て、五百羅漢圖、謝恩偈自筆二色を献上。

隱元の遺  
物献上



一、五月八日に松平右近大夫事、去る頃死去に付いて、弟岩千代を猶子に仰付けられ候様にと、願の儀高廳に達する處に、右近大夫遺領一萬石は松平出羽守高の内たるの間、則ち出羽守に返し下さるの間、心次第に仕るべき由、出羽守、松平上野介へ仰渡さる。同日に福原淡路守願の通り隱居。高四千五百石の内四千石嫡子福原監物、五百石孫次郎七に給ふ。是又願に依りてなり。

一、同日寅の上刻、關白殿より出火。禁裏御所方残らず焼失。本院の御所計り別條なし。類火の面々左の如し。

鷹司關白火元、同政所残らず。禁裏女院御所・新院御所・女御々方法皇御所、何れも残らず。本院御所は局方計り、御守殿は無異なり。

公家には、九條左大臣・廣橋宰相・南園寺・頂妙寺・兵部大輔・風早三位・芝山中納言・藤木駿河守・小川坊城大納言・五辻左馬頭・勸修寺大納言・日野大納言・烏丸宰相・裏松藏人・菊亭大納言・園大納言・伏見の古御殿・水戸殿屋敷・施藥院・半井驢庵・毘沙門堂御門跡、

京都の火災

里の坊、中立賣通北川小川迄南方小川半町迄上長者町堀川小川迄焼出るあいの町よりさはらぎ町迄・東の洞院竹屋町迄車屋町烏丸通一條下る町よ兩替町二條通迄室町中立賣より二條迄衣の店通・新町通り金座西の洞院小川通右何れも中立賣より二條迄油の小路右何れも中立賣より二條迄堀川西方下長者町大宮より丸太町下迄永井伊賀守本屋敷・同堀川の下屋敷等、九日の午の刻迄焼ける。町中にて死人四人なり。

一、三種神器は恙なく白川へ渡御。 一、主上は近衛殿へ行幸。

一、上皇は有栖川殿へ遷行。 一、新院御所は八條殿へ遷行。

一、女院御所・本院御所・女三宮は女五の宮へ行啓。

一、十六日に女院御所へ宿次を以て、御伽羅二本・御硯宮一・御屏風二雙を進ぜらる。

一、十八日に板倉内膳正娘、長門守子相馬虎千代へ縁組を仰付けらる。

一、十七・十八兩日に、松平丹後守有馬中務大輔・大村因幡守領分洪水。

一、廿二日に、先頃禁中回祿に付いて、土井能登守京都へ御使に遣さるに依りて、黄金廿枚・時服五・御召の御羽織御手自ら拜領なり。同日に朝日奈休意死去。

板倉内膳正の婚姻儀



諸國の洪水

一、廿三日に武田杏仙事、左京中御合力米二百俵を給ふ。  
一、廿八日に注進、水谷左京亮領内、去る十二日より十四日暮過ぎまで甚雨、依つて洪水。故に家數五十一軒流失す。溺死三十人餘、牛馬數を知らず。此外洪水の國々は備前・備後・播磨・美作・四國・肥前、此國々洪水と云々。

一、廿九日に永井伊賀守京都の屋敷類火に付て、作事料として銀三百貫目を給ふ。

板倉内膳卒去

一、六月一日に、板倉内膳守卒去。

一、二日に板倉石見守方へ上使堀田備中守を以て、御香奠銀二百枚を下さる。同御臺所より御香奠銀三十枚を遣さる。御使廣敷番頭なり。

一、八日に、去る頃京都炎上に付いて、織田主計頭を京都へ遣さるに依りて、金十枚。時服三羽織を下さる。依つて禁裏御所へ遣さる物左の如し。

將軍より禁裏御所へ遣さる品々

一、禁裏へ 黄金五十枚、御屏風二雙、御袷三十

一、法皇御所へ 黄金五十枚、御袷廿、御屏風二雙

一、本院御所へ 繡珍廿卷 一、新院御所へ 銀三百枚、御袷廿、御屏風一雙

一、女院御所へ 金二千兩、繡珍廿卷 一、女御御方へ 銀百枚、縮緬廿卷

一、新院女御へ 銀五十枚、縮緬廿卷 一、女三宮へ 銀五十枚、縮緬廿卷

一、禁裏女中へ 銀五百枚 一、法皇女中へ 銀三百枚

一、新院女中へ 銀二百枚 一、女院女中へ 銀五百枚

一、銀五百枚 長橋局 一、銀五百枚 宣旨

一、右同斷 綾小路 以上

一、九日に松平三十郎死去。

一、十一日に、松平出羽守願の通り、舍弟岩千代今は美作守と號す召出さる。是れ松平右近大夫名跡なり。

高野山火災

一、十五日に高野菩提院より出火、類火四十院餘なり。所謂學侶方二軒、行人方廿軒、大仰院門中廿三軒、客僧方一軒炎上なり。

一、十七日、甲府殿先頃出生の男子卒去。

一、十八日に新院御所、女院御所等、御普請御急に付いて、當年中に出來致し候様に

御所御譜請の役人



と仰出さる。依つて櫻井庄之助・石尾七兵衛を御普請方御役人に仰付けらる。

一、廿四日に稻葉能登守死去。

一、廿五日に有馬左衛門佐より、生替りの活鶴を進上なり。

一、七月十二日に、内藤飛驒守在處に於て死去。

一、十八日に松平丹後守遺物として、御刀備前近景代金七枚同姓助十郎より差上ぐる。

同日に、瀧川信濃守死去瀧川長門守嫡子也

一、廿一日に本多彌八郎死去。

一、廿三日に松平新太郎より水晶の玉一つ宛、將軍家と御臺所へ差上ぐる。

一、同月、堀美作守在處に於て頃日死去。

一、八月四日に、京都類火の公家衆へ金銀を給ふ。所謂

一、金二千兩鷹司關白 一、金三百兩同政所 一、金二千兩九條 一、金三百兩菊亭

大納言 一、銀五百枚日野大納言 一、金二百兩小川坊城 一、金二百兩東園大納

言 一、金二百兩勸修寺中納言 一、同斷芝山中納言 一、金百五十兩宛烏丸宰相。

本多彌八郎死去

京都類火の公家衆へ金銀を給ふ

廣橋宰相・早風三位 一、同三百兩、西園寺中將 一、同百三十兩宛、長谷兵部少輔・五辻左馬・裏松辨 一、同三十兩宛、勢田大判事・羽倉伯耆守 一、銀三十枚宛、日野辨東園中將・芝山三位なり。

一、十七日に江府町奉行兩屋敷、今度の風雨に破損せしむるに依りて、修復料銀二十貫目宛を給ふ。

一、廿日に松平對馬守嫡子主税死去。

一、廿三日巳の上刻、女御御方安産イ姫宮を御誕生。

一、廿八日に、稻葉美濃守遺物として、御刀相州行光代金廿五枚を同姓右京亮より差上ぐる。

一、九月七日に、先頃姫宮降誕に付いて、今度吉良上野介を京都へ御使に遣さる。依つて御目見、御暇の以後黄金十枚・時服三羽織を賜ふ。且又京都への御進物

一、禁裏へ御太刀目錄・銀三百枚・三種二荷 一、女御々方へ白銀百枚・三種二荷

一、姫宮へ御産衣十重・二種一荷 一、法皇御所へ御太刀目錄・白銀百枚・三種二荷

女御御方姫宮を御安産

吉良上野介御悦の使として上京

京都への進物



- 一、女院御所へ黄金十枚縮緬卅卷・二種一荷 一、本院御所へ縮緬廿卷・二種一荷
- 一、新院御所へ御袷十二種一荷 一、御太刀目録・白銀五十枚、鷹司關白へ
- 一、白銀三十枚・二種一荷、同政所へ

右の通り進ぜらる。

跡職仰付  
らるる面々

一、十一日に跡職仰付らるる面々。内藤飛騨守遺領三萬五千二百石の内、嫡子和泉へ三萬三千二百石、同二男虎之助に二千石、是れ又願に依りて給ふ。堀美作守遺領二萬石相違なく、嫡子周防守に給ふ。

一、十八日に松平岩松元服の御禮。依りて御太刀光守代金五枚黄金三十枚・御小袖十を松平安藝守岩松事より献上す。御一獻の上にて綱の御字を給はり、綱長と號す。且又御腰物五恒を拜領す。安藝守祖父紀伊守より、元服の祝儀として御太刀・金馬代・綿百把を進上なり。同日に、繼目の御禮の面々、御太刀目録・黄金十枚・小袖六、内藤和泉守。御太刀目録・黄金十枚・小袖五、堀周防守。分知の御禮として内藤虎之助、御太刀目録・黄金二枚を献上す。

繼目の御  
禮の面々

延寶と改  
元す

一、同日に本院御所御役人松平豊前守跡役神尾彌右衛門、五百石の御加増にて仰付けらる。同日に内藤飛騨守遺物として、御刀則重代金廿五枚・御掛物俊明極墨蹟、同御臺所へ古今集定朝法師筆を同姓和泉守より差上ぐる。堀美作守遺物として、御刀來國行代金十枚を同姓周防守より差上ぐる。

一、廿一日に、寛文を延寶と改元なり。

一、延寶元年九月廿五日に、去る戌の年琉球の廻船阿蘭陀の内とんえい人奪取る。其後とんえい人長崎へ入津の砌、過料として白銀三百貫目を將軍家へ召上げられ、其銀子を琉球國へ給ふ。因りて琉球より御禮として、薩州まで中山王より獻物の品々、所謂、太平布百匹・芭蕉布五十端・細布四十・縮綾布十反・硯屏一雙・煎海鼠箱一・泡盛酒三戀・右の品々松平大隅守より使者を以て差上ぐる。

中山王よ  
り薩州へ  
御禮の捧  
物

牧野家  
督並に隱  
居の御禮

一、十月十三日に、牧野因幡守家督の御禮として、金十枚・時服六を献上。同佐渡守隱居の御禮として、金馬代・御刀左文字代金廿五枚・道阿彌肩衝を差上ぐる。同日に婚禮の御禮、毛利日向守時服四、酒井越前守時服二を献上。同日に牧野佐渡守より、御臺所



本多中務  
養子許可

へ御屏風一雙松榮廿四孝筆青磁御香爐を進上。

一、十八日に本多中務少輔實子なきに依りて、松平刑部大輔小十郎儀、養子仕るべき旨仰付けらる。同日に内藤豊前守實子なきに依りて、願の通り内藤伊勢守子七之介、養子に仕るべき旨仰出さる。

土井大炊  
頭死去

一、同日に、土井大炊頭死去。

公方隅田  
川へ御狩

一、廿六日に公方家隅田川へ御狩に出御、御物數御拳にて白鳥一・白雁二・且又分鷹にて雁三・白雁七・雁がね一・鴨十・さし鴨二・小鴨七・鷺十・鴻一、以上四十六なり。

一、廿七日に千代姫君御養女實は廣橋の女有馬中務大輔へ縁組を仰出さる。同日に小出信濃守願の通り隠居、領知残らず嫡子大學に給ふ。

一、同日に昨廿六日の御狩の御拳の白鳥を禁裏へ御進獻なり。同じく御拳の雁女院御所へ進ぜらる。

一、十一月一日に、盜賊奉行筧新兵衛跡役を久永源兵衛に仰付けらる。

一、五日行將軍家隅田川邊へ御狩に出御、御物數三十九内御拳三白鳥一・白雁二。同日に相馬

長門守死去。

一、六日に昨五日の御拳の白鳥、法皇御所へ御進獻なり。

一、十日に將軍家御慰の爲に、今日御能を仰付けらる。且又觀世新九郎・葛野九郎兵衛に紫の調へを御赦免。

一、十一日に永井右近大夫卒去。

一、十二日に本多平八郎時服十・金馬代、内藤市之介時服五・銀馬代を獻上して、初ての御禮を申上ぐる。同日に小出信濃守隠居の御禮として、金馬代、小出大學家督の御禮として、時服六・金十枚を進上。

一、十五日に金地院三束二本、鹿苑寺二束一卷を差上げ、後住の御禮、金地院五長老隠居の御禮として、掛物達磨額筆を差上ぐる。則ち今日御暇に付いて、銀五十枚、時服十を五長老に給ふ。

一、十九日廿七イに金地院寛長老を召して、五山十刹諸山の僧祿を仰付けらる。

一、晦日に小普請奉行須田次郎一イ・神谷長五郎、金二枚・時服二・羽織一つ宛を下さ

觀世葛野  
兩人に紫  
の調免許

金地院後  
住及び隠  
居の御禮



増上寺鐘出  
來に付き下物

る。是れ増上寺撞鐘を鑄、奉行を仰付けらる處に、鐘出來に付いてなり。且又釜屋常味時服二頂戴す。是亦右の鐘を鑄るに付いてなり。

一、十二月一日に、桑山主水・伊奈五兵衛時服三つ宛下さる。是は駿州淺間の社破損修復の奉行仰付けらる處に、御造營出來に付いてなり。

一、二日に、營中に於て圍碁・象戲を仰付けらる。勝負は略す。

一、三日に増上寺方丈曆天病氣に依りて隱居、願の通り仰付けらる。今日曆天遷化す。

一、七日に神尾彌右衛門從五位下に敍す。

一、八日に増上寺後住に鎌倉の光明寺珂天を仰付けらる。

一、九日に來る十九日に法皇新殿御移徙に付いて、畠山下總守を遣さる。依つて法

皇御所へ御葉茶壺玉黄金二十枚・綿二百把、女院御所へ御葉茶壺石・縹珍五卷を進上

なり。同日に、神尾彌右衛門下總守に任ず。

一、十日に公方家隅田川邊へ出御なり。御狩の御物數、御奉にて白雁三、分鷹にて

真鴨五・白雁廿・雁金一・小鴨七・鴻三・鷺二なり。同日に松平攝津守、一、昨九日に婚姻調

將軍隅田川へ御狩

法皇新殿御移徙

増上寺曆天遷化

ふに依りて、上使酒井日向守を以て、千代姫御方へ卷物三十三種二荷、松平攝津守へ御小袖十二種一荷、同攝津守室へ卷物二十二種一荷を給ふ。

玉露叢 卷第廿四 終

寛文十三年より延寶元年迄



# 玉露叢 卷第廿五

## 延寶二年

井上相模守名代と  
日光へ遣さる  
小性組番頭御徒頭  
新任

一、正月七日に松平大隅守從四位上に敍す。同日に由良信濃守卒。  
 一、十日に永井右近大夫跡職相違なく、嫡子土佐守に仰付けらる。御小性組番頭新庄長門守願に依りて御役御免。  
 一、十一日に内藤甚之丞御旗奉行・三枝平右衛門御槍奉行・松平新九郎御弓奉行を仰付けらる。  
 一、十三日に井上相模守、來る廿日に御名代として、日光山へ遣さるべき由を仰出さる。  
 一、十五日に稻葉權之介を御小性組番頭に仰付けらる。朝倉仁左衛門御留守居番島

田十兵衛三百餘御加増御徒頭に仰付けらる。

一、十九日に片桐石見守遺領一萬三千四百八十石餘の内、一萬二千四百八十石餘片桐三郎兵衛・千石下條長兵衛に願に依りて分ち給ふ。  
 一、廿一日に松平隱岐守病氣大切に付き、同姓玄蕃頭長子鍋之介を養子に仰付けらる。之れ願に依りてなり。同日に小出修理亮卒。

一、晦日に松平下野守綱賢、在所高田に於て卒去。  
 一、同月京都に於て永井伊賀守尙庸洛中の宗旨を改む。左の如し。

一、天台宗 九千五十六人 一、眞言宗 一萬七十七人

一、法相宗 六千四百人 一、禪宗 一萬千五百十人

一、律宗 九千四百人 一、淨土宗 十四萬五千百廿人

一、日蓮宗 八萬二千七百廿八人 一、西門跡派 四萬二十人

一、東門跡派 八萬百二十人 一、佛光寺派 八千七百十九人

一、高田派 七千四百六人 一、大念佛宗 二百八十人

京都諸宗の人員



一、時宗と山伏 六千七十三人

右の人数總計四十萬八千七百廿三人なり。一日に一人毎に米五合づつにして、總人数の饗二千四十五石八斗六升五合、一箇年には七十三萬五百十二石四斗。

一、二月五日に先頃松平下野守卒去に付きて、今日松平越後守へ香奠銀二百枚を戸田伊賀守を以つて下さる。

永井土佐  
守繼目の  
御禮献上

一、七日に永井土佐守繼目の御禮として、金二十枚・時服十を献上。同じく御臺所へ

銀二十枚を献上。永井右近大夫遺物として、御刀備前長光<sup>代金三</sup>御掛物牧溪筆、贊は

文庸禪師なり。尤土佐守方より差上ぐる。同日に片桐三郎兵衛繼目の御禮として、

金五枚・時服三を献上。下條兵衛分知の御禮金馬代を獻ず。片桐石見守遺物として、

大聖國師の墨跡。尤も三郎兵衛より差上ぐる。同日松平隱岐守養子の御禮として

綿百把、松平萬之助。同じく御禮として時服十・金馬代にて御目見。同日に鍋島加賀

守嫡子式部時服五・銀馬代、戸田左門二男長三郎時服四・銀馬代にて兩輩初て御目見。

一、八日に來向の公家衆御馳走人を仰付けらる。所謂兩傳奏へ戸澤能登守、兩院使

松平隱岐  
守養子の  
御禮献上

片桐三郎  
兵衛繼目  
の御禮献上

隅田川  
狩

へ池田豊前守、新院使へ谷出羽守、法皇移徙御使へ青木甲斐守なり。

一、九日に隅田川へ御狩に渡御。御物數五十五内御拳にて三<sup>雁一</sup>白鳥二。

一、十一日に、先頃御狩の鶴を禁裏へ御拳の雁を女院御所へ、繼飛脚にて御進上なり。同日に仙石因幡守を禁中御作事の總奉行を仰付けらる。且亦鳥角左衛門・下條

長兵衛・中根宇右衛門・加藤源左衛門四人、御作事奉行に仰付けらる。右の御作事の

手傳を松平伊豫守へ仰付けらる。

一、十二日に相州鎌倉邊猪數多あるに依りて、田畑荒亡す。依りて田付四郎兵衛に

獵せらるべきとなり。同日に松平隱岐守定長卒す。

一、二十日傳通院願の通り隱居。

一、廿一日に高田御方三回忌に付きて、松平越後守へ上使久世大和守を以つて、御

香奠銀二百枚、同じく御臺所より白銀三十枚を給ふ。

一、廿五日に加藤出羽守願の通り隱居。本知五萬石残らず嫡孫遠江守に給ふ。且亦

願に依りて新田千五百石加藤八郎<sup>男二</sup>、新田千五百石加藤左兵衛<sup>男三</sup>に給ふ。

禁中作事  
奉行を任  
命

高田御方  
三回忌

加藤出羽  
守隱居



森美作守  
死去

- 一、廿八日に石川主殿頭二男石川主税時服三、五島淡路守男五島主税時服三、田村隱岐守二男田村主殿時服二、戸田左門男戸田主税金馬代、安部攝津守男安部彌市郎時服三を献上して初ての御目見。同日に作州津山に於て森美作守死去。
- 一、廿九日に公方家麻布邊へ御鷹狩に出御、御物數七十一内御拳三。
- 一、三月四日に勅使院使參府に依りて、上使として酒井雅樂頭竝に吉良上野介を遣さる。

一、十日に傳通院後住に大念寺の嚴宿を仰付けらる。

一、十五日に阿蘭陀人御目見。例年の如く進物を捧ぐ、品は省く。

一、十八日に京極伊勢守願の通り隱居。養子土肥之助に領知三萬石餘相違なく給ふ。同日に加藤遠江守繼目の御禮として、金廿枚時服十を献上。同じく加藤左兵衛分知の御禮として金一枚進上。加藤出羽守隱居に付きて御刀來國光<sup>廿枚</sup>を差上ぐる。

一、廿一日に阿部伊豫守堀丹後守内藤右近大夫・前田右近大夫を大坂の加番に仰

阿蘭陀人  
御目見  
京極伊勢  
守隱居

付けらる。

一、廿四日に松平越前守光通國許に於て卒す。

一、廿五日に大村因幡守男大村主膳、銀馬代時服三。木下右衛門大夫弟木下左兵衛銀馬代時服二を献上して初て御目見。

一、廿六日に阿蘭陀人御暇に付きて時服三十、通事に時服二を給ふ。

一、廿九日に御弓頭鳥居久太夫御鐵炮頭井上三太左衛門に仰付けらる。

一、四月二日に松平越前守先頃卒去に付きて、香奠銀五百枚戸田伊賀守を以つて給ふ。

一、五日に家督相續の御禮として京極土肥之助、金十枚時服六を献上。同じく京極伊勢守隱居に付きて御刀來國光<sup>代金十枚</sup>を差上ぐる。

一、七日に松平隱岐守遺領十五萬石を、養子萬之助に相違なく給ふ。

一、十日の夜中大雨にて加茂川洪水。所々堤等破損、三條の橋も押流す。同日に久我前右大臣薨す。

加茂川洪  
水  
久我前右  
大臣薨去



興正寺々  
領頂戴の  
御禮

- 一、十九日に智恩院方丈願の通り隠居。
- 一、廿二日に松平萬之助繼目の御禮として、金三十枚・時服二十を献上す。加藤平八郎分知の御禮として金馬代を献上す。松平隱岐守遺物として御刀正宗代金五十枚・御葉茶壺小袖、同じく御臺所へ蘆曳御卷物五卷・詞書梶井堯胤親王御筆・書土佐刑部筆、同姓萬之助方より差上ぐる。同じき萬之助方より家督の御禮として、御臺所へ銀三十枚を進上。
- 一、廿六日に森内記願の通り隠居。領知十八萬六千五百石残らず二男森伯耆守に家督相續を仰付けらる。且亦内記長男美作守嫡子萬右衛門、伯耆守養子に仕るべき由。
- 一、廿八日、東本願寺舍弟興正寺僧正、寺領の御朱印頂戴の御禮として、時服十・金馬代を差上ぐる。
- 一、廿九日、京極主膳正遺領一萬千石餘實子隼人に給ふ。
- 一、五月二日、鎌倉光明寺萬無を智恩院住職に仰付けらる。
- 一、六日、松平越前守遺領相違なく、願の通り松平兵部大輔に仰付けらる。

誓願寺常  
紫衣仰付  
けらる

玉屋木を  
日光寶藏  
に納む

- 一、十日、京都誓願寺を常紫衣に仰付けらる。
- 一、十二日、松平兵部大輔養子の儀、願の通り松平中務大輔男千菊を仰付けらる。
- 一、十三日、鎌倉光明寺へ飯沼弘經寺通 弘經寺へ新智恩寺萬 新智恩寺へ増上寺二萬 龍村西を後住に仰付けらる。
- 一、十八日に日光山寶藏へ玉と屋木を納め給ふ。玉は淺草川上屋が淵より取上ぐる處の明珠なり。屋木は三浦の沖より上ぐる處なり。
- 一、廿六日に森伯耆守家督の御禮として、御太刀備前貞利代金百貫・黄金五十枚・時服二十を献上。同じく森内記隠居の御禮として、時服十・金馬代を献上。御臺所へ伯耆守より銀五十枚を献上。公方家へ森内記隠居の儀に付きて、御刀備前長光・墨蹟芝靈石・御屏風一雙松榮筆を差上ぐる。

- 一、六月五日、松平兵部大輔繼目の御禮として、御太刀爲清代金八枚・黄金百枚・綿百把。同じく御臺所へ銀百枚・綿百把を献上す。同日に越前守遺物として、御刀郷義弘代金二百枚・御掛物琦楚・御葉茶壺音 同じく御臺所へは御軸物行尹筆・御香爐青磁口奇を松平兵部大輔より差上



本理院逝  
去

ぐる。

一、八日に本理院御方御逝去。今晚傳通院へ御葬送御法事あり。奉行人として本多長門守・大久保右京亮・徳山五兵衛、御目附として大岡五郎右衛門なり。

大雹降る

一、十一日に京都夥しき雷鳴甚雨・大雹降る。重さ五六匁又は十匁なり。佐井村といふ在所へ降る丸雪は百匁餘、四百匁計りの雹なり。其内に三貫目餘の雹四つ・五つありしとなり。雹に打たれし人馬は斃死す。梅宮・松尾邊も右の通り。此時蘆山寺の堂へ雷落ちて寺悉く破損す。

大坂落雷

一、十二日に大坂に於て又々夥しく雷雨、十二箇所へ雷落ちる。釣鐘町といふ所に三人死す。此外方々にて死人あり。

一、牧方ひらかたより大坂迄の間にて雷十一二箇所へ落ちる。

淀川筋洪水

一、十三日・十四日甚雨にて淀川筋より水差込みて、方々の塘切れ竝に大和川の堤も切れ、都て堤十七箇なり。なまか榎竝川といふ在所、其外河州・和州等の邊國迄水差込みて民屋の棟を水越して、溺死數多く、牛馬等も其數を知らず。

本理院御  
法事

一、攝州高槻領一萬石程永代の川となり、大坂にては京橋・天神橋落ちる。外に小橋二箇所落ちる、天満橋は破損計りなり。且亦野田といふ所の町屋悉く流る。尤も溺死夥しと云々。

一、廿二日に本理院御方御法事に依りて施物を給ふ。

銀二百枚傳通院、銀十枚新智恩寺、銀十枚靈巖寺、銀十枚靈山寺、同斷雲光院、

同斷天徳寺、同斷大養寺、同斷西福寺、同斷誓願寺、同斷本誓寺、同斷無量院、銀五

枚宛傳通院月行の衆僧十二人へ、三千貫文千部讀經の衆僧へ、二百三十貫文瞽者・盲女へ、

右の御法事に付いて香奠を差上げらるゝ面々、尾張殿・紀伊殿より銀二十枚づつ、

水戸殿より銀十枚、甲府殿・館林殿より銀二十枚、千代姫御方より銀十枚、井伊掃部

頭同斷、酒井雅樂頭銀五枚、稻葉美濃守・久世大和守・土屋但馬守・阿部播磨守銀三

枚づつ、阿部對馬守銀二枚、大久保右京亮・瀧川長門守・板倉市正・戸田備後守本多

長門守・徳山五兵衛銀一枚宛、松平左兵衛督銀五枚、松平福千代銀二枚を献上なり。

一、廿六日に松平美作守願の通り隠居。



一、七月三日の新番頭大久保彦兵衛跡役を天野甚左衛門、御鐵炮頭諏訪勘兵衛跡役を島田新三郎に仰付けらる。

一、九日に御役を仰付けらるゝ面々、服部備後守跡役牧野數馬千石御加増都合二千二百石、御徒頭天野甚右衛門跡土屋市之丞三百俵御加増、御船手土屋忠兵衛跡向井八郎兵衛に仰付けらる。

一、十日に春日岡泉明寺を日光山の學頭に仰付けらる。松平淡路守卒去、依りて戸田伊賀守を以て香奠銀二百枚を下さる。

一、十二日に跡目仰付けらるゝ面々、由良信濃守跡實子新八郎に本領千石を給ふ。伊澤主水正跡實子吉兵衛に本領三千二百五十石を給ふ。今日跡目相續の衆中五十人に及ぶと雖も爰に省く。

一、十八日に猶子仰出さる御禮として、松平兵部大輔猩々緋十間・金馬代、松平千菊時服二十・金馬代を差上ぐる。同日家督相續の御禮として松平玄蕃頭金二十枚・時服十同じく御臺所へ銀十枚を献上。松平美作守隱居の御禮として、曝二十四・金馬代、同じく御臺所へ曝二十四匹を献上。同じく隱居の儀に付きて美作守より御刀備前光忠代金廿枚、御

葉茶壺雄鳥を差上ぐる。且亦御臺所へ御屏風一雙、白菊御手鑑二冊、新筆の短冊を進上なり。

同日に初ての御目見の衆中、松平左門主殿頭男時服五・銀馬代、松平與十郎伊賀守猶子時服二・銀馬代、西郷熊之助若狭守嫡男時服三・銀馬代、織田内匠山城守二男時服三・銀馬代、山崎左門勘解由男銀馬代を献上。

諸士縁組  
仰付けらる

一、廿三日縁組仰付けらるゝ面々。

織田山城守娘加藤角十郎織部正男へ 松平刑部大輔娘本多作左衛門飛騨守男へ 松平刑部大

夫娘松平主膳正へ 南部大膳大夫娘本多肥前守へ 永井土佐守娘京極隼人正へ

松浦肥前守女牧野伴左衛門平右衛門男へ 溝口信濃守娘稻葉市正へ 板倉隱岐守娘太田

備後守へ 秋月佐渡守娘花房右近外記男へ 松平佐渡守娘松平甲斐守出羽守男へ 川口源

左衛門娘森六兵衛へ 筒井内藏娘竹中彦八郎へ 高木忠右衛門娘山下數馬へ。

一、同日に牧野老之助に飛騨守遺領七萬石相違なく給ふ。同日に織田小十郎子太田原山城守養子に仰付けらる。是願に依りてなり。

一、八月九日に、新庄隱岐守領知二萬七千三百石の内、二萬三百石越前守男民部に給



牧野老之助家督相續の御禮

ふ。七千石は隱岐守に分ち給ふ。尤も隱岐守願に依りてなり。且亦隱岐守事民部後見を仕るべき旨なり。同日に牧野老之助家督相續の御禮として、金二十枚、綿百把を献上。同飛驒守遺物として、御脇指來國光代金五十枚老之助より差上ぐる。永井伊賀守嫡子大學初て御目見に付きて、時服三、銀馬代を進上。同日に日光山學頭修學院權僧正に仰付けらる。

一、廿三日に岡部丹波守願の通り役儀御免。

一、廿五日に跡目相續の御禮として、由良新兵衛金一枚、伊澤吉兵衛金一枚、諏訪左兵衛金一枚を献上。

廣幡後室卒去

一、廿八日に廣幡後室〔普カ〕音峯院卒去。

一、廿九日に大番頭岡野丹波守跡役を松平豊前守に仰付けらる。同じく御書院番頭松平豊前守跡役を本多對馬守に仰付けらる。

一、九月一日に松平左兵衛督只今迄御藏米五千俵を給ふ處に、今日二千石の御加増ありて、都合七千石を地方にて給ふ。

女院御所御移徙に賜つきての賜物

一、四日に松平淡路守遺領相違なく、實子大藏大輔に給ふ。同日に井上源藏儀、先達て井上筑後守二男虎之助を猶子に致す處に、其後源藏實子仙之助出生に依りて、則ち仙之助に源藏跡職を下され候様に、且亦筑後守嫡子内記相果て候へば、虎之助儀は筑後守總領職に仰付けられ下され候様にと、筑後守虎之助願ひ奉るに依りて、今日願の通り仰付けらる。

一、五日、酒井主殿へ松平縫殿頭娘縁組仰付けらる。

一、九日に、來る十九日に女院御所御移徙に付きて、同じく廿一日に上杉伊勢守を以つて、進ぜられものあり。竝に女中へも白銀等を給ふ。

女院御所へ金廿枚、綿二百把、三種二荷、法皇御所へ三種二荷、女三宮へ銀百枚、宣旨と綾小路へ銀廿枚宛、總女中へ銀二百枚。

御臺所より女院御所へ白銀百枚、女三宮へ白銀三十枚、宣旨と綾小路へ銀十枚づつ、中納言小督高倉宰相・春日・但馬・岩井・薩摩・下總九人へ銀五枚づつ、村井と横野とへ銀二枚宛、總女中へ同百枚、長春院へ白銀五枚、築田隱岐守へ白銀五枚、久保和



松平大藏  
大輔繼目  
の御禮

泉守へ白銀五枚、佐伍と綾とへ白銀三枚づつを給ふ。

一、十一日に松平大藏大輔繼目の御禮として、金三十枚、綿百把、同じく御臺所へ銀三十枚を進上。松平淡路守遺物として御刀〔安カ〕  
方弘行代金  
三十五枚、葉茶壺夏衣同じく御臺所へ後撰

集爲相筆を差上ぐる。

筑波山權  
現遷宮

一、十三日に筑波山權現遷宮に付きて、御刀吉宗代金  
二枚五兩を御奉納なり。

一、廿七日に丹羽式部少輔在所に於て死去。

本理院遺  
骨を高野  
山へ遣さ  
る

一、十月五日に本理院御方遺骨を高野山大徳院へ遣さるに付きて、金三百兩を給ふ。

一、七日に日野前亞相・中院前亞相兩卿、法皇の御願に依りて和歌所に仰付けらる。

一、十四日に内藤帶刀死去。

日野中院  
和歌所仰  
付けらる

一、廿七日に女院御所より移徙の御祝儀を進じ給ふ。

一、十一月十五日に小堀備中守先頃死去。依りて遺領一萬千四百六十石餘、相違なく實子大膳に給ふ。

内藤豐前  
守九鬼式  
部少輔隱  
居

一、十六日に内藤豐前守願の通り隱居。且亦領知五萬石餘養子紀伊守に給ふ。九鬼

式部少輔是亦願に依りて隱居。領知一萬九千五百石嫡子内匠に給ふ。

一、十八日に將軍家隅田川へ御鷹狩に出御、總物數三十、内御拳にて白鳥二、白雁一なり。

一、十九日に宿次を以て禁裏へ白鳥一、女院御所へ白雁一を御進獻なり。是昨十八日の御狩の御拳の鳥なり。

一、廿一日に營中に於て御能あり。

一、廿四日に營中に於て圍碁・象戲を仰付けらる。

一、廿五日に丹羽式部少輔遺領一萬九千石餘嫡子勘助に給ふ。

一、廿八日に家督の御禮として、内藤紀伊守金二十枚・綿百把・丹羽勘助金十枚・時服

五、九鬼内匠金十枚・時服五、小堀大膳金五枚・小袖三を獻上。隱居の御禮として内藤豐前守金馬代・小袖三、九鬼式部少輔金馬代を獻上。且亦内藤豐前守左弘安代金  
廿枚九

鬼式部少輔青江賴次代金  
十枚を獻上。同日に遺物として丹羽式部少輔保昌代金  
五枚五郎

小堀備中守香爐白鷗を、勘助大膳より差上ぐる。

營中に於  
て諸遊藝  
あり



濟松寺修復料を給ふ

御的仰付けらる

諸士官位昇進

一、十二月三日に高田濟松寺へ御佛殿修復料として金五百圓を給ふ。

一、六日に二の丸に於て御的仰付けられて將軍家上覽。一尺二寸的を掛けて十五間なり。矢答は磨を以て役す。射手は寄合御書院番・御小性組御納戸の面々なり。

一、八日に亦二の丸に於て射藝上覽あり。射手は新番・大番・小十人の輩なり。

一、十六日に松平民部少輔願に依りて、御側衆の役儀御免。

一、廿二日に縁組仰付けらるゝ面々。

細川越中守娘松平太七郎左京大夫男へ 酒井雅樂頭娘水野民部へ

松平主膳正妹眞田彈正忠伊賀男へ 本多隱岐守妹加藤孫太郎内藏助男へ

松平民部少輔娘能勢治左衛門日向守男へ

一、廿七日に官位昇進の面々。

松平安藝守侍從に任じ、森伯耆守四位に敘す。松平萬之助淡路守 京極土肥之助

甲斐守 南部武太夫遠江守 九鬼内匠内匠頭 片桐三郎兵衛主膳正 松平左門右京

亮 稻葉權之助石見守 大久保彦兵衛大隅守カ豊前守に任ず。尤も八人は從五位下に敘す。

小出瀨兵衛・鳥居久太夫・島田新三郎・渥美九郎兵衛・土屋市之丞・馬場三郎左衛門・向井兵部式部事・向井兵庫八郎兵衛事・島田十兵衛・北栗十郎右衛門等十人は布衣に仰付けらる。

同日に松平玄蕃頭美作守に改む。

一、廿八日に戸川土佐守在所に於て死去。

一、晦日、松平兵部大輔侍從に任ず。是れ先頃病氣に依りて、今日此儀に及ぶ。但し衣階は元の如し。

玉露叢 卷第廿五 終



玉露叢 卷第廿六

御使役仰  
付けらる  
る人々

延寶三年

本多兵部  
少輔隱居  
願却下せ  
られず

一、延寶三卯年正月廿六日に、御使役に仰付けらる面々、保田甚兵衛・奥田八郎右衛門・本多忠右衛門・久留島半四郎・大關勘右衛門・松前八左衛門・渡邊久助等七人なり。同日に、淺野采女死去。

一、廿七日に東海道は人馬の賃、有り來る處に三割増、脇道中は二割増なり。是れ世上飢饉に依つて仰付けらるゝ處なり。

一、二月三日に、渡邊筑後守・久世宇右衛門・依田内藏助等願に依つて御役御免。同日に柳生大膳死去。

一、四日に本多兵部少輔事、豫ねて隱居の願上聞に達しける處に、未だ年若く且

又膳所は要害の地なりければ、先々相勤むべき由、願の趣は偏に奇特に思召さるとなり。

十六堂再  
興に付下  
賜金

細川越中  
守室卒去

一、八日に片桐主膳正水口在番を仰付けらる。

一、十五日に武州淺草天王町十六堂、寛文九年二月四日に炎上。依つて再興の儀、別當大圓寺願ひ奉るに付き金百兩給ふ。

一、十七日に上州大信寺に金百兩給ふ。是れ駿河大納言殿菩提所たるに依つてなり。尤も石塔其外佛具等仕直すべき由。

一、十九日に堀式部入道死去。

一、廿日に細川越中守室卒去。是れ水戸黄門御息女にして、松平讚岐入道源英養女なり。

一、廿一日に御鐵炮頭諷訪左門跡森川助右衛門、依田内藏助跡榊原八兵衛に仰付けらる。

一、廿五日に松平周防守遺領五萬四百石餘、相違なく嫡子松平主計頭に給ふ。



一、廿七日に近藤登之助・神保四郎左衛門願の通御役御免。同日に武州芝金杉新堀船入出来、依つて阿部四郎五郎・大久保甚右衛門・岡田將監奉行を勤む。

一、三月一日に、財産を獻じ、阿蘭陀人御禮。

一、六日に右の阿蘭陀人御暇に依つて、例の如く時服を給ふ。

一、十日に百人組頭近藤登之助跡渡邊半十郎三一跡藤田權之助、常

火消役蒔田權之助跡上田彌右衛門、小十人頭神保四郎右衛門跡田中作兵衛に仰付けらる。

役替の人々

跡式相續の面々

一、十二日に花山院大納言傳奏に仰付けらる。是れ中院代りなり。

一、廿三日に跡職相續の面々、淺野采女正遺領五萬石餘、相違なく實子淺野又市郎、

淺野因幡守遺領五萬石嫡子淺野式部少輔に相違なく給ふ。戸川土佐守遺領二萬千

石の内二萬石は嫡子縫殿助、千石は二男槌千代に分ち給ふ。是れ願に依つてなり。

一、廿五日に將軍家麻布邊へ渡御。

一、廿八日に大坂加番仰付けらるる面々、秋田阿波守・松平佐渡守・内田出羽守・堀飛

大坂加番任命

驛守なり。

繼目御禮の衆

一、四月七日に繼目の御禮の衆中、金廿枚・綿百把松平主計頭。右同斷淺野式部少

輔。金廿枚・時服十淺野又市郎。同日に松平周防守遺物御刀則房代金廿枚・淺野因幡守遺物

御刀備前長光代金廿枚・淺野采女正遺物守家代金廿枚を差上ぐる。

一、八日に、來る廿日日光御名代を松平下總守に仰付けらる。

一、九日より十八日迄、東叡山に於て萬部の御經御修行に依つて、上野へ香奠一萬

石以下銀二枚・三枚、一萬石より四萬九千石迄三枚、十萬石以上の嫡子同斷、五萬石

より九萬九千石迄五枚、三十萬石以上の嫡子右同斷、十萬石より廿九萬石迄銀十枚、

三十萬石以上銀廿枚。是來る廿一日の朝五つ時萬部堂へ奉納すべき由。

一、四月一日に、松平大藏大輔城下侍屋敷・三の丸迄燒失。同日に松平出羽守在所に

於て卒去。

一、五日に唐作りの御船伊豆の下田を出船して、同七日に八丈島へ著岸し、同九日

に彼島を又漕出し、同廿九日に人なき島へ著岸仕候。

日光御名代

萬部經修行依り香奠の定め

松平出羽守卒去



八丈島の物産

- 一、元島の長さ十六里横二里ほど御座候。湊二つ之あり、此島にこれ有る物の品々、
  - 一、四足の鳥大さ鳩ほどなり。面は猿に似て羽は蝙蝠の如し。但是は琉球のカツフリの由
  - 一、海老大さ六尺程也 一、かき色の鷺 一、黒鳩 一、烏 一、目白 一、うを 一、龜
  - 一、檳榔樹の木 一、八入やしはの木 一、桐の木に似たる木 一、多羅葉かちやんの木鹿頭かなる實
  - なりと申候 一、桑の木 一、梅檀の木 一、榎の木 一、山椒の木實いかにも 一、明礬 一、綠
- 礬此島の近所に小島十六御座候。

沖の島の物産

- 一、沖の島の廻り十八里ほど御座候。湊二つあり。右此島にこれ有る品々。
- 一、雉子より少し小さき鳥にて、せい高くして毛は瑠璃色にして、足赤く御座候。扱なる程足速くありき申候。此鳥に餌を見せ候へば、くれ〜と鳴き申候。一、黒鳩
- 一、檳榔樹の木 一、八入やしはの木 一、多羅葉の木 一、犬讓葉に似たる木に、柿の如くの実なり申候。一、二階程の木の葉は大角豆まじげに似申候。實も大角豆の如くなり。右此島近所にいくつも小島これ有り。

一、日月星、日本にて見申候よりは大きに見え申候。御船六月五日に人なき島を出

船仕り、同十七日に豆州下田迄歸帆。同十九日の晩景に及び品川沖へ著き申候。

初て御禮の人々

- 一、人なき島より八丈島迄。海路四百三十里程これ有るべき様に存候。
- 一、六日に土井兵庫頭願ひの通り、稻葉美濃守末子縫殿を養子に仰付けらる。同日に柳生飛驒守二男又右衛門事、總領職に仰付けらる。
- 一、廿一日に初て御禮の面々、永井土佐守弟永井民部時服三銀馬代、水野信濃守男水野彈正銀馬代を献上す。外に數輩ありしかども省く。

石谷長門守屋敷修復料下賜

- 一、廿四日に土屋民部少輔死去。
- 一、廿五日に石谷長門守京都假屋敷修復料として銀十貫目、與力五騎同心三十八人へ銀八貫目を給ふ。右同斷に付て築田隱岐守へ銀十貫目を是又給ふ。右の與力同心は五ヶ年以來に家屋修復ありし故、今度は其儀に及ばず。

女三宮逝去

- 一、廿六日に、女三宮御逝去。
- 一、廿八日に増上寺後住に鎌倉の光明寺を仰付けらる。
- 一、廿九日に土井帶刀死去。



阿部豊後守卒去

一、五月四日、阿部豊後守卒去。依つて土井能登守を以て、御香奠銀二百枚を遣さる。  
一、八日に尾張中將殿御養女實は中納言殿の姫松平守藝守へ縁組を仰付けらる。同日に松平但馬守を營中へ招き、一類中連に願ひの通り、松平權藏に近日御目見仰付けらるべき由。

隱居の人々

一、十三日に岡部左近御勘定頭に御加増四百石、都合三千石にて仰付けらる。同日に仙石治左衛門御鐵炮頭島田新三郎跡役を仰付けらる。  
一、十六日に隱居の面々、岡部丹波守高四千石の内三千石嫡子隱岐守、五百石は二男頼母に給ふ。服部備後守高千石の内千二百石嫡子久右衛門、四百石は二男又右衛門に給ふ。依田内藏助高二千五百石の内、二千二百石は嫡子源三郎、三百石は二男蒔田八之丞に給ふ。何れも願に依つて分け下さる。

松平萬徳丸等御目見

一、十八日に始めて御禮の衆中、御太刀國後代金三枚時服十、金馬代松平萬徳丸松平越後守嫡子銀馬代時服五松平權藏松平越前守男銀馬代時服五小笠原大介内匠守男銀馬代時服三堀三四郎飛驒守男銀馬代時服三堀田織部備中守二男銀馬代時服三青木民部甲斐守男右之通り献上して御目

土井筑後守死去

見。同日に戸川縫殿繼目の御禮として時服五、金十枚、戸川槌千代分知の御禮として金一枚を献上。同戸川土佐守遺物として、御刀備前景光代金十五枚を差上ぐる。  
一、廿八日に井上筑後守駿河に於て死去。  
一、晦日に松平出羽守遺領一圓、遺子甲斐守に給ふ。同日に土井帶刀嫡領十萬石召上げらる。然れども故大炊頭筋目を思召さるに依つて、土井周防守に新規に六萬石給ふ。尤も取來る一萬石と都合七萬石なり。且又古河の城は、重ねて得替仰付けらるべしとなり。

松平出羽守繼目の御禮

一、六月四日に、松平出羽守甲斐守事繼目の御禮として、御太刀行平代金三枚綿二百把、黄金五十枚、同じく故出羽守遺物として、御太刀備前吉房古今和歌集寂蓮筆、同御臺所へ御屏風一雙松榮筆を差上ぐる。同日に、松平元千代大膳大初子の御禮として、時服十、御刀信房代金五枚献上。同日隱居の御禮として、御刀延壽代金五枚、銀馬代を献上。岡部丹羽守御目見、同じく隱岐守家督の御禮として金一枚を進上。

本理院一回忌に付銀鳥目を給ふ

一、八日に本理院殿一回忌に付いて、傳通院に於て御法事御執行。今日結願に依つ



て、御名代として久世大和守參詣。且又僧中へ白銀・烏目を給ふ。所謂、銀二百枚傳通院へ、銀十枚宛新智恩寺・靈岸寺、銀五枚宛 靈山寺・西福寺・誓願寺・本願寺・天徳寺同役僧二人・同月行事十二人、烏目三千貫讀經の衆僧、烏目百貫文盲目、同三十貫文盲女へ下さる。

一、十日に土井周防守新地拜領の御禮として、金廿枚・時服十献上。

一、十四日に土井帶刀遺物として御刀備前長光代金卅枚 同御臺所へ青地香爐を差上ぐる。

一、廿一日に八丈島より巽の方洋中島國有りて、人倫住す。珍木・珍鳥等ある旨、先年紀州商船漂著して、彼島の様子右の通り申上ぐるに付いて、去年五月、伊奈兵右衛門に仰付けられ、唐船造にして彼島へ遣す處に、頃日歸帆して珍木・珍鳥、其外色々の珍物を持來りて、今日献上。

一、廿二日、松平加賀守國元に在る男子死去。

一、廿三日に阿部豊後守遺物として、葉茶壺籠湖介・御香爐・唐銅象、同御臺所へ御香爐・青地鴨を進上。

八丈島巽の方國へ伊奈を遣す

二條殿母儀逝去

八條殿薨去

日光御門跡御赦色の面々

一、同月去る十六日に、二條殿母儀齋宮逝去の由。

一、廿五日に入條殿薨去。

一、廿七日に今度大猷院殿御遠忌に付いて、日光御門跡御願に付いて御赦免の輩左の如し。

一、谷出羽守へ御預御免。宮木數馬 一、松平監物子松平主税召出さるべき旨

一、牧野因幡守へ御預御免飯田五郎左衛門 一、父に御預御免。三浦小二郎

一、淺野又一郎へ御預御免山鹿甚五左衛門 一、泰元庵御目見仰付けらるべき旨

一、京都追放御免。宇津宮由的・山科長庵 一、佐州へ流罪御免。三雲縫殿

一、大島流罪御免。笹山新八郎但江戸には住居ならず

右の外江戸の町人、又國々の所追放の輩十四人御免なり。爰に省く。

一、廿八日に土屋民部少輔遺領二萬千石内二萬石土屋平八郎、二千石内千石は新田 土屋數馬に分ち給ふ。

一、七月三日に永井伊賀守領地去年損亡、今年六月三四日の大風雨にて過半水損に

永井伊賀守領地水損に依り付らる



依りて、五百貫目拜借を仰付けらる。

一、六日に遠山信濃守遺領一萬五百石餘、實子五郎八に給ふ。

一、八日に縁邊を仰付けらるゝ面々

織田出雲守へ 廣橋殿息女

植村萬之助へ 松平日向守娘

堀田左京亮へ 松平丹波守娘

淺野又一郎へ 淺野式部少輔妹

京極内記へ 毛利日向守娘

松平與十郎へ 松平美作守養女

渡邊右京亮へ 松平主殿頭養女

田中主殿頭へ 松平遠江守養女

久世出雲守へ 土井能登守娘

戸田日向守へ 毛利主膳姉

蔭田久太郎へ 市橋下總守娘

設樂右近へ 酒井壹岐守娘

右の外に數輩縁邊を仰付けらる。

一、廿六日に初ての御目見、酒井雅樂頭二男岩千代時服五銀馬代を差上げて御禮。

同日に繼目の御禮、土屋平八郎銀十枚・時服五、遠山五郎八時服三・金五枚、有馬宮内

金二枚、佐藤勘右衛門金二枚。分知の御禮、土屋數馬金一枚を献上。同日に土井民部

縁組仰付  
けらるゝ  
面々

御禮とし  
て捧物せ  
し人々

土井民部  
遠山信濃

上 守遺物捧

少輔遺物として御刀備前近景代 金十三枚 遠山信濃守遺物として御刀筑前代 金十枚を平八郎・五郎八に差上ぐる。

一、八月五日に、井上筑後守遺領一萬千五百石の内、一萬石は嫡子井上宮内、内千五百石は二男井上伊之助に分ち給ふ、是れ願に依つてなり。同日に西尾隱岐守二萬五千石の内、弟主水へ五千石、最前配分し給ふ處に、主水儀今度死去。實子なきに付いて、右五千石隱岐守高の内に仕るべき由仰出さる。

一、六日に酒井大學死去。

一、十六日五イに廣橋故大納言息女淺野式部少輔へ、願に依つて縁邊を仰付けらる。

一、十九日に王子金龍寺へ金五百兩・檜木二萬丁、相州大山八大坊へ金二百兩を給ふ。是れ修復料なり。

一、廿一日に本多織部兵部大 輔二男初ての御禮として、銀馬代・時服三、井上宮内繼目の御禮として、金五枚・時服三、井上圖書分知の御禮として、銀馬代を献上。同日に井上筑後守遺物として御刀代金 七枚を宮内より差上ぐる。

酒井大學  
死去



永井對馬  
守死去

一、廿三日に永井對馬守死去。  
一、九月四日に、奥平小二郎初ての御禮として、綿百把・銀百枚、同御禮として小室原新五郎士佐守男時服三・銀馬代を獻上。

崇源院殿  
五十回忌

一、七日に松平帶刀願に依つて、甥の半助を養子に仰付けらる。  
一、十五日に増上寺に於て、崇源院殿五十回の御忌に付いて、去る九日より萬部御經御執行。昨十四日に結願。今晨音樂を奏し、觀經一部讀誦廻向有ると云々。依つて増上寺方丈へ銀五百枚、讀經の僧中竝に役人へ銀四千六百七十八枚、樂人十人へ金百廿五兩餘、所化六百九十八人へ金百七十四兩二歩を給ふ。且又諸大名より御香奠を獻上。

慈眼大師  
三十三回  
忌

一、十六日に御法事首尾能く相濟むに付いて、智恩院御門跡へ上使吉良上野介を以て、金廿枚・綿百把を遣さる。  
一、廿二日に慈眼大師三十三回忌に付いて、日光山へ小笠原丹後守を遣さるべき由仰出さる。

公方隅田  
川邊へ鷹  
狩

一、廿五日に御書院番頭永井對馬守跡役を本多造酒之丞に仰付けらる。  
一、十月六日に、酒井大學頭跡職高二萬石、相違無く嫡子大介に仰付けらる。  
一、七日に初めて御目見の衆中、松平伊豆守弟松平萬千代・同弟松平主税・秋田淡路守嫡子秋田采女等、銀馬代を獻上して御禮。  
一、十二日に公方家隅田川邊へ御鷹狩に出御、御物數白鳥二・白雁二、以上四つ御拳なり。分鷹にて物數十四。

禁裏女院  
御所へ獻  
上の品

一、十四日に御拳の白鳥一・白雁一宛禁裏と女院御所へ進ぜらる。  
一、十五日に入條殿家相續の御禮として、使者生駒玄蕃を以て、緞子五卷・御太刀目録を進上。同日に酒井大介家督の御禮として、金十枚・時服五を獻上。酒井大學頭遺物として御刀備前重光代金十三枚を同姓大介より差上ぐる。

寺領寄附

一、十六日に、定火消山口平六兵衛跡役久貝彌右衛門、新御番頭萬年佐左衛門跡役武田與右衛門に仰付けらる。同日に鎌倉の光明寺へ新規百石、江戸の新智恩寺へ新規に五十石を御寄附。



公方隅田川邊へ御狩

一、廿日に今度崇光院殿御法事に付いて、増上寺方丈より親詔に依りて罪御免の輩あり。  
一、十一月六日に公方家隅田川邊へ御狩に出御、御拳にて眞雁一・白雁二、分鷹にて物數二十九。

松平萬徳丸等元服並に任官

一、廿三日に松平萬徳丸・松平千菊丸・上杉喜平次、元服を仰付けらるゝに依つて、松平三河守萬徳丸御太刀豊後行平・黄金廿枚・綿二百把を献上。御盃頂戴の上にて、御一字を給ひ、綱國と號し、且又御刀佐野行廣を拜領。尤も從四位上に敍し侍從に任ず。上杉彈正大弼喜平次御太刀備前信房・白銀二百枚・時服十を献上。御盃頂戴の上にて御一字を給ひ、綱憲と號す。且又御刀備前長光を拜領す。尤も從四位下に敍し侍從に任ず。松平越前守千菊丸御太刀青江正恒・銀三百枚・時服二十を献上。御盃頂戴の上にて御一字を給ひ、綱昌と號す。且又御刀備前國房を拜領す。尤も從四位下に敍し侍從に任ず。  
一、廿五日に柳生飛驒守一萬石残らず又右衛門に下さる。同日に京油小路生駒主殿藏屋敷より出火、本院御所二條殿・近衛殿・八條殿・伏見殿・有栖川殿・女五宮好君御

京都の火災

松平主税死去

方下加茂石谷長門守屋敷・寺町等焼失す。

一、十二月七日に、松平主税伊豆守弟死去。  
一、十一日に永井對馬守遺領四千八百石内、四千三百石嫡子宮内、五百石二男主税に分ち給ふ。同山口平兵衛遺領五千石、山口半左衛門に給ふ。

縁組仰付けられし人々

一、十五日に縁組仰付けらるゝ面々

松平元千代 <small>大膳大夫嫡子</small> へ	松平大和守娘	中川主膳 <small>佐渡守男</small> へ	酒井雅樂頭娘
松平大介 <small>上野介男</small> へ	松平大和守養女	内藤紀伊守へ	松平出羽守妹
稻葉主水 <small>美濃守男</small> へ	太田攝津守妹	近藤竹之介 <small>登之介男</small> へ	永井信濃守姪
青山藤右衛門へ	石川若狭守娘	米津周防守へ	大久保山城守娘
水野七郎左衛門へ	永井五郎八妹	太田甚四郎へ	酒井頼母娘
島田虎之助へ	本多主殿姪	桑山内藏へ	佐野吉之丞娘
伊達安藝守へ藤堂主馬娘 <small>實は松平陸奥守妹なり</small>			

一、同日永井土佐守信濃守に改め、鳥居兵部少輔左京亮に改む。同日に柳生又右衛



柳生又右  
衛門繼目  
の御禮

玉露叢 卷第廿六

門繼目の御禮として金五枚・時服三を献上。同飛驒守遺物として御刀備前兼光代金七枚を差上ぐる。

一、廿三日、立花飛驒守入道好雪先頃卒去に付いて遺物として御掛物牧溪筆を同姓左近將監より差上ぐる。

一、廿六日官位昇進の面々 松平出羽守侍從に任ず位階如元 松平豊後守頼路從四位下に敍し侍從に任ず。松平若狹守・丹羽若狹守從四位下に敍す。

一、諸大夫の面々

水野民部美濃守 松平權藏備中守 土屋平八郎伊豫守 酒井大助石見守 柳生又右衛門對馬守 京極隼人備後守 松平大介式部少輔 森對馬 太田原主膳備前守 本多酒之丞淡路守に任ず。尤も從五位下に敍す。

玉露叢 卷第廿六 終

官位昇進  
の人々

玉露叢 卷第廿七

延寶四年

仙石因幡  
守御普請  
總奉行と  
なる

一、延寶四丙辰年正月三日に本院御所御普請總奉行に、仙石因幡守を仰付けらる。同日に井伊掃部頭直澄卒去。

一、八日御役替の面々。兼松又四郎跡役御槍奉行大久保新八郎、右同斷三枝平右衛門跡役設樂甚三郎、御鐵炮頭設樂甚三郎跡役金田惣八郎に仰付けらる。

一、十二日水戸少將殿昨十一日に前髪を執らせらるゝに依りて、今日上使として土屋但馬守を遣はる。

一、十三日に秋田安房守盛季攝州大坂御城中に於て病死。

一、廿五日に、甲府相公疱瘡還元に付いて、上使稻葉美濃守を以つて、甲府宰相殿へ



銀五百枚・時服二十、甲府虎松殿へ時服十、甲府殿母堂順性院殿へ銀百枚・〔縮緬カ〕縹紗十卷を遣さる。家司・小臣・醫師等女中などへも御祝儀を給ふ。同じく御臺所より宰相殿へ縮緬三十卷・二種一荷、虎松殿へ二種一荷、順性院殿へ縹紗二十卷を女中御使にて遣さる。

一、廿七日に井伊玄蕃頭へ上使久世大和守を以つて、父掃部頭香奠白銀五百枚遣さる。同じく御臺所よりも白銀三十枚を給ふ。

一、二月七日瀧川長門守願に依りて役儀御免。則ち跡役を大久保山城守。且亦山城守跡役中根大隅守に仰付けらる。

一、十日に百人組の頭安藤彦四郎願に依りて役御免。

一、廿一日に内藤若狹守を御側衆に仰付けらる。則ち若狹守跡役大御番頭を永井佐渡守に仰付けらる。

一、廿三日に小出若狹守事下野守に改む。

一、廿五日に井伊掃部頭遺領三十萬石、相違なく猶子玄蕃頭に給ふ。依りて今日繼

内藤若狹  
守御側衆  
に仰付け  
らる

御役替の  
面々

阿蘭陀か  
びたん御  
目見

本多作左  
衛門繼目  
の御禮

目の御禮として御太刀正廣代金七枚黄金五十枚・綿二百把、同じく御臺所へ銀百枚・縮緬二十卷を献上。井伊掃部頭遺物として御脇指貞宗代金二百枚・御茶入漢丸壺、同じく御臺所へ御屏風一雙扇子流し古法眼筆・御香燼青滋口寄を差上ぐる。

一、三月四日に御役替の面々、御書院番頭永井土佐守跡役稻垣藏人、百人組の頭安藤彦四郎跡役水野半左衛門、御持筒頭水野半左衛門跡役酒井小平次、御弓頭酒井小平次跡役渡邊權太夫に仰付けらる。

一、十五日に阿蘭陀かびたん献上物を捧上して御目見。此時毛替の驢馬二匹献上す。同日に松平備前守娘を堀周防守へ縁組を仰付けらる。

一、廿三日に本多作左衛門繼目の御禮として、金二十枚・時服六を献上。同じく本多飛驒守遺物として御刀志津兼氏代金九枚を差上ぐる。

一、廿七日に松平將監事願の通り隠居。依りて本領二萬二千二百石の内二萬二千二百石・嫡子松平對馬守・千五百石内五百石は新田・二男松平大學・千石新發の地・三男松平仁右衛門に分ち給ふ。是願に依りてなり。



高田出火

一、晦日に松平越後守城下高田出火、烈風にて侍屋敷二百四十軒餘、町屋三十七軒焼失す。城内は別條なし。

永井伊賀守御免

一、四月三日に永井伊賀守病氣に依りて奉書を以て御免。則ち戸田伊賀守へ跡役京都所司代を仰付けらる。且亦一萬石御加増を給ふ、都合三萬千石。同日に山科殿息女を順昌院殿養女になされ、甲府殿簾中に仰付けらる。

一、八日に松平將監隱居の御禮として御刀吉岡一文字代金十七枚五兩を進上。

一、十一日に金森飛騨守嫡子金森萬之助初ての御禮として綿百把・金馬代を献上。同じく相馬出羽守弟東采女初ての御禮として時服五・銀馬代を差上ぐる。

伏見殿御息女薨去

一、十三日、去る六日に伏見殿御息女好君薨逝。

一、廿五日に森内記願に依りて、同姓伯耆守領知の内新田一萬五千石を森對馬守に分ち給ふ。

一、晦日に新庄民部死去。

一、五月三日に遠藤備前守死去。

京都大坂の大風雨

一、五日の午の刻より同じく八日迄甚雨。依りて五條・三條等の橋押流す。大坂も先月廿六日より當月迄雨降りて天満橋流る、其外河州も洪水す。

一、廿一日に御書院番頭三枝隱岐守願に依りて役御免。

一、廿七日に御鐵炮頭弓削多忠ナシイ左衛門跡役を天野彌五右衛門に仰付けらる。

一、廿八日に駿府御城代松平左近大夫願に依りて役御免。

一、六月二日に龜井能登守城下石州津和野大地震所々破損左の如し。

一、屋敷多門藏・石垣塀六七間ほどづつ崩る多門は七所傾く

一、川筋の石垣五百三十三間崩る 一、家中侍屋敷の石垣塀大分破損

一、町中・家藏大分破損 一、家數都て百三十三間倒る内十六は土藏也

一、田畑十間ほど或は潰附込或は水除崩る 一、堤三ヶ所損す

一、潰拔九十三ヶ所 一、溝・土手・川除ともに九百三十六間崩る

一、大釜八百廿一破る 一、死人七人内男五人女三人

一、怪我したる者卅五人内男廿四人女十一人 一、牛五匹内三匹は死し二匹は怪我

松平左近大夫駿府城代を免ぜらる  
津和野大地震



松平豊前守駿府城代となる

右石州津和野城下より西北は海手長門國境迄八里ほど、東へは廿一里ほどゆり。

一、三日に駿府御城代を松平豊前守に仰付けらる。二千石御加増なり。同日に大御番頭松平豊前守跡役堀田對馬守、御書院番頭堀田對馬守跡役荒川出羽守、御小性組番頭荒川出羽守跡役米津周防守に仰付けらる。

本理院殿三回忌

一、八日に本理院殿三回御忌の御法事傳通院に於て千部御執行。今日相濟むに依りて、御名代に稻葉美濃守參詣。御布施として傳通院へ白銀二百枚を給ふ。外の僧中は爰に省く。

一、九日に久永源兵衛御持筒頭、本多平右衛門御鐵炮頭、宮城主殿御歩行頭に仰付けらる。

一、晦日に六郷伊賀守願の通り隱居。家督の儀は嫡子佐渡守へ相違なく給ふ。遠藤備前守跡職相違なく嫡子外記に給ふ。

松平隼人正死去

一、七月九日に松平隼人正死去。

一、十一日に遠藤備前守遺物として、御刀保昌五郎代金十七枚五兩を差上ぐる。六郷伊賀守隱居の儀に付いて、御刀備前雲生代金七枚を差上ぐる。

諸士縁組仰付けらる

一、十八日に縁組を仰付けらるゝ面々。

一、飛鳥井大納言孫女 松平越前守へ 一、細川越中守娘 西園寺中將へ

一、酒井河内守娘 榊原熊之助へ 一、松平大隅守娘 織田左門内記子へ

一、溝口信濃守娘 酒井石見守へ 一、松平丹後守養女 三浦壹岐守へ

一、岡部左近娘 生駒主殿へ 一、中根平十郎娘 市岡彦右衛門へ

一、稻葉清左衛門娘 加藤權之助へ 一、伊達肥前松平陸奥守陪臣守娘 同同片倉小十郎へ

一、同同松平八之助陸奥守陪臣娘 片倉三之助小十郎子へ仰付けらる。

一、廿一日に松平兵部大輔願の通り隱居。家督の儀は相違なく越前守に仰付けらる。

一、廿三日に戸田越前守伊賀守事京都へ御暇に付いて、御料理且亦御手自御茶を給ひて後に、從四位の侍從に任じ給ふ。



公方家御  
臺所薨去

一、廿六日に太田攝津守を營中に召して、寺社奉行に仰付けらる。  
二、八月五日亥の刻に、公方家の御臺所薨去。兼ねて日蓮宗御歸依なれども、御願に  
付いて天台宗に改め給ひ、東叡山に於て日光御門跡御導師なり。

御臺所御辭世

うつろへいつかいつとて花もなくかへるや悔し三十年八重垣  
むさし野の草葉のかげに宿かりてみやこのそらにかへる月かな  
以上二首也。今年三十八にならせらるとなり。

一、七日に御臺所御遺體、明後九日に東叡山へ御葬送。則ち九日より十一日迄御經  
讀誦。十一日より十五日迄千部御經御供養なり。

一、八日に右の御葬禮に付いて、井上相模守へ御番仰付けらる。

一、九日に御葬送の御道筋西の引橋より一つ橋通り、中根平十郎・堀三左衛門・船越  
左門屋敷の前、津輕越中守・永井信濃守屋敷の前、松平加賀守屋敷の前、堀丹波守・石  
川主殿頭屋敷の前より東叡山黒門へ入らせられ、護國院へ御遷座。

御遺骸供  
奉の行列

一、同日酉の刻御遺骸供奉の行列、

御先提灯黒鍬者一人 御歩行衆一組 提灯黒鍬者一人 御歩行衆一組以上 提灯黒鍬者一人

人同手 御歩行衆頭二人 提灯黒鍬者一人 小十人組一組 右同斷右同斷 右同斷番

頭一人 御傘一奥下 提灯黒鍬者一人 御挾箱二奥下 御長刀一奥下男一人 提灯一

奥下男一人 御廣敷番右同 御輿御廣敷添番十人 御香爐持伊賀 御輿舁三十人奥下 提

灯二奥下男二人 大久保右京亮 御輿臺一黒鍬者二人 提灯一黒鍬者 右御輿一挺御供乗

物八 右十八挺の乗物支配の伊賀衆六 乗物舁黒鍬の者四人宛提灯一黒鍬者 伊賀

衆十人提灯一黒鍬者 押の衆二人。

右の外に御先へ稻葉美濃守、御跡土屋但馬守並に大目附の面々相越す。

御棺本堂へ入參り作法事終つて、龕前堂へ入御。御導師日光御門跡龕前堂に於て、

光明供並に御授與の法有りて、御棺を火屋に送り奉りぬ。御戒名は高嚴院殿と

號し奉りぬ。

一、十日に東叡山へ納りし御香奠は、

東叡山に  
納まりし  
香奠



護國院に  
て御法事  
執行

女院御所より銀五十枚、甲府相公より銀三十枚、館林相公より右同斷、尾張黃門より右同斷、紀伊黃門より右同斷、水戸相公より銀二十枚、尾張中將より銀五枚、水戸少將より右同斷、徳川常州より右同斷、千代姫君より銀二十枚、松平越後守より銀十枚、松平加賀守より銀三十枚、松平左京大夫より銀三枚、松平攝津守より右同斷、松平出雲守より右同斷、保科筑前守より銀十枚、松平刑部大夫より銀二枚、松平播磨守より右同斷。

右の外諸大名衆よりは先年御定の通りなり。

一、十二日の夜風雨にて護國院破損。依りて御法事十三日は延引して十四日より亦始まる。

一、十八日に御法事相濟むに付いて、日光門跡へ上使土屋但馬守を以つて、白銀五百枚を遣さる。其外僧中・樂人共へも御布施を遣さる。

一、十九日に松平美作守卒去。

一、廿三日に秋田信濃守繼目の御禮として、御太刀目錄・黄金二十枚・綿百把、同じく

大御番頭  
御書院番  
頭任免

増上寺出  
火

本院御所  
御移徙

本多能登  
入道卒去

安房守遺物として、御刀備前長光  
代金廿枚を差上ぐる。松平越前守家督の御禮として、御刀家守黃  
金百枚・綿五百把、同じく松平兵部大輔御太刀目錄・時服十、隱居の御禮として差上ぐる。且亦兵部大輔より右の儀に付いて、御太刀中川郷代  
金五千貫・佛智の墨跡を差上ぐる。

一、廿九日に大御番頭戸田相模守跡役酒井下總守、御書院番頭酒井下總守跡役稻葉出羽守に仰付けらる。同日に水野監物死去。

一、九月廿一日に増上寺より出火。此時焼失の所々、大方丈・小方丈・御裝束所・鎖の間・玄關取付・大庫裏・小庫裏・新茶屋・黒書院・居間竝に常灯の間・納所寮・土藏十二軒・部屋七軒・寮湯屋等也。残る所々は本堂三間・表門・裏門・御靈屋の分、奥の土藏・新藏・五輪番藏・風呂屋・米藏・中間部屋・所化寮・持僧寮等なり。

一、廿六日に本院御所御移徙に付いて、畠山下總守を以て進らせらるゝ品々。

本院御所へ黄金廿枚・綿二百把・三種二荷 法皇御所へ綿百把・三種二荷

女院御所へ綿百把・三種二荷を獻ぜらる。

同日に本多能登入道遁齋、在所白河に於て死去。



圓滿院門  
跡薨去

- 一、廿七日に織田主水死去。
- 一、十月一日に圓滿院御門跡薨去。
- 一、二日に青山丹後守死去。
- 一、三日に鷹司大政所薨去。
- 一、六日に阿部播磨守病氣に付き、御役願に依りて御免。
- 一、八日に稻葉内記死去。稻葉美濃守伯父是れ先年細川越中守へ御預の處なり。
- 一、九日に秋月佐渡守嫡子秋月出雲守死去。
- 一、十一日に高木伊勢守願に依りて役御免。
- 一、廿三日に役替の面々。

諸士役替

御書院番頭青山丹後守跡水野十兵衛、常火消番頭水野十兵衛跡大久保四郎左衛門、駒井右京跡新番頭松平與右衛門、御書院組頭松平與右衛門跡瀧川若狹守、小十人番頭宅間伊織跡秋田平太夫、御鐵炮頭蜷川喜左衛門跡神谷與七郎、御鐵炮頭菅沼藤十郎跡松平二郎三郎、御弓頭三宅半四郎跡大久保喜六に仰付けらる。

永井伊賀  
守參上

一、廿五日に永井伊賀守京師より參上に付いて、禁裏より宸翰の御懷紙竝に宸筆の伊勢物語の御屏風一雙を進らせらる。同日に松平美作守遺領高四萬石の内、三萬五千石嫡子岩松へ、五千石二男千勝へ願に依りて分ち給ふ。水野監物遺領五萬石相違なく嫡子右衛門大夫に給ふ。島津飛驒守遺領三萬石、相違なく養子又吉郎に給ふ。同日に堀丹後守死去。

隅田川鷹  
狩の御遊

一、十一月三日に公方家隅田川邊へ御鷹狩に出御。翌四日に御拳の鳥を禁裏・女院へ進らせらる。

一、九日に本院御所より御移徙の御祝儀として、堀川宰相を以つて御太刀・金馬代・練絹五匹を進らせらる。堀川宰相自分の御禮として、御太刀・銀馬代・紗綾三卷を献上。依りて御暇の節、銀百枚・御小袖六を堀川宰相へ給ふ。

一、十五日に尾張中將殿當姫御方、今日松平安藝守へ婚姻也。同日に繼目の御禮の衆中、時服十・金廿枚、水野右衛門大夫。時服六・金十枚、松平岩松。時服五・銀十枚、島津又吉郎献上。水野監物遺物として御刀高木貞宗代。金廿五枚。松平美作守遺物として御刀備前助吉代。金十五枚。

尾張中將  
の女松平  
安藝守に  
嫁す



寶樹院御遠忌

島津飛驒守遺物として御刀尻掛代金十枚五兩を差上ぐる。  
一、十六日に藤堂大學頭高次卒去。依りて同姓和泉守へ銀三百枚を給ふ。  
一、廿七日より寶樹院殿御遠忌の御法事始まる。日光毘沙門兩門主、其外僧中への御布施あり、爰に略す。

三谷傾城町出火

一、十二月七日に三谷傾城町より出火。火元は西河岸湯屋市兵衛と云ふ者なり。類火の所々は京町・新町・住町・江戸町二丁目・揚屋町等残らず焼失す。烈風にて外へ焼出、類火の所々は田町一町ほど車善七構へ残らず、六郷佐渡守長屋内藤右近大夫長屋・小出伊勢守・牧野播磨守・金森左京三輩の屋敷は残らず、觀音の寺中にては、不動院・壽教院・智泉院・惠明院・泉凌院・龍善院・泉藏院・修禪院・覺善院・明音院・壽徳院・齋頭坊也。山宿町屋兩側ともに二町程、花川戸町兩側二町ほど、聖天町・横町一町ほど、本所中の郷松平紀伊守屋敷にて焼止まる。傾城燒死者十三人、逐電の傾城十六人。  
一、十一日に甲府相公御息虎松殿官位御昇進有りて、從三位左近衛中將綱豊と號す依りて御太刀目錄銀二百枚、時服十を中將殿より、甲府相公よりも綿百把、金馬代獻

甲府相公御息男御昇進

上なり。將軍家よりも中將殿へ御脇指一文宇吉房を給ふ。

一、十五日に本多一學長門守猶子初ての御禮として、御太刀・銀馬代・時服二つ獻上。松平周

防守領知の内、新田二千石を舍弟主水に分ち給ふ。是れ願に依りてなり。

一、廿一日に堀丹後守遺領三萬石、異事なく嫡子左京に給ふ。

一、廿二日に縁組を仰付けらるゝ面々。

松平大膳大夫娘 内藤下野守へ 松平阿波守養女 井伊玄蕃頭へ

松平播磨守娘 水谷大千代左京亮男へ 脇坂中務少輔娘 有馬周防守へ

相馬出羽守妹 佐竹壹岐守へ 安藤對馬守娘 小出右京備前守男へ

本多兵部少輔養妹 細川玄蕃頭へ 松平久馬助娘 松平半左衛門豐前守男へ

三枝攝津守娘 新庄源右衛門へ 牛込忠左衛門娘 小出内記主殿男へ

大草主膳正娘 川勝千郎右衛門へ 大久保豊前守娘 伊澤吉兵衛へ

織田主計頭娘 市岡彦右衛門へ仰付らる。

一、廿五日に繼目の御禮。堀左京亮御太刀目錄・黄金十枚・時服二つを獻上。同じく丹

諸士縁組を仰付けらる



本多長門  
守御役御  
免

波守遺物として、御刀延壽國泰代  
金十五枚を差上ぐる。三枝左近家督の御禮として、御太刀目錄  
金二枚を献上。同日に本多長門守願に依りて役御免。同日に徳川常陸介殿へ上使  
土屋但馬守を以て、從三位中將に任ぜらる。

諸士官位  
昇進

一、廿六日に官位昇進の面々。  
松平福千代左兵衛  
督男侍從兼近江守・松平大學頭刑部少  
輔男從四位下・松平右近大夫播磨  
守男從四位  
下に任ず。黒田宮内右衛門  
佐二男宮内少輔水谷犬千代左京  
亮男出羽守鍋島式部加賀  
守男紀伊守遠山  
五郎八信濃  
守男和泉守・毛利主膳安房守・高木勘解由肥前守・堀田左京備中  
守男下總守・相良長次  
郎遠江  
守男壹岐守・井上宮内筑後守・小野十兵衛長門守・稻垣藏人備後守・山田十右衛門甲  
斐守・仙石治兵衛丹波守・大久保刑部右京  
亮男對馬守・松平半左衛門甲斐守・酒井主殿下總  
守男伊  
勢守右十六人諸大夫に任ず。同日に保田甚兵衛・石川彦五郎・秋田平太夫・秋元隼人・  
宮城主殿・大久保喜六・松平三郎二郎・川田六郎左衛門・神谷與七郎・渡邊彌之助・大久  
保傳四郎・川合平太夫。右之面々布衣に仰付けらる。同日に縁組仰付けらるる、面々  
は、京極甲斐守娘を森伯耆守へ、板倉隱岐守娘を酒井七郎へ仰付けらる。

神田出火

一、廿六日に神田より出火。火元は須田町二丁目名主市兵衛火元、類火の所々は須  
田町・連雀町・土井周防守長屋・通新石町・神田鍋町・同鍛冶町二丁目通・本乗物町・白銀  
町三丁目・四丁目・右町三丁目・四丁目・十軒店・室町三丁目・小田原町二丁目・駿河町瀬  
戸物町二丁目・安針町二丁目・本船町二丁目・伊勢町二丁目・小細工町一丁目・小船町  
三丁目・堀江町四丁目・本町三丁目・四丁目・白壁町二丁目・岡付鹽町・鐵炮町・岩付町二  
丁目。右の町々へ付く新道通り竝に横町・會所屋敷残らず焼失。同日に京都に於て  
法皇御所より出火。女院御所へ火移りて兩御所共に焼失。

一、廿九日に織田左門内記  
嫡子を諸大夫に仰付けらる。

玉露叢 卷第廿七 終



玉露叢 卷第廿八

女院御違例

黒田宮内  
松平右衛門  
佐總領  
職仰付け  
らる  
阿蘭陀  
か  
御  
目見

延寶五年

- 一、延寶五丁巳年正月廿五日、女院御所御違例殿と之れなきに依つて、御見舞の爲に酒井日向守、井上玄徹を遣さるべき由仰出さる。
- 一、二月六日に松平主膳正遺領残らず養子九十郎主膳正弟に給ふ。
- 一、八日に藤堂大學頭遺物として、虚堂墨蹟・玉室筆を差上ぐる。
- 一、十三日に松平右衛門佐願の通り、次男黒田宮内少輔を總領職に仰付けらる。是れ右衛門佐願に依つてなり。
- 一、十五日、阿蘭陀かびたん御目見、例の如く献上物あり。
- 一、廿六日、來る三月三の丸に於て御金吹き候の間、御金奉行毎日一人づつ彼場所へ

罷出づべき由と云々。

- 一、廿八日に黒田宮内少輔取來る四萬石、別紙に下し置かれ候まゝ、總領職に仰付けらるゝ上は領知差上ぐべき由、右衛門佐申上ぐると雖も、右衛門佐本高の内たるの間、返し下さるゝ由。

一、三月朔日に女院御違例に依つて、山本友仙を差上せらる。

一、七日に松平肥前守隱居、嫡子内匠頭に本高五千石給ふ。安藤彦四郎隱居、嫡子木工之助に本領四千石給ふ。何れも願に依つて隱居。

一、十二日より十五日迄奥州南部地震、其上潮上り在家二十軒餘破損。

一、本多伯耆守死去。

一、廿一日に大御番頭本多伯耆守跡役に本多淡路守を仰付けらる。同日に池田豊前守遺領願の通り、松平伊豫守次男二郎三郎に給ふ。

一、廿五日に久保吉右衛門御右筆老衰に依りて御役御免。

一、廿七日に永井伊賀守卒去。

延寶五年

山本友仙  
上京

松平肥前  
安藤彦四郎  
隱居

本多伯耆  
死去



池田數馬  
繼目の禮

松平民部  
隱居

- 一、四月十四日役替の面々。御書院番頭本多淡路守跡役を稻葉石見守、御小性組番頭石見守跡役を石川市正、百人組坂部三十郎跡役を蒔田權之助、御持弓頭蒔田權之助跡役を北條新藏、御持筒頭日向半兵衛跡役を落合源左衛門に仰付けらる。
- 一、廿一日に繼目の御禮として、池田數馬豐前守猶子金十枚、裕六を献上。幼少故名代として同苗信濃守御禮、同豊前守遺物として、御刀備中直次代金十三枚を差上ぐる。
- 一、廿四日に瀧川長門守死去。
- 一、廿五日に松平民部少輔願に依りて隱居。領知六千石相違なく實子備後守に給ふ。
- 一、五月十一日に松平民部少輔隱居の儀に付いて、御刀吉岡一文字代金十枚を差上ぐる。
- 一、十五日に秋月佐渡守願に依つて、次男兵部を總領職に仰付けらる。同日に山名主殿養子に大澤右京大夫次男を仰付けらる。
- 一、十八日に本多土佐守願の通り役御免。
- 一、十九日に永井伊賀守遺領三萬石を相違なく嫡子大學に給ふ。
- 一、廿一日に館林相公御簾中先頃平産に付いて、今日御祝儀を遣さる。所謂、

館林殿簾  
中平産の  
御祝儀

京極頼母  
死去

永井大學  
繼目の御  
禮

轉法輪右  
大臣薨去

阿部丹波  
守役儀御  
免

- 時服廿三種二荷館林相公へ 卷物二十二種一荷同簾中へ
- 銀百枚二種一荷出生の姫君へ 卷物十二種一荷桂昌院殿へ遣さる。
- 同日に京極頼母死去。
- 一、廿六日に永井大學繼目の御禮として、御太刀・銀馬代・黄金十枚・時服六を献上。
- 同伊賀守遺物として、御刀左安吉代金三十枚・御葉茶壺陰山を差上ぐる。同日に永井民部永井市正養子に仰付けらる。御禮として御太刀・馬代・時服二献上。同日に山名宮内、山名主殿養子に仰付けらる。御禮として御太刀・馬代・時服二献上。
- 一、六月四日に御小性組頭本多土佐守跡役に池田帶刀仰付けらる。
- 一、十一日に轉法輪右大臣薨去。
- 一、十九日に内藤采女常火消役に仰付けらる。
- 一、同月に肥前國唐津の呼小島・小川島と兩島邊へ長さ七尺餘顔は猿の如く、尾は鯨に似て身に毛生へて鼠色たる生類、折々右の島へ海中より上る。
- 一、廿三日に大坂御城番安部丹波守連々願に依つて、役儀御免の奉書を遣さる。



阿部播磨守隱居

保科越前守大坂城番仰付け

跡目仰付けらるる面々

家督の御禮として捧げ物せし人々

繼目の御禮に捧物せし人々

圓滿院御門跡薨去

一、廿七日に土井信濃守遺領一萬石の内、五千石土井能登守二男土井左門に給ふ。  
一、七月四日に阿部播磨守願の通り隱居。依つて領知九萬石の内八萬石嫡子美作守、五千石二男七三郎、千石三男長吉、二千石四男鶴之助に分ち給ふ。是れ願に依つてなり。

一、八日に保科越前守を營中に召して、大坂御城番安部丹波守跡役に仰付けらる。尤御加増五千石、都合二萬石なり。且又越前守を彈正忠に改む。

一、十一日に今上皇帝御母公新中納言殿、去る三日に薨逝に依つて、御使として京都へ大澤右京大夫を遣さるべき由、今日仰出さる。

一、十二日に跡目仰付けらるる面々。本多伯耆守遺領八千石の内七千石嫡子本多豊前守・千石本多三左衛門、青木求馬本領五千石嫡子右衛門、瀧川長門守本領三千石嫡子若狭守、新庄長門守本領三千石嫡子大學、菅沼藤十郎本領二千石嫡子七之助に相違なく給ふ。

一、十七日に女院御所御違例御快然に付いて、御褒美として井上玄徹を法印、山本

友仙を法眼に仰付けらる

一、十八日に家督の御禮として、阿部美作守御太刀目録・黄金三十枚・時服十を献上。

且又分知の御禮として、阿部七三郎御太刀目録・黄金三枚、阿部長吉御太刀目録・黄金二枚、阿部鶴之助御太刀目録・黄金一枚を献上。同日に初めての御禮、松平巳之助

對馬守嫡子御太刀・銀馬代・時服三、土屋主計相模守嫡子御太刀・銀馬代・時服三を献上。同日に繼

目の御禮として、瀧川若狭守御太刀目録・金二枚、本多豊前守御太刀目録・金三枚、新庄大學御太刀・馬代・金二枚、土井左門御太刀・馬代・金三枚、青木右衛門御太刀・馬

代・金三枚を献上。同日に分知の御禮として本多三左衛門御太刀目録・金一枚を献上。同日に土井信濃守遺物として、御刀備前元眞代金十枚瀧川長門守御刀備前經弘代金五枚本多伯耆守

御屏風一雙雪村筆を差上ぐる。同日に隱居の御禮として、阿部播磨守より御刀相州行光代金五十枚御掛物山水周文筆を献上。

一、十八日に圓滿院御門跡薨去。

一、廿一日に縁組仰付けらるる面々。



酒井雅樂頭娘を松平九十郎へ

松平丹後守娘を伊東出雲守へ

松平伊豫守娘を本多平八郎へ

織田山城守娘を土方木之助備中守子へ

立花飛驒守娘を相良壹岐守へ

内田出羽守娘を毛利安房守へ

小笠原土佐守娘を秋山吉兵衛十右衛門男へ

牛込忠左衛門娘を仙石吉十郎次左衛門男へ

仰付けらる。此外にもこれ有りと雖も省く。

一、廿五日に大久保出羽守を老中列に仰付けらる。且又出羽守を加賀守に改む。

一、廿七日に新庄隱岐守、大坂御城中に於て病死。

一、同月中旬より、江府町中踊を始め美麗を盡す。十月十七日に踊御法度の御觸あり。

大久保出羽守老中に列す  
踊法度の觸

一、廿八日に本多下野守舍弟萬之助を嫡子に仰付けらる。是れ願に依つてなり。

同日に京極備中守を營中に召して、同姓頼母領知三千石は分知にして備中守本高の内なれば、則ち返して下さるの由仰出さる。

一、八月二日に高巖院殿御一周忌に付て、上野に於て今朝より千部の御經を御執行。

高巖院贈位

同日に高巖院殿御贈位勅許ありて、從一位を贈り賜ふ。依つて久世大和守を以て、位記・口宣を日光御門跡へ遣さる。

一、五日に御法事相濟むに依つて、上使稻葉美濃守を以て、日光門跡へ白銀五百枚、其外僧中・樂人等に御布施を給ふ。

一、六日に智恩院御門跡へ御合力米として、三百俵を遣さる。

一、八日に山名主殿養子宮内死去。

一、十日に榊原越中守願の通り、松平和泉守五男半彌を猶子に仰付けらる。

一、十四日に毛利刑部少輔嫡子伊豫守頃日死去。

一、廿二日に松平越後守室松平大膳大夫姉卒去。依つて上使板倉石見守を以て御香奠白銀二百枚を遣さる。

一、廿三日に桑山修理亮願の通り隱居、本高一萬三千石餘の内、一萬千石嫡子三之助・千二百石二男幾之助・千石内二百石新發の地三男岩松に分ち給ふ。是れ又願に依つてなり。

一、廿五日に高巖院殿御贈位の御禮として、京都へ織田主計頭を遣さる。依つて禁

高巖院贈位の御禮



裏へ白銀五百枚、法皇御所へ白銀三百枚、本院御所へ白銀二百枚、新院御所へ右同斷、女院御所へ右同斷。

一、廿八日に桑山修理亮隱居の儀に付いて、青磁中無御花入差上ぐる。

一、九月六日に、山口修理亮頃日死去。

一、八日に勢州山田出火、内宮町屋二百八十軒餘焼失す。御宮は別條なし。

一、九日に有馬中務大夫養子源四郎死去。

一、廿三日に牧野佐渡守卒去。

一、廿五日に太田原山城守願の通り隱居。領知一萬二千石餘養イ猶子太田原備前守に給ふ。同日戸田相模守願の通り隱居。高四千石の内三千五百石嫡子石見守、五百石

二男惣左衛門に給ふ。

一、廿六日に大坂町奉行彦坂壹岐守跡役を島田藤十郎に仰付けらる。千石御加増ありて都合千六百石になる。

一、廿九日に新庄隱岐守遺領一萬石、相違なく嫡子主殿に給ふ。

勢州山田の火災

牧野佐渡守卒去

九州の洪水

一、十月三日、九州筋甚雨、疾風に付、秋月佐渡守領内經福島と云ふ所知行高一萬石ほど損亡あり。所謂

一、稻九千三百廿駄流失 一、川漬千五百俵流失

一、田地百五十五町三反餘砂入 一、井手川除塘土手鹽濱の所々残らず破損あり

一、倒家廿七軒内十四軒流失す男一人溺死 一、馬百廿五匹流失す一匹は牛

以上秋月佐渡守領内の分なり。

一、商船三艘破損 一、松平大隅守領内にて商船一艘破損、水主二人溺死。

一、右同領にて俄に池三つ出來す、右池の廣さ一つは六千坪、又一つは六百坪、又一つは七百坪あり。深さ四尋・五尋又は十尋計り。此外所々に小池ども幾所にも出來。

一、方々にて山二町・三町程づつ崩る。一、蕎麥・麥・粟・大豆の類大分流失す。

以上松平大隅守領分なり。

一、伊東出雲守領内にて損亡の所々、



一、稻六百四十把流失 一、川濱二百七十五俵流失 一、井堰百三十九ヶ所破損  
但埋種算數 多流失す 一、堤十ヶ所破損間數にして 九百十八間 一、倒家四十六軒 一、男女三人溺死 馬一匹流失 一、楠板八十板流失 一、船大小四艘破損

右の外破砂入の田地數ヶ所と云々、以上伊東出雲守領内

水戸領津浪

一、九日に水戸領の浦々津浪上り、損亡の所々、  
 一、潰家八十九軒 一、溺死三十六人男三十四人 女二人なり 一、破損流船ともに大小三百五十三艘 一、艦三百六十六挺流失 一、梶二十三挺流失 一、帆柱廿一本流失  
 一、鮭網・鰯網五十一帖流失 一、鹽鰯・干鰯七千三百八十四俵流 一、鹽物を漬る大桶二百廿流失 一、鹽八百五十六俵流失 一、穀物千四百俵流失 一、稻四百三十二駄流失 以上水戸殿御領也。  
 一、同日に上總の國高沙の所々、  
 一、阿部伊豫守領内小濱領と云ふ所にて、倒家廿五軒・男女九人溺死。  
 一、和泉浦と云ふ所にて倒れ家の數知れず。田畠數ヶ所員數知れず。男女十三人溺死。

上總領火災

溺死。

一、岩船浦と云ふ所にて倒家四十軒・男女五十七人溺死。  
 一、東浦見村と云ふ所にて、倒家五十軒・男女九十七人溺死。  
 一、屋佐志戸村と云ふ所にて、倒家廿五軒・男女十三人溺死。  
 以上阿部伊豫守領内の分なり。

一、阿部播磨守領内御宿浦と云ふ所にて、倒家三十軒・男女六十三人溺死。  
 一、植村土佐守領内郡知小村と云ふ所にて、倒家六軒・子供二人溺死。  
 一、新宮村と云ふ所にて倒家十七軒・二人溺死。  
 一、澤倉村と云ふ所にて、倒家十一軒・二人溺死。  
 以上植村土佐守領内分なり。

一、板倉與五右衛門領知川津村と云ふ所にて、倒家十九軒・三人溺死。  
 右の通りにて其後毎日地震、晝夜かけて十七八度・二十度に及んで震ひけり。  
 一、同日に奥州岩沼領へ津浪上る。 一、民屋四百九十軒餘流家 一、人馬百五十人

奥州の津浪



溺死内馬廿七匹なり 以上田村右京大夫領知なり。

一、同日に房州も然り。民屋人馬の員數は知れず。同日に尾州御領・紀州御領も右同斷。

家督御禮の捧物

一、十一日に女院御所・新院御殿出來に付いて、今日御移徙。

一、十二日に家督の御禮として、太田原備前守、御太刀目錄・金五枚時服三獻上。同じく御禮として新庄主殿御太刀目錄・金五枚時服三獻上。同日に太田原山城守隱居の儀に付いて、御刀三原代金十枚新庄隱岐守遺物として御刀兼重代金十枚を差上ぐる。

一、十八日に松平新五右衛門・小出數馬・岡野半兵衛三人、御歩行頭に仰付けらる。

一、十九日に松平越後守室の遺物として、雪舟筆御屏風一雙進上。

一、廿四日に相良壹岐守死去。

一、十一月二日に、松平肥前守死去。

一、三日に松平備中守へ、御合力米として一萬俵を給ふ

一、廿七日に右の御禮として松平備中守より、金馬代時服五獻上。

一、六日・七日兩日に、御側御小性衆・御小納戸衆へ御腰物を下さる。所謂、

尻掛則長代金八枚大森信濃守

吉岡一文字代金八枚酒井壹岐守

來國光代金八枚内藤上野介

清江貞次代金八枚土岐伊豫守

備前正恒代金八枚米津周防守

左弘安代金七枚神尾飛驒守

國吉代金七枚能勢攝津守

備前定眞代金七枚稻垣市正

備前近景代金七枚堀山城守

清江貞次代金七枚朽木和泉守

延壽國吉代金七枚小笠原佐渡守

來國俊代金七枚渡邊安藝守

備前兼光代金七枚小出下野守

長義代金七枚瀧川相模守

元重代金七枚山田甲斐守

清江直次代金七枚遠山半左衛門

則重代金五枚坂本小左衛門

助貞代金五枚永井彦兵衛

來國俊代金五枚本多金右衛門左イ

清江貞次代金五枚松平傳左衛門

備前助貞代金五枚大久保兵九郎

備前恒弘代金五枚大久保市郎右衛門

延壽國泰代金五枚牧七左衛門

備前忠光代金五枚山崎伊兵衛



青江吉次代金五枚甲斐庄三郎右衛門 備前長光代金五枚遠山權左衛門

左文字代金五枚須田市兵衛 備前景光代金五枚河合平太夫

元重代金五枚天野傳四郎 新藤五國光代金五枚小栗十郎右衛門

信國代金五枚杉浦平右衛門 以上

一、九日に山口修理亮遺領、相違なく嫡子長次郎に給ふ。

一、十二日に九條左府薨去。

一、十五日、山口長次郎繼目の御禮として、金五枚・小袖五つ献上。同修理亮遺物と

して御刀備前助宗代金七枚五兩を差上ぐる。

一、十七日に松平帶刀死去。一、廿五日に加藤伊織死去。

一、十二月四日に甲府中將殿御袖を留め給ふに依つて、上使大久保伊賀守を以て中將殿へ御小袖十三種二荷、相公へ二種一荷を遣さる。

一、十二日に初めての御禮として、溝口隼人修理亮男御太刀・銀馬代を献上。戸田相模守隠居の御禮として、御脇指石州直綱を差上ぐる。

兩頭の活龜

一、十三日に大久保加賀守領内唐津より、兩頭の活龜を差上ぐる。

一、十四日に山内右近大夫遺領三萬石、願の通り弟大膳へ下さる。同日に五島淡路守願の通り隠居、領知一萬五千石餘嫡子主税に給ふ。

一、廿一日に移徙の御祝儀として、法皇御所より、東久世三位を以て御太刀目録・黄金馬代・白絹十四、女院御所より梅園右兵衛督を以て、御小袖三重三種二荷を進ぜらる。

山口大膳五島主税繼目の御禮

一、閏十二月朔日に山口大膳繼目の御禮として御太刀目録・黄金十枚・綿百把、同右近大夫遺物として御刀備前義光代金十五枚を差上ぐる。家督の御禮として、五島主税御太刀目録・黄金五枚・時服三を献上。同淡路守隠居の儀に付いて、御茶壺神樂を差上ぐる。

一、五日禁中へ御書物を進ぜらる。所謂、冊府元龜二百五十二冊・稗海八十冊・正百川學海二十冊・續百川學海二十冊・廣百川學海二十冊・三才圖繪五十冊を進ぜらる。

一、廿一日に黒田宮内少輔へ綱の御字を給ひ、綱政と號す。從四位下に敍し肥前守に任ず。且又松平の姓號を給ふ。依つて御目見、御盃頂戴の上にて御腰物備前長光代金卅枚

禁中へ書籍を献上する



官位昇進  
の人々

を給ふ。松平肥前守右の御禮として、御太刀備前兼光  
代金七枚銀三百枚・綿二百把を献上。繼目  
の御禮として、松平萬之助帶刀男御太刀目錄・金三枚献上。

一、廿六日に官位昇進の面々。松平隱岐守・大久保加賀守從四位下に任ず。榊原熊之  
助式部少輔・本多萬之助下野守  
猶子能登守・中川主膳佐渡守  
猶子因幡守・本多作左衛門飛驒守・山  
内大膳則大膳亮・永井大學伊賀守・永井民部市正  
嫡子日向守・秋月兵部山城守・桑山三之助  
美作守・山口長二郎修理亮・島田藤十郎越中守・鳥居宮内長門守・五島主税飛驒守に任  
ず。尤十三輩從五位下に敘す。内藤采女岡野平兵衛・松平内藏助・松平新五左衛門  
小出數馬以上五人布衣に仰付けらる。岡本壽仙・真瀬養安院兩醫法眼に仰付けら  
る。同日に大番頭土屋兵部少輔願の通り役御免。  
一、廿七日に水谷左京亮に新田二千石を給ふ。都合五萬石になし下さる。同日に渡  
邊大隅守千俵御加増を給ふ。瀧川相模守五百俵御加増を給ふ。

玉露叢 卷第廿八 終

玉露叢 卷第廿九

延寶六年

四谷出火

一、正月三日に江府の御城の矢倉の上の鯨に、逸れ鷹大緒を引懸けて有り。即ち居  
ゑ上げて御前へ出づると云々。  
一、十日に大御番頭土屋兵部少輔跡役を水野周防守、御旗奉行大久保四郎左衛門跡  
役を安藤九郎左衛門、御鐵炮頭安藤九郎左衛門跡役を宮部織部に仰付けらる。同日  
に四谷三丁目より出火。家數七軒焼失、其外焼失の所々。  
一、愛染院寺中竝に門前五六軒。  
一、伊賀組組頭永井九之助竝に御歩行頭落合源右衛門組残らず焼失、家數二十軒  
餘。



- 一、紀伊中將殿家來戸田市郎右衛門屋敷焼失。
- 一、御槍奉行の組頭太田源右衛門其外家數十軒餘焼失。
- 一、赤坂御掃除町残らず、組頭板倉彌作家焼失。
- 一、松平安藝守新屋敷長屋六七軒焼失。一、松平與右衛門屋敷焼失。
- 一、甲府殿家來中島三左衛門屋敷焼失。
- 一、松平三河守屋敷焼失。表長屋は残る。一、山内大膳亮屋敷焼失。
- 一、内藤右京亮屋敷焼失。一、六本木町竝焼失。
- 一、大久保加賀守下屋敷焼失。一、有馬左衛門佐右同斷。
- 一、日賀窪片町二町程残り其餘は焼失。
- 一、桑山丹後守下屋敷を切つて爰にて焼留る。一、戸川縫殿助下屋敷焼失。
- 一、戸田孫九郎屋敷焼失。一、戸田孫十郎屋敷焼失。
- 一、長坂にて大久保古加賀守隱居屋敷焼失。
- 一、太田原備前守屋敷下より長坂堀端迄町竝焼失。

二條關白  
殿若君元  
服

雲州出火

天樹院十  
三回忌

- 一、甲府殿三田の屋敷少し焼けて爰にて焼止る。
- 一、十二日に二條關白殿若君石君殿元服に付いて、御一字を遣さる石君綱平と云依りて石君へ御太刀國行代金十枚銀百枚、關白光平公へ御小袖三種二荷、女五宮へ黃金十枚三種二荷を遣さる。大澤右京大夫持參なり。
- 一、井上玄徹金百兩、山本友仙黃金十枚を給ふ。是れ女院御所御違例に付いて、永々在京に依りてなり。
- 一、十四日に松平上野介在所雲州に於て出火。屋敷竝に侍屋敷町屋過半焼失。
- 一、廿三日に大久保加賀守元高にて、下總佐倉へ所替なり。松平和泉守一萬石の御加増にて、肥前唐津へ所替なり。
- 一、廿五日に大久保加賀守金三萬兩拜借なり。
- 一、廿八日に水谷左京亮舊臘新田を本高に結び下さる。御禮として御太刀、金馬代、御小袖三を献上。
- 一、二月四日に傳通院に於て天樹院殿十三回忌の御法事、同六日結願に付いて、傳



通院へ上使稻葉美濃守を以つて御香奠を遣さる。傳通院へ白銀二百枚、外の僧中へは銀三十枚或は二十枚、或は五枚づつ給ふ。

一、八日に小笠原山城守死去。

一、十三日に法皇の姫宮靈巖寺殿薨去。

一、廿一日に高田御方七回忌に付いて、松平越後守へ上使土屋但馬守を以つて御香奠白銀二百枚を遣さる。

一、廿二日に宗右京對馬守嫡子初ての御禮として金馬代御小袖五を献上。

一、廿四日に五島淡路守死去。

一、廿七日に尾張中將殿より財産として唐木の脇息を差上げらる。

一、廿八日に所替竝に御加増の御禮として、松平和泉守より御太刀目錄御小袖五・

金十枚を献上。

一、廿九日に仁和寺御門跡逝去。

一、三月四日に水戸殿財産として、御屏風一雙・孔廟國替り五位鷲を献上。

靈巖寺殿  
薨去  
高田御方  
七回忌

仁和寺門  
跡逝去

永井道休  
死去

一、十日に朽木彌五左衛門死去。

一、十三日に綾小路侍從・柳原侍從兩輩へ方領百石づつ給ふ。

一、十五日に阿蘭陀かびたん進物を捧げて御禮あり。

一、十七日に永井彌右衛門入道道休死去。

一、廿三日に松平山城守を寺社奉行の職に仰付けらる。

一、廿六日に田村隱岐守宗良死去。

一、晦日に小笠原山城守遺領四萬石、相違なく嫡子能登守に給ふ。

一、四月二日に遠州二股青龍寺へ銀百枚を給ふ。是は當九月十五日、騰雲院殿三郎百信康

年忌に依りて御法事料なり。遠州西來院へ寺領廿石御増附、都合三十石なり。是は三

郎信康公の御母堂築山御方御菩提所なり。

一、三日に安部丹波守願の通り隱居。本領二萬石嫡子攝津守に給ふ。且亦新田千石

を二男助九郎に分ち給ふ。是れ願に依りてなり。御書院番頭町野壹岐守願の通り

御役免。

御書院番  
頭町野壹  
岐守御役  
御免



一、四日に松平右近大夫播磨守死去。  
 一、九日に二百石實相院御門跡、百石圓照寺殿、百石光雲寺是は明教院殿 女三宮の御事也、二百俵毘沙門堂門跡の御弟子新院宮、三百石醍醐御新加なり。是は去年日光御門跡御下向の刻、女院御所御願に依りてなり。

一、十一日に小笠原山城守遺物として、御太刀青江貞次金十五枚代差上ぐる。安部丹波守隱居の儀に付いて、御小脇指信國代金十三枚を差上ぐる。

一、廿八日に二條石君より元服の御祝儀として、隱岐修理を以て眞の御太刀備前良守代金二枚、二條前攝政より二種一荷、女五宮より白銀十枚、御肴一種を進らせらる。

一、廿九日に女院御所へ中川勘三郎を以つて、鴨の御香爐一、青貝の御卓一、青磁の御切溜一、阿蘭陀御時計一、猩々緋一端を進らせらる。

一、五月十二日に女院御所御違例に付いて、平賀玄純を遣さる。

一、十三日に醍醐少將を清華の列に仰付けらる。御禮として一條殿より、難波内藏權頭を以つて二種一荷進上なり。且亦醍醐少將より堀川右近を以つて、御太刀、銀馬

女院御所へ進上

代・香袋一箱を進上なり。實相院御門跡の使者佐野修理、御太刀、馬代、縞珍三卷、圓照寺殿使者伊藤伊兵衛香袋一箱を進上。是は先頃御新知の御禮なり。毘沙門堂門跡の使僧今小路式部を以て香袋一箱、是は先頃御弟子の宮へ賄料給はる御禮なり。  
 一、廿三日に女院御所御違例に依りて、稻葉美濃守を京都へ遣さるに依りて、黄金五十枚、時服十、御馬を給ふ。且亦御前に於て御掛硯一つ拜領、此内の物を知らず。御手自御召の御羽織を下さる。

一、法皇御所へ、御伽羅二本、卷物二十、御屏風一雙琴臺書畫古法眼

一、本院御所へ、色絲百斤、八丈鳥織五十端。

一、女院御所へ金一分、一萬切伽羅二本、御屏風二雙一雙は月稻粟田口筆、柳櫻土佐筆、一雙は吉野龍田狩野養下筆、八丈鳥織二百端。右の通り進らせらる。

一、廿三日に江府大霰降る。

一、廿七日に土岐山城守二男伊豫守を總領職に仰付けらる。是は嫡子左京亮病氣故、願に依りてなり。

法皇御所へ進上  
本院御所へ進上  
女院御所へ進上



- 一、廿八日に田村隱岐守遺領三萬石相違なく、嫡子右京大夫に給ふ。
- 一、六月朔日に御小性組番頭土岐伊豫守跡役を朽木和泉守に仰付けらる。
- 一、九日に田村右京大夫跡目の御禮として、御太刀・銀馬代・黄金十枚・時服五を獻上。同じく田村隱岐守遺物として、御太刀高木貞宗代金十五枚を差上ぐる。土岐伊豫守總領職の御禮として、御太刀・銀馬代・時服三を獻上。水野織部右衛門大夫嫡子初ての御禮として、御太刀・銀馬代・時服五を獻上す。

稻葉美濃守大坂城代御免

女院御子薨去

- 一、十一日に京都に於て稻葉美濃守宅へ、青山因幡守を招きて、連々願の通り大坂御城代御免の旨を演達す。是は稻葉美濃守上京の序てを以つて仰遣さるなり。
- 一、十五日未の刻に女院御所薨御。御法名東福門院殿皇太皇后源數子と申し奉る。〔和カ〕

御辭世

むさし野の草葉の末にやどかりて都の雲にかへる月かけ

右御葬禮は泉涌寺、御法事は般舟院にて御執行なり。同日に雲州松平出羽守城下出火、侍屋敷町屋とも二百軒餘焼失。

太田攝津守大坂城となる

- 一、十九日に太田攝津守を大坂御城代に仰付けらる。依りて御加増二萬石、都合五萬五千石なり。
- 一、廿一日に久保吉右衛門死去。
- 一、廿五日に松平但馬守直富卒去。
- 一、廿七日に圓滿院新門繼目の御禮として、使者を以つて紗綾三卷・御太刀目錄を進上。東門跡へ舍弟猶子に仰付けらる。御禮として使者を以つて二種一荷を進上なり。

松平采女隱居

本多佐渡守死去

- 一、廿八日に東福門院、來月三日より御法事始まるに依りて、五萬石以上より京都へ御香奠遣すべし由なり。
- 一、七月七日に木下内匠死去。
- 一、十日に松平采女願の通り隱居。家督相違なく嫡子半三郎に仰付けらる。
- 一、十一日に太田攝津守御加増の御禮として、御太刀目錄・金二十枚・時服十を獻上。
- 一、十三日に本多佐渡守死去。



高巖院三  
回忌

一、晦日に太田式部領知五千石遠州濱松領たるに付いて、同國の内にてかへ下さる。  
同日に松平阿波守綱道阿州に於て卒去。

一、八月五日に高巖院殿三回御忌の御法事、今日結願に付いて、御名代として上野へ  
大久保加賀守參詣。且亦御布施として日光御門跡へ白銀五百枚、其外僧中へ銀二

柳川領水  
損

十枚・十枚・五枚を給ふ。同日に筑後柳川領水損、所謂

一、高四萬四百廿石餘潮入 一、堤一萬五百六十九間崩る

一、倒家二千七百廿九軒 内三十六軒は侍屋敷 八軒は寺社 四十軒は足輕以下二千六百四十五軒は町人・百姓

一、流死男女共に七人 一、馬十七匹

熊本領水  
損

一、同日に肥後熊本領水損、所謂

一、田畑總高七萬六千五百七十石餘 一、塘六萬千八百九十五間 行程にして廿八里餘なり

一、井樋 二 一、船大・小二百三十二艘

一、潰家一萬三千三十九軒 一、溺死三人・流馬三匹

小倉水損

一、同日豊前小倉水損、所謂

一、潮入田畑百十町八反 一、海邊の土手一萬百十四間

一、潰家二千八百四十二軒 一、城廻塀破損 以上

一、八日縁組仰付けらるゝ面々、所謂、

織田山城守娘を松平彈正忠 備前守男 へ 本多下野守娘を松平右京亮 主殿 へ

松平九十郎娘を永井伊賀守へ 永井信濃守養女を森對馬守へ

田村右京大夫妹を永井日向守 市正 へ 南部信濃守娘を青山石之助 大藏少輔男 へ

松平佐渡守娘を植村大膳 志摩守男 へ 永井佐渡守娘を阿部七三郎 播磨守二男 へ

一柳權之助娘を土屋備前守 兵部少輔男 へ 池田數馬伯母を竹中主殿 左京男 へ

松平久馬助娘を水野肥前守 周防守男 へ 井上太左衛門娘を長谷川大膳 長三郎男 へ

阿部四郎五郎娘を竹中久五郎 監物子 へ 岡野孫九郎娘を高林與七郎へ

桑山伊兵衛娘を石尾織部 七兵衛男 へ 遠山半左衛門娘を松波梶平へ

大岡五郎右衛門娘を小出縫殿へ 牧野遠江守娘を水野縫殿 對馬守男 へ

一、十日に松平阿波守江府の屋敷へ上使板倉石見守を以つて、御香奠白銀百枚を下

諸士縁組  
仰付けらる



土岐山城  
守隠居

一、十二日に菊亭大納言殿息女を水戸少將殿へ縁組仰付けらる。是れ水戸宰相殿願に依りてなり。

一、十六日に土岐山城守願の通り隠居。家督の儀は相違なく嫡土岐伊豫守に給ふ。御勘定頭岡部角左衛門御先手渡邊吉左衛門、願の通り御役免。

一、十七日に江府地震甚し。

一、十八日に青山因幡守領知の事、遠州濱松へ所替を仰付けらる。

京畿大雨  
増水

一、去る四日・五日兩日ともに京・大坂甚雨に付いて、加茂川・淀川・宇治川・桂川・大和川、其外所々の川々増水の由。

一、廿一日に松平若狹守へ但馬守遺領五萬石を相違なく給ふ。

一、廿八日に松平若狹守繼目の御禮として、金二十枚・綿百把を献上。同じく松平但馬守遺物として御刀備前眞守  
代金廿枚を差上ぐる。土岐伊豫守家督の御禮として、金十枚・時服

五を献上。同じく土岐山城守隠居の御禮として、金馬代を進上。且亦山城御刀城州  
兼長

代金十  
五枚を差上ぐる。毛利元丸日向  
守男初ての御禮として金馬代・時服三を献上。同日に戸

田相模守死去。

尾張中將  
殿息卒去

一、九月一日に尾張中將殿御息五郎八殿卒去。

一、二日に竹中左京死去。

一、九日より十日迄水戸領雹雨降る。依りて田畑等損亡多し。

一、十三日に脇坂中務少輔嫡子市正病者に付いて、二男主殿を總領職に仰付けらる。是れ願に依りてなり。

甲府宰相  
綱重逝去

一、十四日に甲府宰相綱重卿逝去。揚生院殿と號す、傳通院に葬る。

一、十六日に松平左兵衛督綱平室卒去。是れ紀州頼宣卿御息女なり。

一、十八日に泉涌寺へ四百石、般舟院へ百石御新加なり。

一、二十日に甲府中將殿へ上使土屋但馬守を以つて、御香奠白銀千枚を遣さる。

清泰院殿  
廿三回忌

一、廿三日に清泰院殿廿三回忌に付いて、傳通院にて御法事あり。依りて御名代として稻葉美濃守を以つて、御香奠白銀二百枚を遣さる。



一、十月二日に東福門院の御遺物として、御手鑑・御掛物大猷院殿  
自畫自贊・御卓・御屏風一雙雅樂  
助筆・十炷香具を進らせらる。

一、六日に日光門跡京都歸の御財産として、尊圓親王消息軸物・勅法御薰物五種・縞珍五卷を進上なり。

松平新太郎光政室卒去

一、七日に松平阿波守遺領廿五萬石餘、蜂須賀熊太郎に給ふ。同日に松平新太郎光政室卒去。是れ天樹院殿御息女なり。

一、十五日に蜂須賀熊太郎繼目の御禮として、眞の御太刀眞守代  
金五枚・黄金五十枚・綿二百把を献上。同じく松平阿波守遺物として、御脇指眞宗代金  
七十五枚・御葉茶壺木  
精を進上ぐる。

甲府中將家督相續

一、廿五日に甲府綱重卿御家督を中將殿へ仰付けらるゝ由、酒井雅樂頭・稻葉美濃守を以つて仰遣さる。

一、十一月朔日に、甲府中將殿繼目の御禮として、御太刀兼平代  
金七枚・白銀五百枚・時服二十を進上なり。甲府宰相殿遺物として、御刀備前守家代  
金五十五枚・京極茄子の御茶入・内赤の盆・御葉

茶壺鶉を差上げらる。順性院殿甲府宰相  
の御母堂より縮緬十卷・二種一荷を進上、是は甲府中

將殿今日御禮仰付けらるゝに付いてなり。保科十四郎筑前守  
舍弟初ての御禮として、御小袖四・金馬代を献上なり。

一、六日に新御番頭天野清兵衛跡役内藤十郎兵衛、石川仁右衛門跡役朝比奈新太郎に仰付けらる。

一、十五日に能勢日向守、尾州鳴海に於て死去。

一、廿五日に松平龜之助播磨  
守男初ての御禮として、御太刀・馬代・御小袖四を献上。

一、廿八日に松平新太郎室の遺物として、爲之の歌書を差上ぐる。

一、十二月三日に仙石治左衛門を盜賊改奉行に仰付けらる。

一、六日に跡目相續の面々、大澤兵部大輔男右京大夫 本多土佐守男右衛門

同人二男本多隼人是は  
分知能勢日向守男次左衛門 竹中左京男主殿等に仰付けらる。

外數輩ありと雖も省く。

一、八日に大久保加賀守因州に於て死去。

一、十三日に昨日水戸少將殿婚姻相整ふに付いて、大久保加賀守を以つて御祝儀を

相續の諸士

大久保加賀守死去



遣さる。所謂水戸宰相殿へ三種二荷、同じく少將殿へ白銀百枚、小袖二十、同じく少將殿簾中へ金十枚、綿二百把を遣さる。脇坂主殿總領職仰付けらる。御禮として銀馬代・時服三を献上。

諸士縁組  
仰付けらる

一、十九日、縁組仰付けらるゝ面々。

毛利甲斐守娘を森萬右衛門へ 南部信濃守娘を南部遠江守へ

本多飛驒守娘を五島飛驒守へ 松平内匠頭娘を安藤頼母次右衛門男へ仰付けらる。外

に數輩ありと雖も爰に省く。

甲府中將  
元服

一、廿一日に甲府中將殿元服に付いて、上使土屋但馬守を以つて、白銀三百枚時服

二十を遣さる。甲府殿御禮として眞の御太刀了戒代金二枚五兩・綿二百把を献上。御目見の上に

て御腰物相州行光代金五十枚を遣さる。同日に峰須賀熊太郎元服の御禮として、眞の御太刀則光代金

十枚・時服十・黄金三十枚を献上。御目見の上にて從四位下に敍せらる。松平淡路守に

改め、御字を給ひ綱矩と號す。且亦御腰物備前安吉代金廿枚を給ふ。繼目の御禮として竹中主殿

金三枚、本多右衛門金三枚、遠山七之助半九郎男金三枚、大澤右京大夫金三枚を献上。同

峰須賀熊  
太郎元服  
の御禮

じく大澤兵部大夫遺物として、御刀二字國俊代金七枚五兩を差上ぐる。

一、廿八日に從五位下諸大夫に仰付けらるゝ面々、

脇坂主殿中務少輔男・淡路守、酒井岩千代雅樂頭三男・下野守、諏訪右京因幡守男・安藝守、島津又吉郎を

式部少輔、植村萬之助右衛門佐男・出羽守、大村主膳因幡守男・備後守、土井式部則ち式部少輔、板

倉左京石見守男を越中守、水野織部右衛門大夫男を(豊前守カ)・朽木帶刀伊豫守男・民部少輔、水野數馬備前

守に任ず。同日布衣仰付けらるゝ面々、石川又四郎・伏見勘七郎・加藤源左衛門・松平

仁右衛門・一色頼母・阿部治兵衛・高木總十郎・今村彦兵衛等なり。

一、廿九日に堀田備中守五千石御加増を下さる。

諸士諸大  
夫に仰付  
けらる

布衣に任  
ぜらるゝ  
諸士

玉露叢 卷第廿九 終



# 玉露叢 卷第三十

## 延寶七年

一、正月十四日に、松平九十郎に丹波筋檢地仰付けらる。依つて今日九十郎家臣とも白銀・時服を給ふ。

熊本の火災

一、十五日に細川越中守綱利城下肥後熊本出火、侍屋敷七十五軒焼失。

跡役任命

一、十九日に御先手大久保八郎左衛門跡役を林藤四郎に仰付けらる。同日御歩行頭松平新五左衛門跡役を大岡忠右衛門に仰付けらる。

一、二月十五日に、青山因幡守死去。

大和筋檢地

一、十六日に本多出雲守へ大和筋檢地仰付けらるに依つて、今日出雲守家臣共に白銀・時服等を給ふ。

當今抱瘡御煩

一、當今去る十三日の夜より少々御頭痛、同十五日の曉晩イより御抱瘡を遊ばさる。

一、廿一日に牧野攝津守を以て、禁裏へ山水の軸物一卷・御盃一・緞子十卷を進らせらる。

一、廿八日に立花飛驒守養女を松平肥前守へ縁組仰付けらる。

一、三月朔日に、當今御酒湯を沐せらる。

一、四日に京都町奉行能勢日向守跡役を井上太左衛門諸大夫に任ずに千石の御加増にて仰付けらる。御鐵炮頭井上太左衛門跡役を佐野吉之丞に仰付けらる。

役替の人々

一、五日に先頃松平日向守へ播州筋の檢地を仰付けらるゝに依つて、今日彼家臣共へ白銀・時服等を給ふ。

播州筋檢地

一、七日に當今御抱瘡御快然に付いて、御祝儀として大澤兵部大輔を以て、

當今へ 一、白銀五百枚 一、御小袖三十 一、鶴一 一、昆布一箱 一、鯛一箱

一、御樽三荷

法皇御所へ

一、綿二百把 一、黄金三十枚 一、昆布一箱 一、鶴一 一、御樽

今上帝瘡瘡平癒に就き獻上の品



一荷 一、鯛一箱

本院御所へ 一、白銀二百枚 一、鶴一 一、昆布一箱 一、鯛一箱 一、御樽二荷

新院御所へ 右同斷

一、女御御方へ 右同斷

女五宮へ 一、白銀百枚 一、御肴一箱 一、御樽一荷

右の通り進ぜらる

一、白銀五十枚 鷹司關白 一、白銀三十枚 花山院前大納言

一、白銀三十枚 千種前大納言 一、白銀二十枚 今出川右大將

一、白銀二十枚 柳原前大納言 一、右同斷 持明院前相公

一、右同斷 中園前相公 一、白銀三十枚 勾當内侍

一、白銀二百枚 總女中

右之通り遣さる。

一、十三日に紀伊中將殿御袖留めらるゝに依りて、昨十二日に奥方より御祝儀とし

て、御樽肴を獻ぜらる。

一、十五日に大坂御城の加番を内藤右近大夫・大關信濃守・山口修理亮・鳥居左京亮へ仰付けらる。

一、十七日、水戸少將殿疱瘡を煩はせらる。同日に戸田左門へ濃州筋檢地仰付けらるゝに依りて、今日彼家臣等へ白銀・時服等を給ふ。

一、四月二日に土屋但馬守殿卒去。

一、七日に丹羽左京大夫光重、願の通り隱居。領地十萬七百石嫡子若狹守に給ふ。

一、十六日に木下淡路守、在所に於て死去。

一、十八日に戸田越前守へ京都所司代役料として、一萬俵を給ふ。

一、廿二日に今度參向の勅使・院使醍醐少將御馳走として、角田川へ遊興の儀仰出さる。

一、廿六日に九鬼和泉守へ先頃攝津邊檢地仰付けらるゝに依りて、今日彼家臣共へ相濟御褒美として、白銀・時服を給ふ。同日に丹羽左京大夫隱居の御禮として、狸々

大坂加番  
任命

水戸少將  
疱瘡を煩  
濃州筋檢  
地  
土屋但馬  
守卒去

勅使斐應

隱居繼目  
の獻上品



緋五間・黄金馬代・龜山御葉茶壺御刀久國代を差上げらる。同日に若狹守繼目の御禮として、金三十枚・綿二百把を献上。同じく青山和泉守家督の御禮として、金二十枚・綿百把を献上。同因幡守遺物として、御茶入九壺・御刀兼光代金を差上ぐる。同日に先頃小出攝津守・石川若狹守へ丹波筋和泉邊の檢地仰付けらるゝに依つて、今日彼兩家來へ御褒美として白銀・時服等を給ふ。

一、去る廿四日に本多中務大輔政長、和州郡山に於て死去。

一、五月五日に館林相公綱吉卿若子誕生。

一、十二日に館林殿若子へ七夜の御祝儀として、公方家より品々を進らせらる。所謂若子へ御守脇指左文字代金廿五枚白銀百枚・三種二荷・館林相公へ白銀三百枚・時服廿三種

二荷・同簾中へ白銀二百枚・卷物二十三種二荷・桂昌院殿へ黄金十枚・縮緬二十卷。

右の通り遣さる。

館林殿陪臣室賀下總守・杉浦大隅守・牧野備後守・曾我伊賀守・金田遠江守へ白銀三十枚・時服五宛、室賀甚四郎・本庄平十郎・黒田惣右衛門・杉浦兵九郎・本庄市郎左衛

館林網吉  
卿若子誕  
生  
館林殿若  
子の儀に付  
の儀に付  
き公方家  
より御祝  
品の

江戸火災

火消役任  
命

門に白銀二十枚・時服四宛、向坂清左衛門・前田孫市郎・植村五郎八・押田三左衛門に白銀十枚・時服三宛、戸田半七郎・柘植五太夫・曾我十左衛門・内藤十兵衛に時服四宛、田澤治左衛門・梶新右衛門・山口五郎兵衛に時服三宛、石田策庵・半井宇庵・喜多村安齋・小島圓齋へ白銀廿枚づつ、且又女中古屋未以呂波へ白銀廿枚宛、加武局・山崎局へ白銀廿枚宛、澤野天留へ白銀十枚宛、總女中へ白銀二百枚を給ふ。右の儀に付いて、館林宰相殿より御太刀目録・白銀二百枚・綿百把を献上なり。

一、去る十一日に、大坂町奉行石丸石見守大坂に於て死去。

一、廿九日に江府堺町より出火。數町焼失依つて、俄に溝口信濃守・南部遠江守・津輕越中守・戸澤能登守へ火消役を仰付けらる。兩國橋をば京極備中守なり。右の面々新規に奉書を以て仰付けらる。

一、六月十一日ニイに、土屋但馬守數直遺物として、御太刀備前兼光代金廿枚御繪布袋一幅癡純を同姓相模守より差上ぐる。

一、十四日に大坂町奉行石丸石見守跡役を、設樂市左衛門に御加増千石を給ひ仰付



播州筋檢地

けらる。

一、十五日に先頃松平大和守直矩へ播州邊檢地仰付けらるゝに依つて、家臣共へ今日白銀・時服等を給ふ。

一、十八日に本多兵部少輔康將願の通り隱居、本領七萬石の内六萬石本多隱岐守康

慶下總守一萬石は本多織部忠恒兵部少輔に分ち給ふ。是は願に依つてなり。同日に加

加爪甲斐守直澄際イ願の通り隱居。嫡子土佐守直清へ家督異事なく給ふ。同日に照高

院門跡薨去。

照高院門跡薨去

一、十九日に甲府中將綱豊卿へ近衛左府公の姫君縁組仰付けらる。同日に稻葉丹後守義雅女を、松平隱岐守定直へ縁組仰付けらる。

一、廿六日に本多平八郎政武三萬石御加増、都て十五萬石。和州郡山より奥州福島へ得替を仰付けらる。

得替の人々

一、同日に松平日向守信之へ一萬五千石御加増にて都合八萬石、播州明石より和州郡山へ得替なり。

一、同日に本多出雲守政利へ三萬石御加増、都合六萬石にて播州明石の城主に仰付けらる。

一、同日に本多肥後守政直内記政勝一男本高一萬石にて播州完栗そうへ得替なり。同日に久世

久世大和守廣之卒去

大和守廣之卒去。同日に先頃山州邊檢地を石川主殿頭に仰付けらるゝに依つて、御褒美として家臣共へ白銀・時服等を給ふ。

一、廿九日に久世出雲守重之へ上使堀田備中守を以て、香奠白銀二百枚を下さる。

一、同月に仰出さるゝは、日光山參詣の儀四品以上に限るべし。諸大夫の面々家督

日光參詣の定め

相續の節たりとも無用たるべし。尤部屋住の面々も右同斷。

一、七月十日に、土井能登守利房堀田備中守正俊兩人を御座の間へ召して、奉書判

形の列を仰付けらる。其上一萬五千石宛御加増を給はる。兩輩都合四萬石六イなり。

同日に松平因幡守基綱・石川美作守乘政兩人へ五千石宛御加増、都合石美作守一萬石因幡守一萬二千石美作守一萬石御

旗本の執事を仰付けらる。且又因幡守は御數寄屋方、御厩方美作守は御腰物方、御

鷹支配なり。

加増の人々



河州檢地

縁組仰せ  
付られし  
人々

一、十二日に御加増の御禮として、松平日向守時服十黄金廿枚、本多平八郎時服二十黄金三十枚、本多出雲守時服十黄金廿枚を献上。  
 一、十八日に本多平八郎願に依つて、金三萬兩拜借仰付けらる。是れ得替に付いてなり。

一、廿一日、先頃河州邊の檢地を、本多兵部少輔に仰付けらるゝに依つて、今日家臣共へ白銀時服等を御褒美として給ふ。

一、廿二日、縁組仰付けらる面々。

織田山城守女を高木肥前守へ

堀田備中守女を阿部長吉郎へ

岡部内膳正女を堀三四郎へ

毛利日向守女を井上筑後守へ

松平志摩守女を新庄主殿へ

堀田五郎左衛門女を加藤左京へ

築田隱岐守女を筒井彌十郎へ

石川彦五郎女を安田久助へ

小出甚左衛門女を加藤平八郎へ

三好備前守女を渡邊兵九郎へ

諏訪備前守女を神保二郎兵衛へ仰付けらる。

隠居分地  
の御禮

一、同日に井上太左衛門、從五位下丹波守に任ず。

一、廿八日に金廿枚時服十、本多隱岐守家督の御禮として献上。本多織部分知の御禮として、金五枚時服三進上。同日に本多兵部少輔隠居の儀に付いて、金馬代時服十、御脇指左文字代金四十枚を差上ぐる。同日に土井能登守、堀田備中守御加増の御禮として、金十枚時服五宛。松平因幡守、石川美作守、金三枚時服五宛を献上。

一、八月三日に、井上十右衛門を福島領本多平八郎へ引渡しのために遣さるべき由、一、五日に中根日向守死去。

一、六日に久世大和守遺領五萬石相違なく嫡子出雲守に給ふ。且又大和守願の通り、新田三千石猶子平九郎に分ち給ふ。

一、八日に毛利日向守就隆死去。

一、十二日に稻葉石見守正久、三枝攝津守守俊兩輩を御側衆に仰付けらる。同日に大番頭攝津守跡役を稻垣備後守、御書院番頭稻葉備後守跡役を池田帶刀、御書院番頭稻葉石見守跡役を岡部隱岐守、御小性組番頭岡部隱岐守跡役を瀧川若狹守、池田

役替人々



館林徳松殿御宮參

帶刀跡役を森川攝津守へ仰付けらる。

一、十三日に館林徳松殿御宮參、則ち大奥へ入せられ御祝儀として、白銀二百枚、時服二十を進上。御對顔の上御腰物大和包永代金五枚を公方家より遣さる。同日に能勢攝津守事出雲守に改む。

一、十四日に木下淡路守利貞遺領、相違なく二萬五千石の内、二萬三千石嫡子木下宮内、二千石二男金森内記に分ち給ふ。是れ願に依つてなり。

一、廿八日に土井能登守堀田備中守を召して、「來月より御用番相勤め、連判等仕るべき由」上意なり。

一、九月五日に酒井日向守忠能事、駿州の田中へ一萬石御加増、都合四萬石にて得替仰付けらる。西尾隱岐守忠成元高二萬五千石にて、信州小諸へ所替仰付けらる。

一、十一日に西尾隱岐守へ金子三千兩拜借を仰付けらる。

一、十三日に久世出雲守土屋相模守兩輩へ御奏者役を仰付けらる。同日に京極信濃守願の通り、甥を養子に仕るべき由。

青楊院殿  
一回忌

一、同日に青楊院殿甲府相公一周忌にい付て、傳通院にて御法事有り。依つて御香奠白銀二百枚を上使稻葉美濃守を以て遣さる。

一、廿日に宇治の萬福寺の住木庵、願の通り隱居。後住に弟子惠林を仰付けらる。

一、廿五日に藤堂主馬・能勢惣十郎・宮城監物・田中孫十郎を御目附役に仰付けらる。同日に彦坂壹岐守大目附に仰付けらる。

一、廿七日に本多肥前守所替に付いて、白銀百貫目拜借なり。

一、十月四日に設樂市左衛門を従五位下肥前守に任ず。

一、十八日に毛利元丸繼目の御禮として、黄金十枚・綿百把を献上。同じく日向守遺物として、御刀備前長義代金十枚・時服献上。

一、廿七日に相馬出羽守、奥州中村に於て死去。

一、同月に西本願寺江府に於て再興成る。

一、十一月十九日に東本願寺隱居。

一、廿七日に隱居跡目の面々、有馬左衛門佐願に依つて隱居。本高五萬石嫡子有馬

江戸西本願寺再興

隱居の人々



家督分地の御禮

周防守、内新田千八百石二男有馬求馬、新田千石三男七之助に分ち給ふ。是又願に依つてなり。土方河内守隱居。本高二萬石の内一萬八千石土方監物、二千石次男土方民部へ分ち給ふ。是れ河内守願に依つてなり。

一、十二月六日に石谷長門守禁裏方役人願ひの通り役御免。

一、十日に家督の御禮として、有馬周防守金廿枚・綿百把、分知の御禮として、有馬求馬・同七之助兩人金馬代を献上。同左衛門隱居の儀に付いて、御刀備前助成代金廿五枚・時服三

金馬代を差上ぐる。同日に家督の御禮として、土方監物金十枚・時服三を献上。土方河内守隱居の儀に付いて、御脇指粟田口國吉代金十五枚・金馬代を差上ぐる。本多忠左衛門千石の

御加増にて、駿河御城番土方主馬跡役に仰付けらる。

一、十一日に土屋兵部少輔本領四千石の内、三千石嫡子備前守、千俵二男土屋左門に分ち給ふ。是は願に依つてなり。

一、十五日に縁組仰出さるゝ面々。

森内記女を松平近江守へ、有馬左衛門佐女を牧野左京へ、秋月佐渡守女を織田式

役替の人々

部へ仰付けらる。此外は省く。

一、十八日に東采女へ、相馬出羽守遺領六萬石相違なく給ふ。尤東氏を相馬と改む。同日に大岡五郎右衛門に千九百石の御加増を給ひ、都合三千石にて御勘定頭に仰付けらる。一、部角左衛門跡役なり。同日に長崎奉行岡野孫九郎跡役を川口源左衛門に五百石の御加増を給ひ仰付けらる。同日に林藤四郎・加藤勘右衛門・笈五郎太夫・鳥井源七郎に御先手を仰付けらる。

甲府中將の婚禮

一、廿二日に甲府中將殿御婚禮に付いて、上使土井能登守を以て、甲府中將殿へ白銀三百枚・時服廿三種二荷、順昌院殿へ金廿枚・緞子廿卷・三種二荷を遣さる。且又岡野肥前守・戸田伊勢守・岡部出羽守へ白銀五十枚に時服五宛、渡邊吉左衛門に白銀三十枚・時服五、藤枝丹波守に銀三十枚に時服三、御用人六人に銀二十枚に時服三宛、御納戸衆十八人に銀二十枚・時服二宛、御小納戸衆十二人に銀二十枚に時服二宛、諏訪主殿・山口孫二郎・戸田十左衛門・藤枝帶刀に白銀二十枚宛、女中小倉に銀廿枚、富小路・久米路・山野に銀十枚宛、上臈の方介副の局三人へ銀二十枚宛、サシへ銀十枚、



總女中へ銀二百枚、奥家老に銀十枚、時服二つ下さる。

一、廿六日に繼目の御禮として相馬采女、御太刀、金馬代、黄金二十枚、御小袖十献上。

同出羽守遺物として御刀備前行光代金卅枚を差上ぐる。

一、同日に甲府中將殿より、婚姻相濟み御禮として、御太刀國綱代金七枚、黄金三十枚、綿二百

把を献上。依つて公方家より御脇指備前助直代金五十枚拜領なり。

一、廿七日に官位昇進の衆中、松平淡路守綱矩從四位下侍從に任ず。土井能登守利

房、從四位下に敘す。堀田備中守正俊從四位下に敘す。畠山二郎四郎基玄從四位下

民部大輔に任ず。由良新六頼繁從四位下信濃守に任ず。松平龜之助頼寧從四位下

肥後守に任ず。是は松平播磨守頼隆男なり

從五位下諸大夫に仰付けらるゝ面々。

本多平八郎政武中務少輔 牧野老之助忠郷駿河守 相馬采女昌胤彈正忠

木下宮内利庸肥後守 土方監物雄隆山城守 松平頼母直能美濃守

本多織部忠恒伊豫守 小出右京吉國大和守 松平與十郎忠易安房守

官位昇進の人々

諸大夫に任ぜらるゝ人々

松平巳之助照貞筑前守 保科兵部正祥兵部少輔 松平傳三郎重宗但馬守

渡邊平左衛門綱太甲府殿陪臣長門守 松平八左衛門康兼水戸殿陪臣駿河守に任ず。

一、廿九日に御加増を給ふ面々。大久保山城守二千俵、酒井壹岐守千俵、柴田和泉

守千俵、青山信濃守千俵、稻葉出羽守千俵給ふ。同日に鍋島加賀守直能、願に依つ

て隠居仰付けらる。

加増を給はる人々

玉露叢卷第三十終

延寶七年



# 玉露叢 卷第三十一

延寶八年庚申の元朝より一年の吉凶を考へる

早馬 淨齋

凶年出水  
の徴

諸人卒去  
の徴

一、當年は世間勝れず田畑不作に、別けて麥・大豆半吉、萬尾衣服求めがたし。正月、雨雪・霰等降り來るあり。米穀騰り下り是有るべし。二月、雨繁く水出る事あり。然りとていへども春夏早魃して、末は又雨繁し。六七月、大水出、少し兵亂がましきことあり。大名多く卒去就中高位・高官或は貴僧・高僧、或は三台家頓死共謂つべし。或は皇后産前後、或は溫病して死去する婦人多かるべし。小兒時行病を得て急に死すべし。九月末、天色に不思議はあるべし。世上に甚だ珍説時行ること有るべし。或は流罪の徒、名士多かるべし。或は東西の國に當りて、士民少々むづかしき事之れを企つ。

火付召捕  
らる

松平越後  
守より斷  
々らるゝ面

訴訟の事あるか。自然四月の七日・八日・十七日・十八日・廿七日・八日、此六日の内雨降らば夏中水出づべし。又云ふ、七月三日・四日・十三日・十四日・廿三・四日雨降らば秋中水出づべし。又云ふ、五日・六日・十五・十六日・廿五・六日雨降らば、冬中雨降る事多かるべし。又云ふ十月七・八日・十七・八日・廿七・八日雨降らば、冬中雨雪降り、五穀賣買高値なるべし。當年は見がたしと雖も、大火司天少陽相火して泉に在るあり。厥陰風・木化風故油斷成らざる年なり。別て三八丁・三八軒目など、住宅の使用心之れあるべき者なり。時行病は或は傷害、或は眼病・腫物の病難之れあるべきか。

一、二月四日に火付共四人之を召捕る。江戸中を引渡し、板橋に於て火灸に仰付けらる。是れ三ヶ年以前に、極月廿七日に、神田須田町へ附火仕候族とも、亦訴人千住の仁兵衛とも云ふ者也。右四人の名をば族狐吉右衛門・黒の七兵衛・小天狗忠三郎・陰者傳兵衛と云ふ悪黨どもなり。彼等何れも板橋の生れ故、右の處にして、右の通りに行はれしなり。

一、松平越後守殿より斷り之れある族共の事。

延寶八年庚申の元朝より一年の吉凶を考へる



小野里 左助 水科 新介 水科 小彌介 岡島 將監  
島島木工大夫 多賀 半逸 服部 與九郎 柳木 半助

右八人の者ども、不届の儀之れあるに付いて、去年暇を遣し、江戸日本橋より二  
十里四方追放申付け候。右障の内を自然立廻り候はゞ、召捕らせられ申すべく  
候。品により討捨にも申付くべく候。届けのため申入れ候 以上

二月五日

越後中將

島田出雲守様

宮崎若狭守様

右の使者伊藤善八・林新藏此兩人なり。

當延寶八庚申前代未聞なる凶年と云々。

一、法皇御所崩御一、女院御所崩御

一、日門・知門兩門主薨御

一、院の女御・新院の女御兩女御薨御

一、六條の局逝去是は昆沙門堂御門跡の御弟子の宮の御母堂なり

武家にては

一、征夷大將軍源家綱公薨御

一、駿府御城代松平豊前守死去

一、江戸町奉行宮崎若狭守死去

一、攝州高槻城主永井市正死去

一、三枝隱岐守死去

一、戸田備後守息男本多善左衛門死去

一、堀田上野介自害

一、永井信濃守・内藤和泉守此兩人於増上寺殿有院様御法事の節喧嘩にて討果す

一、小出瀬兵衛死去

一、多羅尾左兵衛死去

一、伊奈半左衛門死去

一、藤堂和泉守養女死去

一、大久保安藝守内室死去

一、小笠原土佐守母儀死去

一、堀田豊前守娘死去

一、京極備中守内室死去

一、伊藤信濃守娘死去

一、田中孫十郎娘死去

一、新見七右衛門内儀死去

一、三枝攝津守從弟

死去是は松平越後守殿の家來岡島壹岐守女房なり

右公家・武家共に月日の前後に構はずこれを記す者なり。此外に御改易・追放・御  
預色々の凶事等奥に見ゆ。

一、三月五日の朝より、奥州宇多郡の内加佐古といふ浦、是は同國中村の城主相馬  
殿領分と境目なり。其浦の潮海幅一町ほどなり。南への長さは知れず、北は亘理郡



鶴志濱を境とし、海の面紅になり申候。其潮をかぎ候へば殊の外に臭きなり、此海常に大浪打つ處なれ共、紅になり候ては浪平かなり。右仙臺へ注進の趣件の如し。

一、七月十九日に松平淡路守綱矩事、閉門これを仰付けらる。是は其以前堀田上野介正信を養父阿波守綱通へ御預の處に、今年五月八日、大樹家綱公薨御の後、上野介正信遺文を認め、阿州に於て自害致さるゝに付いてとなり。只今迄延引の儀は御法事御執行旁々に付き、御用繁多故と云々。

松平綱矩  
閉門



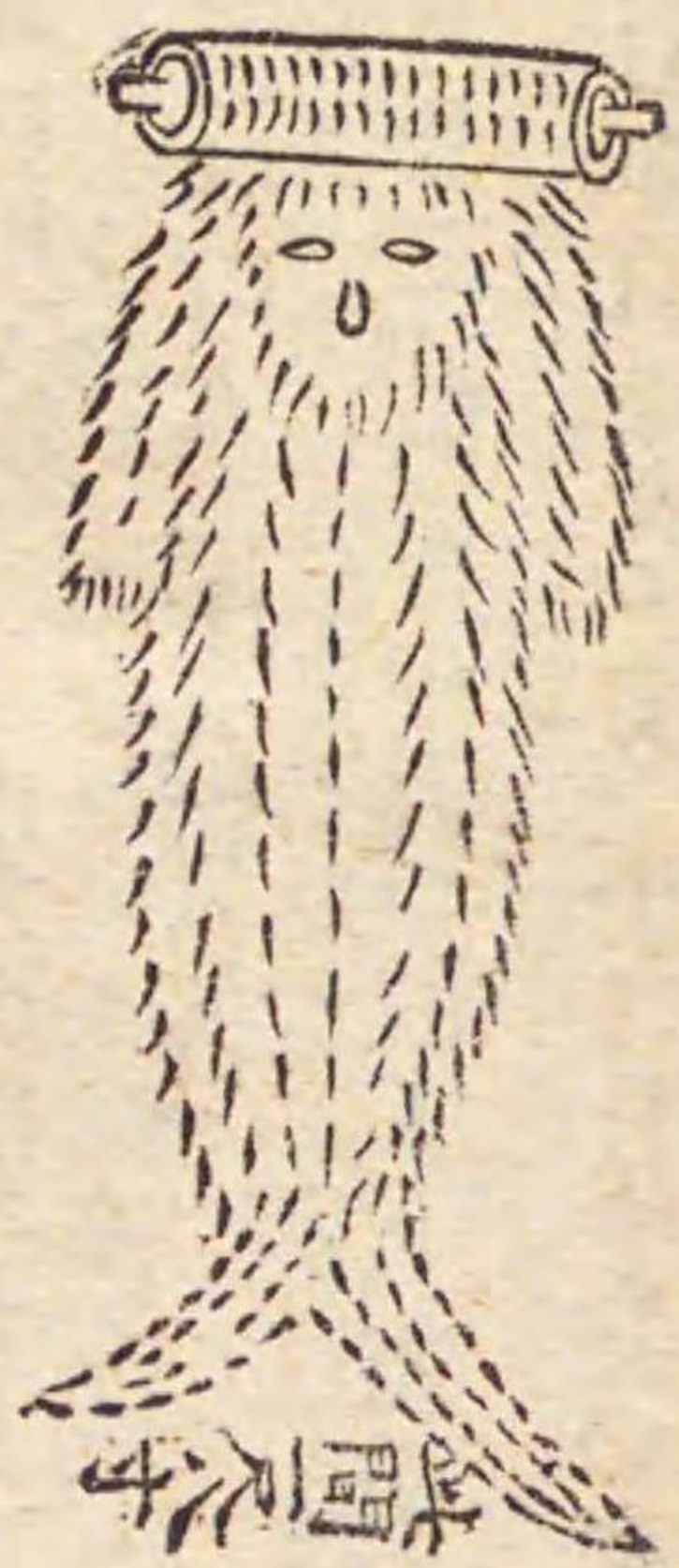
牙上下に生へ申候

總身は白く赤く青くして三色なり

但し髪は生へ申候顔の内にも毛生へ申候

一、右は延寶八年七月、南都に於て二子産みたる其繪圖此の如し。  
一、左の魚延寶八年八月に、仙臺領荒濱にて漁師引上ぐるなり。

目右同斷



目の幅一尺

尾左の方は三尺あり

魚の長さ一間三尺

右の方は一尺あり

小長谷次郎左衛門  
追放せらる

一、小長谷次郎左衛門事大久保右京亮組なり。父をば小長谷彌右衛門といひしが、當春浪人の忍清に討たれたり。彼忍清は兵法の師なり。次郎左衛門は彼が弟子たり。然れば稽古の其功積みて免印可等取るべき期に臨みければ、則ち其やうの紙竝に表紙等を師なりける忍清を頼みて調へけり。其後日を経て、其代銀を遣し給へと申候へども、心得たりと申候て、終に埒を明けざりし故、忍清事は浪人の身なれば、經師屋が思ふ處も恥ぢやしけん。色々理を責め申達しければ、結句さかさまに忍清が事を苦々しく父の彌右衛門惡口申候に付き、忍清堪忍致し難く、彌右衛門を

延寶八年

二七



討ちしなり。然して後忍清切腹すと云々。事終つて後、當九月に館林様御衆御進物番なりける田澤作左衛門が悴を、治郎左衛門が養子にしけり。此養子の儀御詮議の時、治郎左衛門が實子の由申上げ候に付き、虚言申し候故に、治郎左衛門儀御追放仰付けられ、身代三百俵なり。父彌右衛門は小普請なり。

嚴有院御  
法事に  
つき安堵  
の面々

一、九月四日、嚴有院様御法事に付いて、御赦免の面々、所謂

國安堵藤堂和泉守へ御預、丹後守嫡子京極近江守、同人二男寺島松之助、同人三男落合木工之助、南部大膳大夫へ御預、左近大夫嫡子高力伊豫守、真田伊豆守御預、同人二男同右衛門、御代官宮崎辨之助右何れも國御免。  
可被召出之旨 市左衛門子新見平右衛門、少將孫飛鳥井藤若

右の外町人二十人御免許。

彗星現は  
る

一、九月廿三日の夜の五つ前より、西南の方より、俄彗星出る。又此星を長庚星とも長勢星ともいふとなり。十二月十日の夜より出づるか。始めの程は其星より出でける白氣、細長く引きはへて、成程幽かなりしかども、彼星後には次第に上へくと登

坪内平左  
衛門息を  
殺したる  
草履取の  
一族斬殺  
せらる

り、本末は細くして中程にては其幅廣大になり、凡そ三尺の餘もあるべきかと思えたり。扱五つ過には其儘消えたり。右の彗星御代始めて廿四度出でしとなり。其内三度は大旱、又三度は洪水、七度は兵亂、十一度は火難にてありしとなり。

一、坪内平左衛門殿の息男治郎左衛門といふ人、閏八月十九日の朝八藏といひたる草履取を叱り給ひて後、彼者挨拶こそ悪しかりつらめ、立蹴に致されしとなり。其儀を下薦なれども無念にや思ひけん。其所にして主人を討つて立退さしを、召仕ども追駈けて是を捕へ、即時に寸々に斬つて捨給ひしを、父平左衛門殿此事を公儀へ申上げられ、彼主殺の八藏が従類どもを御穿鑿ありて、當九月末に残らず召捕つて、日本橋に三日晒し、斬罪に行はれ畢んぬ。謂ゆる其親類どもは、松平甲斐守殿知行所下總國香取大堀村の三郎右衛門、與四右衛門、此二人何れも八藏が兄也。一、八藏女房廿九歳 一、同人娘名をこまといふ九歳 せんといふ娘は六歳なり、以上二人なり。一、水野齋宮殿知行所川島村の與兵衛事、是も八藏が兄なり。一、同國妙藏寺の隠居の益朝事、是も八藏が兄なり。



以上七人内四人は<sup>兄な</sup>三人は妻と娘二人、右の族ども小塚原に於て悉く斬罪なり。

一、在田伊勢守事 將軍宣下の時虚病仕らるゝの由なり。

一、荒川長門守事<sup>初名七</sup> 是は稻葉濃州へ慮外致さるゝの由。

右の兩人ともに閉門之を仰付けらる。

一、十月二十一日に三千五百石兼松彌五左衛門、千二百石<sup>病死</sup>三宅内藏助、七百石奥津左

衛門

右三人駿府在番の節御城外へ罷出て、殊更御定より遠方へ相越し、夜陰に及び立歸り、其頭へも相断らず御法に背くに付いて、三輩ともに追放之を仰付けらるゝなり。右の三人御書院番なり。

一、多羅尾左兵衛事十一年以前に在所へ参り候節、其身の弟を猶子に願ひ奉り、其後に尾張殿へ奉公に出だし置き、今度末期に及び、右の弟を又跡式相續致させ度しとの儀不届なり。最前にも久世大和守方へ相達し、残る同役中へは、その儀に及びざる由なり、其上六十有餘の願ひ故、相立てられずと云々。

御書院番  
三人追放  
せらる

多羅尾左  
兵衛養子  
許されず

長谷川源  
介養子許  
されず

一、長谷川源介<sup>又は四郎兵衛又</sup>其實名不分明なり。右の源介事、一類中と不通故、養子の沙汰にも及ばざるの處に、當冬中山勘解由四男を坂本養庵取持ちて、首尾致させけると雖も、御吟味の上其儀非儀たるに付いて、領知召上げらるゝの旨、養庵へ老中之を傳達す。

一、長田九郎兵衛事、筋目の違ひたる養子仕候に付き御追放なり。<sup>右の外餘多此類ありと雖も之れを略す。</sup>

一、内藤和泉守金子は江戸に三萬兩、鳥羽に八千兩。右兩所合せて金三萬八千兩之れありとなり。

一、鳥羽に之れ有る武具・馬具等をば、其城に差置く可きの旨なり。此外の財寶をば家中の面々へ之れを下さると云々。之れに依つて悉く賣拂ひ金銀にして配分せしに、百石に付いて七分五厘に當りしとなり。

一、家中の面々鳥羽に之ある諸士の分、八月廿五日切に引拂ひ申す可き旨なり。

一、右の家來引拂ひ申す時、鳥羽兩御目附衆より相出され候手形の寫、左に之れを記す。

内藤和泉  
守がこと

内藤和泉  
家來鳥羽  
引拂ひの  
時兩目附  
より出さ  
れし手形